石見町文化財調査報告書 第17集

一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大地ノ元遺跡
（おおじのもと）

1999年3月

石見町教育委員会

序

石見町教育委員会では、島根県川本土木建築事務所の委託を受けて、平成７年から平成10年にかけて一般県道皆井田江津線道路改良工事予定地内の遺跡調査を行ってまいりました。本報告書は平成９年度に実施した「大地ノ元遺跡」の調査結果をとりまとめたものです。

この「大地ノ元遺跡」は、石見町だけでなく邑智郡の歴史を語る上で欠くことのできない中山古墳群の北側対岸に位置しています。また、本遺跡の周辺からは縄文土器片や銅鐸２個が出土しており、古代から脈々と続く人の営みが確認されております。

今回の調査により、竪穴住居跡４棟、土壙墓２基が確認できましたことに加え、礎石建物跡や「代田」と書かれた墨書土器が確認されており、集落跡とは異なった意味合いを深めております。

このように、前年度調査を行った清源那遺跡及び中山古墳群を含めてこの「大地ノ元遺跡」を鑑みますと、於保知盆地一帯における発展の過程を学習していく上でのひとつの指針となりえる貴重な遺跡であることは間違いありません。

ここに発掘調査報告書を発刊するにあたり、調査にお力添えをいただきました関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

石見町教育委員会

教育長　山　本　繁　文

例　言

1．本書は、一般県道江津線道路改良事業に伴い、石見町教育委員会が実施した大地ノ元遺跡発掘調査報告書である。

2．調査の組織は次の通りである。

調査主体	石見町教育委員会
調　査　員	寺脇　隆彦（石見町教育委員会課長補佐）
調査補助員	大橋　　覚（石見町教育委員会主事）
	原　　拓矢（石見町教育委員会主事）
調査指導	田中　義昭（島根大学法文学部教授）
	吉川　　正（島根県文化財保護指導員）
事　務　局	山本　繁文（石見町教育委員会教育長）
	天川　芳幸（石見町教育委員会社会教育課長）
遺物整理他	樋谷　公子（臨時職員）、大屋由香里（臨時職員）、木村　智彦（臨時職員）
	井上喜代女（臨時職員）、田中　直美（臨時職員）、浅野　智子（臨時職員）
発掘参加者	天津　兼房、石橋佐和子、岩根　久枝、上田嘉津枝、駅場　豊子
	大野　芳典、大屋カズヨ、喜川サダエ、坂根　和子、高畑　重幸
	寺本　孝行、鳥居　仁志、原野千恵子

3．礎石建物跡については、広島大学工学部助教授の三浦正幸氏に図面上の鑑定を依頼した。

4．出土した須恵器・陶磁器については、島根県教育庁文化財課主幹の西尾克己氏、島根大学法文学部人文社会研究科学生の細田美樹氏に鑑定を依頼した。

5．発掘調査及び遺物鑑定に際しては、以上の方々に多大なご教授ご協力をいただいた。記して感謝したい。

6．本書で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＢ：住居址及び建物跡、ＳＫ：土壙墓・土坑、ＳＤ：溝状遺構、ＳＸ：不明遺構

Ｐ：ピット・柱穴、Ｓ：礎石

7．挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。矢印（N）も同様な方向を示す。

8．本書の執筆・編集は、田中義昭の指示のもと原が行った。

9．本調査で出土または採取した遺物及びこれに係る実測図・写真は、石見町教育委員会で保管している。

島根県邑智郡石見町

一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大地ノ元遺跡

序　文

頁

第１章　調査にいたる経緯…… 1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境…… 2

１．地理的環境

２．調査研究略史～遺跡の分布状況

３．代表的な遺跡

４．調査対象地周辺の歴史的環境

第３章　調査の概要及び遺構・遺物…… 9

１．調査の概要

（１）住居址・建物跡

（２）土壙墓・土坑

（３）溝状遺構

（４）その他遺構

（５）遺構に伴わない遺物

２．遺構・遺物

第４章　まとめ…… 48

１．住居址及び出土遺物について

（１）竪穴住居及び礎石建物について

（２）墨書土器について

２．土壙墓について

３．その他遺構について

４．周辺遺跡（中山古墳群・清源那遺跡）との関わりについて

５．おわりに

挿図目次

第１図　石見町位置図 …… 2
第２図　周辺の遺跡 …… 6
第３図　調査前地形図 …… 10
第４図　基本土層断面図（第３図Ａ－Ａ′） …… 11
第５図　ＳＢ０１実測図 …… 11
第６図　遺構配置図 …… 12
第７図　ＳＢ０２実測図 …… 13
第８図　ＳＢ０３実測図 …… 14
第９図　ＳＢ０３焼土中土坑実測図 …… 15
第10図　ＳＢ０４実測図 …… 18
第11図　ＳＢ０４炭化物出土状況実測図 …… 18
第12図　ＳＢ０５実測図 …… 20
第13図　ＳＢ０５　Ｐ１・Ｐ２実測図 …… 21
第14図　ＳＢ０５土坑実測図 …… 21
第15図　ＳＫ０１実測図 …… 22
第16図　最東端土層断面図（第３図Ｂ－Ｂ′） …… 23
第17図　ＳＫ０２実測図 …… 24
第18図　ＳＫ０３実測図 …… 25
第19図　ＳＫ０４実測図 …… 26
第20図　ＳＫ０５実測図 …… 27
第21図　ＳＤ０１・ＳＸ０１実測図 …… 28
第22図　ＳＸ０２実測図 …… 28
第23図　遺物包含層１実測図 …… 29
第24図　遺物包含層２実測図 …… 30
第25図　遺物包含層３実測図 …… 32
第26図　出土土器実測図（１）（弥生・土師器） …… 37
第27図　出土土器実測図（２）（縄文・弥生・土師器） …… 38
第28図　出土土師質土器実測図 …… 39
第29図　出土須恵器実測図（１） …… 40
第30図　出土須恵器実測図（２） …… 41
第31図　出土須恵器実測図（３） …… 42
第32図　出土須恵器実測図（４） …… 43
第33図　出土遺物実測図（１）（陶磁器） …… 44
第34図　出土遺物実測図（２）（陶磁器） …… 45
第35図　出土遺物実測図（３）（陶磁器・石器・鉄製品） …… 46
第36図　出土遺物実測図（４）（鉄製品・石器・銅銭・鉄滓） …… 47

図版目次

図版 1　a．調査対象地（北西から）　b．調査前（東から）
図版 2　a．A区土層断面　b．B区土層断面　c．C区土層断面
図版 3　a．ＳＢ０１（南東から）　b．ＳＢ０２（南東から）　c．ＳＢ０３検出（北から）
図版 4　a．ＳＢ０３焼土近景（北東から）　b．同　焼土中土坑完掘　c．同　遺物出土状況
図版 5　a．ＳＢ０３溝状遺構土層断面（南から）　b．同　礎石配列状況（北東から）
　　c．同　礎石配列状況（東から）
図版 6　a．（中央）ＳＢ０４・（上）遺物包含層３（北から）
　　b．ＳＢ０４遺物出土状況（北東から）　c．同　炭化物出土状況（東から）
図版 7　a．ＳＢ０４煙道（南東から）　b．同　完掘（南から）　c．ＳＢ０５土層断面
図版 8　a．ＳＢ０５墨書土器出土状況　b．同　完掘（南から）
　　c．最東端土層断面（Ｂ－Ｂ′）
図版 9　a．ＳＫ０１（北西から）　b．ＳＫ０２検出（南東から）　c．同　礫検出（南西から）
図版10　a．ＳＫ０３・０４・０５（南東から）　b．ＳＫ０３（南西から）
　　c．ＳＫ０４（北西から）
図版11　a．ＳＫ０５（南西から）　b．ＳＤ０１（南東から）　c．ＳＸ０１（東から）
図版12　a．ＳＸ０２土器出土状況（南西から）　b．遺物包含層１（西から）
　　c．遺物包含層２（西から）
図版13　出土土師器
図版14　出土弥生土器・土師器
図版15　出土縄文土器
図版16　出土土師質土器
図版17　出土須恵器（1）
図版18　出土須恵器（2）
図版19　出土須恵器（3）
図版20　出土須恵器（4）
図版21　出土陶磁器
図版22　出土陶磁器・石器・鉄製品他

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 7
第２表　ＳＢ０３出土土器 …… 16～17
第３表　ＳＢ０３出土鉄製品・石器 …… 17
第４表　ＳＢ０４出土土器 …… 19
第５表　ＳＢ０４覆土中土器 …… 19～20
第６表　ＳＢ０５出土土器 …… 21～22
第７表　ＳＫ０１出土土器 …… 23
第８表　ＳＸ０２出土土器 …… 29
第９表　遺物包含層１出土土器 …… 29
第10表　遺物包含層２出土土器 …… 30～31
第11表　遺物包含層２出土鉄製品・銅銭 …… 31
第12表　遺物包含層３出土土器 …… 32～34
第13表　遺物包含層３出土石器 …… 34
第14表　調査区内出土陶磁器 …… 34～36
第15表　調査区内出土石器・鉄製品 …… 36
第16表　墨書土器が出土している遺跡一覧 …… 51～52

第１章 調査にいたる経緯

大地ノ元遺跡は、島根県邑智郡石見町大字井原1286番地外にある。平成３年12月に開通した中国横断自動車道広島浜田線に接続するため、新たに県道市木井原線が開設された。これに伴い、一般県道皆井田江津線（以下「皆江線」）の道路改良工事が計画され、平成７年５月31日付けで島根県川本土木建築事務所（以下「川本土木」）より石見町教育委員会（以下「町教委」）に事業計画地周辺の分布調査の依頼があった。

事業計画地は、近くに弥生後期から古墳時代初頭にかけての墳墓が多数確認されている中山古墳群を含む中山丘陵があり、遺構が検出される可能性が高い場所であった。そのため、町教委は詳細な分布調査が必要であるとの見解をもった。

事業範囲は、国道261号線（以下「261号」）改良部分と皆江線改良部分の２箇所に分けられ、それぞれを同年10月に約２週間かけて分布及び試掘調査を行った。その結果、分布調査で陶磁器片の散布を確認し、試掘調査では須恵器片、土師質土器片の出土及び土壙が検出されたため、町教委では本調査が必要であるとの判断を下した。同年10月25日付けで川本土木にその旨を報告した結果、「散布地」として遺跡発見の届けが川本土木より提出された。遺跡名は、字名から国道部分を「大地ノ元遺跡」、県道部分を「清源那遺跡」とした。

試掘トレンチ

事業の確定により、皆江線部分は平成８年２月、「261号」部分は平成９年２月に遺跡の取り扱いについての協議があり、町教委で協議した結果、早急に本調査を実施することとした。

調査期間は、皆江線部分が平成８年４月から12月までの約９ヶ月間、「261号」部分が平成９年６月から12月までの約７ヶ月間である。

本報告書は平成８年から10年にかけて行われた遺跡発掘調査のうち、平成９年度に行われた「261号」改良部分の調査に関わるものである。

第２章 遺跡の位置と歴史的環境

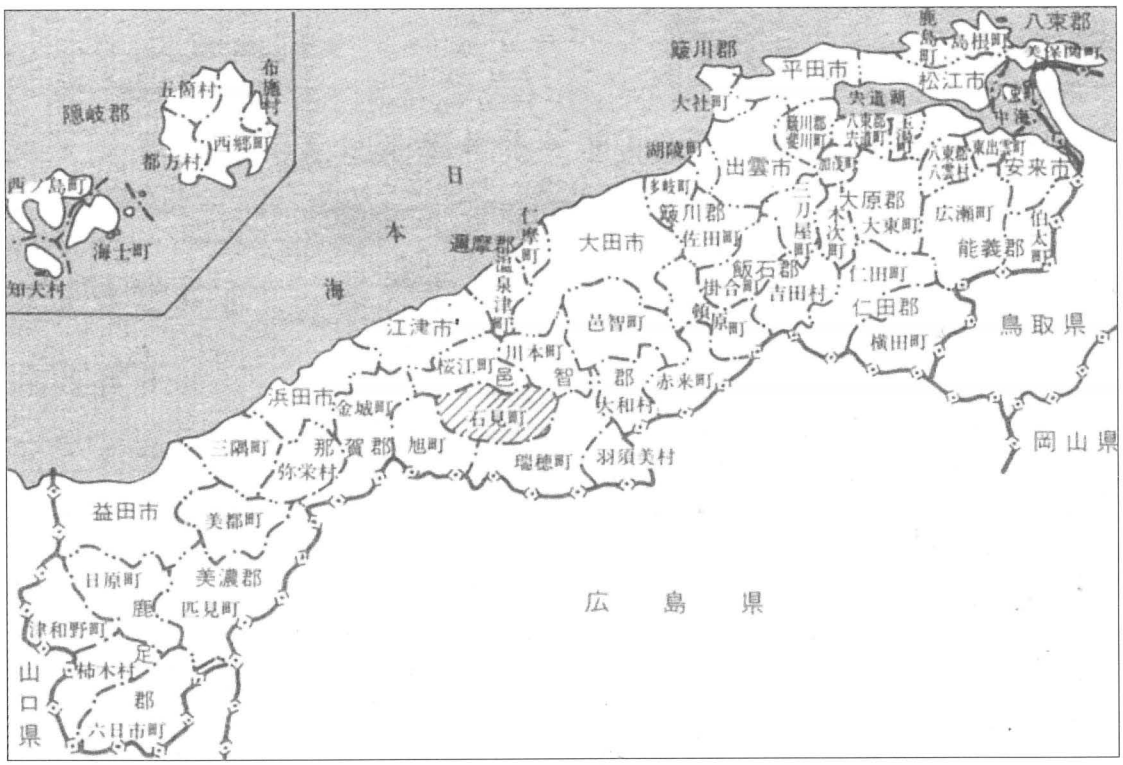
１．地理的環境（第１図）

島根県邑智郡は島根県のほぼ中央に位置し、南を広島県と接する陰陽の連絡口である。その邑智郡の西側中央部に位置する石見町は、東から瑞穂町、川本町、桜江町、那賀郡旭町と接している。

町の北東部には陰陽を結ぶ幹線である「261号」が縦断し、町中央部には皆江線が横断している。町域には、東に冠山（標高859m）、南に原山（同888m）、中央に京太郎山（同826m）があり、それから派生する連山が矢上、中野、井原の各盆地を囲んでいる。その盆地中央を矢上川が東流し、北流してきた井原川と町北東部の井原地区皆井田で合流し濁川となる。その後、国指定名勝断魚渓を経て川本町因原に出て江の川に注いでいる。

生活域としては、町中央部の京太郎山から延びる稜線によって、南に於保知盆地（矢上盆地）、西に日貫山峡、北に日和盆地に区分され、それぞれ集落が形成されている。於保知盆地は、平地の少ない石見山間部にあって比較的恵まれた地形である。標高600～800mの山地に囲まれたこの盆地内には、約600ヘクタールの耕地が広がっており、農業を中心に営んでいる。昭和40年代より行われた土地改良事業により、盆地内にある90パーセント以上の耕地が圃場整備されている。これらの耕地は、山丘をぬって流れる矢上川、井原川、濁川と、それらの支流により形成された河岸段丘上に開かれている。

矢上川上流の盆地一帯には硬岩の流紋岩地域の中に幅広く延びる花崗岩・石英斑岩が分布している。矢上盆地周辺ではその花崗岩が深層風化を受けたいわゆる「真砂土」が広がっており、中世か



第１図　石見町位置図

ら近世にかけて「鉄穴流し」による大規模な砂鉄採取が町内全域で営まれていた。盆地内に点在する小山は、その鉄穴流しによって形成された残陵（鉄穴残丘）が多く、明治中期まで続いた採掘により現在でも「矢上禿」としてその名残を止めている。また、「濁川」という名前の由来も鉄穴流しによる濁り水からつけられたと伝えられている。特に、盆地の西側にあたる矢上地区は砂鉄採取が盛んに行われていた地域であり、ここで採取された「矢上砂鉄」は薬小鉄として各地のたたらへ送られていたとの記述が残っている。盆地の東側にあたる中野及び井原地区は、土質が砂鉄採取に適さなかったために、製鉄遺跡以外の遺跡も多く確認されている。

今回調査を行った大地ノ元遺跡は町域東端の井原地区にあり、盆地中央を流れる矢上川と井原川との合流地点の東側に位置する。交通としては、遺跡東側を井原川に沿って「261号」が縦走し、調査地の北側で皆江線と交差している。この地域は古くから交通の要衝となっているが、濁川沿いは急峻な地形のため、川を迂回するように旧街道が走っている。

２．調査研究史～遺跡の分布状況

町内遺跡の本格的な分布・発掘調査は、昭和31（1956）年に故門脇俊彦氏が教員として赴任されてから行われるようになった。その後、40年代初め頃から石見町誌[1]の編纂が始まり、古代史部分を現島根県文化財保護指導員の吉川正氏が引き継がれた。町誌には「現にこれから石見町の古代史を解明しようとしても、近世の「カンナ流し」によって大部分の遺跡が破壊されていて、的確な叙述が困難な状態である。」との記述があり、製鉄業が盛んであった矢上地区の古代遺跡は壊滅的な状態である。

詳細な分布調査は、矢上・中野地区において、平成２（1990）年及び平成３（1991）年に行われただけで[2]、未だ町内全域までは及んでおらず今後の課題である。

遺跡の分布は、町内全域にわたっており、町最古の遺跡としては、尖頭器（石槍）が出土した日貫地区有安のドンデ遺跡[3]が挙げられる。この尖頭器は表面下約１ｍの赤土中からほぼ水平に埋まっていた伝えられており、石材は黒色緻密の安山岩質である。時期は今から８千年から１万年前もしくは１万２千年前のものと推定されている。

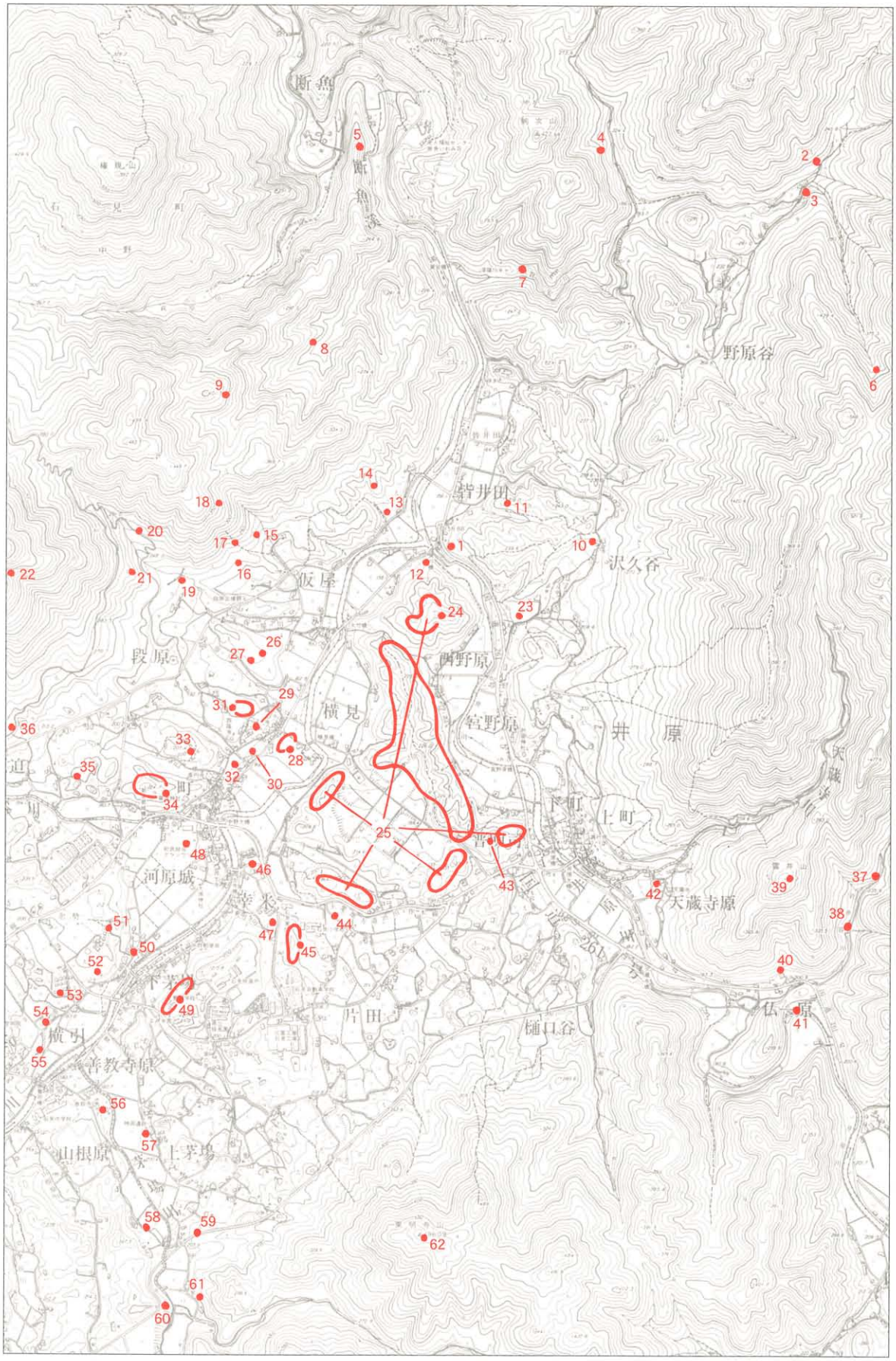
縄文時代以降では、矢上・中野地区を含む於保知盆地を中心に弥生中期以降の集落跡、後期以降の墳墓群を形成していた。

古墳時代後期以降の横穴式石室を主体部にもつ古墳出現期には、生活域が井原・日貫・日和地区に拡大し、主要河川の屈曲する部分に集落跡などを形成していった。

古式土師器出現以降から奈良・平安期までの間では、主要河川の見渡せる高台に集落跡が形成されるようになり、「261号」沿線の井原川周辺、皆江線及び県道浜田作木線沿線の濁川周辺に長期間生活が営まれた跡が確認できる遺跡が発見されている。

中世以降の遺跡としては、山城跡、製鉄遺跡などが確認されている。山城跡の立地は、盆地内部では概ね標高200m程度、盆地周辺部では500m程度の丘陵頂部に立地し、盆地周辺部に立地するものはそこから派生する尾根を削平して郭を形成している。機能していた時期は、13世紀初頭から16世紀半ばまでの間で、弘治２（1556）年からの毛利勢石見侵攻に伴い落城したものが主である。

製鉄遺跡は、その中心となるものは斜面を削平して平坦面を築いてたたらを構築するもので、町内の山を歩けば、鉄穴流しに関する溝、切羽などや鉄滓にぶつかると行っても過言ではない。


断魚
野原谷
皆井田
沢久谷
仮屋
段原
西野原
横見
宮野原
井原
下町
上町
河原城
天蔵寺原
仏原
樋口谷
片田
横引
善教寺原
山根原
上茅場

第２図　周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	内　容	所在地	番号	遺　跡　名	内　容	所在地
1	大地ノ元遺跡	集落跡他	井原	32	中原遺跡	散布地	中野
2	田元鈩跡	製鉄遺跡	井原	33	源太ヶ城跡	城跡	中野
3	野原鈩跡	鉄遺跡	井原	34	加茂山(賀茂山)古墳群	古墳	中野
4	駒次鈩跡	製鉄遺跡	井原	35	風呂ヶ谷遺跡	散布地	中野
5	築廻遺跡	散布地	中野	36	高鉄穴下鈩跡	製鉄遺跡	中野
6	鯛の助鈩跡	製鉄遺跡	井原	37	岩井谷Ⅱ鈩跡	製鉄遺跡	井原
7	深滌川鈩跡	製鉄遺跡	井原	38	岩井谷Ⅲ鈩跡	製鉄遺跡	井原
8	嫁が渕奥二号鈩跡	製鉄遺跡	中野	39	雲井城跡	城跡	井原
9	嫁が渕奥一号鈩跡	製鉄遺跡	中野	40	城山鈩跡	製鉄遺跡	井原
10	庄塚古墳	古墳	井原	41	仏一原鈩跡	製鉄遺跡	井原
11	実藤古墳	古墳	井原	42	天蔵寺原遺跡	集落跡	井原
12	清源那遺跡	集落跡他	井原	43	平城跡	城跡	井原
13	槇ヶ迫遺跡	散布地	中野	44	片田遺跡	散布地	井原
14	小松屋遺跡	散布地･古墓	中野	45	鳥居の段二号遺跡	散布地	中野
15	仮屋古墳群	古墳	中野	46	和泉原遺跡	散布地	中野
16	田ノ迫原遺跡	散布地	中野	47	鳥居の段一号遺跡	散布地	中野
17	田の迫鈩跡	製鉄遺跡	中野	48	余勢野原遺跡	散布地	中野
18	大元迫鈩跡	製鉄遺跡	中野	49	下川原遺跡	古墳、横穴他	中野
19	段原古墳群	古墳	中野	50	余勢遺跡	散布地	中野
20	萩原横手一号鈩跡	製鉄遺跡	中野	51	余勢城跡	城跡	中野
21	萩原横手二号鈩跡	製鉄遺跡	中野	52	坂木屋遺跡	散布地	中野
22	矢渕鈩跡	製鉄遺跡	中野	53	松山遺跡	散布地	中野
23	岩風呂遺跡	石斧出土地	井原	54	松山上遺跡	散布地	中野
24	稲積城跡	城跡	井原	55	高野屋遺跡	散布地	中野
25	中山古墳(墳墓)群	古墳	中野・井原	56	茅場谷遺跡	集落跡	中野
26	仮屋銅鐸出土地	銅鐸出土地	中野	57	神田遺跡	集落跡	中野
27	反原遺跡	散布地	中野	58	前竹古墳	古墳	中野
28	池ノ尻遺跡	散布地	中野	59	茅場Ｂ遺跡	集落跡	中野
29	旦原一号遺跡	散布地	中野	60	要心院遺跡	散布地	中野
30	旦原二号遺跡	散布地	中野	61	安養寺窯跡	窯跡	中野
31	反原遺跡	集落跡	中野	62	東明寺城跡	城跡	井原

３．調査対象地周辺の歴史的環境（第２図）

〈縄文時代〉

この時代を代表する遺跡としては、井原地区の築廻遺跡（「つきまわし」または「つきさこ」と呼称される）が挙げられる。この遺跡からは縄文後期の異型壺形土器の完形品が出土している。濁川の下流にあたる国指定名勝断魚渓内に所在する稲荷神社付近からこの遺物が出土したと伝えられるが、発見は明治期であるためその場所は必ずしも定かではない。後に土木工事に伴い水田の一部を調査したが、遺構及び遺物などの成果をあげられなかったとの記述が残っている。[4] 他に縄文時代の遺跡としては確認されていないが、本遺跡とは井原川を挟んだ対岸に位置する下水道処理施設建設予定地から試掘調査時に現代の遺物に混入する状態で縄文土器片が発見されているが小片のため時期は不明である。石見町の当時代の遺跡は、後世における工事や鉄穴流しの掘削により破壊され消滅しているものが多いのではないだろうか。

〈弥生・古墳時代〉

弥生時代の遺跡としては中野地区の仮屋（かりや）遺跡（仮屋銅鐸出土地）[5] が挙げられる。この遺跡からは、大正３（1914）年に２口の銅鐸（１号・突線鈕Ⅰ式１区流水文、２号・扁平鈕式６区袈裟襷文）が発見されており、町を代表する遺跡の一つとして早くから注目されていた地域である。

また、この遺跡と関連性の深い遺跡として弥生土器が大量に出土した中野地区の余勢（よせ）の原遺跡[6]を中心として、その対岸に和泉原（いずみばら）遺跡が考えられる。平成２年から３年にかけて行われた詳細分布調査により中野地区西端の濁川と森実川の合流地点から中野地区段原にかけての河岸段丘及び台地に数ヶ所確認されており、それらの遺跡から採集された遺物の時期は後期のものが大部分であった。余勢の原遺跡から採集された遺物には前期及び中期のものも含まれており、これらの地域では大規模な集落が形成されていた地域と想定でき、立地からもその可能性が高い。

井原地区には前章で述べた清源那遺跡が所在し、同遺跡のＡ地区では、竪穴住居址の床面直上より鹿島町南講武草田遺跡[7]における編年の６期に相当する遺物が多数確認されている。Ｂ地区で検出された小児棺（箱式石棺）からは、床面に須恵器の甕を割り、底部と口縁部を除いた破片を敷き詰めていたのが確認された。[8]

大地ノ元遺跡の南側の中野・井原の両地区にまたがる単独丘陵に中山古墳群が所在する。この遺跡は、昭和44（1969）年に故門脇俊彦氏により、井原地区西野原の大峠山（おおたおやま）と呼ばれる丘陵一帯（後述Ｄ地区北端）に「無墳丘墓」７基が発見され、大峠山古墳群と命名されたものである。副葬品としては、石棺内から出土したという重圏文鏡や樽形瑇が現存しているが、出土地点は定かではない。その後、昭和47（1972）年に中野地区幸米（こうごめ）の尾根上（後述Ａ地区南端）にて墳丘をもつ古墳１基が確認され中山古墳と命名された。[1]

この中山丘陵での本格的な発掘調査は、昭和51（1976）年に行われた。[9] この調査により、中山丘陵の全体像が明らかになり、大峠山古墳群、中山古墳を含む中山丘陵全域が中山古墳群と命名された。この古墳群は、丘陵の地形から便宜上ＡからＤの４地区に分けられ、前方後方墳であるＢ１号墳を調査した結果、主体部の副室内に方形板皮綴短甲、鉄斧、刀子などの鉄製品が副葬されていた。翌年の丘陵全域の分布調査により、新たにＤ地区の北側とＡ地区の南側に古墳群が確認されたことで（各々Ｅ、Ｆ地区）、古墳群全体がＡからＦの６地区に分けられるようになった。

この規模の大きな古墳群がある程度把握できたことで、遺跡の保存活用の気運が高まり、昭和56（1981）年には、国庫及び県費補助を受けＣ・Ｄ地区の分布調査の一環として、前述の門脇氏を中心としたＤ23号墳の学術発掘が行われた[10]。Ｄ23号墳の墳形は、全長25mの帆立貝形を呈し、古墳群中では大型の古墳である。主体部は後円部頂で５基、前方部で１基の計６基確認されている。また、民間開発に対する対応も行われ、昭和63（1988）年に、工場建設に伴う事前調査が行われ、昭和47年に確認された古墳よりも南側にＡ６号墳が検出された[11]。

昭和51年の古墳群発見以来継続的に行われてきた古墳群の分布調査は、平成の世になっても行われている。平成２（1990）年から２ヶ年かけて矢上・中野地区詳細分布調査の一環として、Ｃ・Ｄ地区の測量が行われた[2]。特に平成２年の測量ではＤ16号墳という前方後円墳が確認されており、古墳群中に前方後円墳の存在が確認された最初の事例である。また、平成４（1992）に方墳であるＣ７号墳の発掘調査が行われ、主体部に４基の箱式石棺を検出している。この調査は、町内で郷土の文化財愛護活動を続けている「故里（ふるさと）を探る会」が主体となり、町教委と地元自治会の協力のもと行われたものである。以降、平成５（1993）年にＡ・Ｄ地区の実態調査[12]、平成７（1995）年から実施している分布調査により、「無墳丘墓」、円墳、方墳、前方後円墳、前方後方墳など130基を越す弥生後期前半から古墳後期前半にかけての大規模な古墳（墳墓）群を確認している。内部主体としては、箱式石棺、竪穴式石室、石蓋土壙、木棺直葬などである。

中山古墳群と同時代と推定できる遺跡には平成５～６年度にかけて施設用地造成に伴う事前調査によって発見された下川原（しもがわら）遺跡[12][13]がある。この遺跡は、中山丘陵の西の延長線上にほぼ同じ標高で所在しており、古墳３基、横穴墓１基、弥生後期の土壙墓群が検出されている。東側尾根上から検出された１号墳では、直径17mの円墳で、箱式石棺と木棺を主体部にもつことが確認されている。西側尾根上に位置する土壙墓群からは木棺墓、木蓋土壙墓、土器蓋土壙墓が確認されている。北側斜面で確認された横穴墓の玄室内部からは、壮年後期の男性と壮年期の女性の骨と須恵器蓋坏の他、鉄鏃、直刀、靫金具などの副葬品が出土している。男女の遺体埋葬には時期差があり、副葬品、特に須恵器蓋に着目して、初葬である男性は、口径14～15cm、天井部のヘラ削りが顕著で、肩が屈曲し沈線で段を付けた口縁端部に続いている。追葬である女性は、口径12.5～13cm、天井部がヘラ切り後ナデ調整のものである。

大地ノ元遺跡の東側の尾根上には平成５（1993）年に土砂採取に伴う事前調査で発見された実藤（さねとう）古墳[12]が所在する。この古墳は、径10mの円墳で木棺直葬の埋葬方法をもつものである。遺物は周溝から土師器、須恵器の他、Ｕ字形の鉄製鋤先が出土している。

この他、中野地区西部の矢上川周辺では段原古墳群、仮屋古墳群、加茂山古墳群、中野地区東部の森実（もりざね）川周辺では塔（いで）の本古墳、割田（わりた）古墳[14]、後原古墳の諸墳が点在している。段原古墳群は比較的小型の横穴式石室を内部主体とした小円墳であるが、１～５号墳確認されているうち農免道開設により５号墳は消滅、４号墳も損壊を受けている。仮屋古墳群は、横穴式石室３基として登録されているが、現在確認できるのは２基であり、残り１基は不明である。加茂山古墳群は賀茂神社の裏山に位置し、方墳を主とした10数基から成る古墳群である。塔の本古墳は、径約10mの円墳で横穴式石室を内部主体とした古墳である。昭和27（1952）年にこの石室から鉄鏃、玉類、直刀、馬具が発見されている。割田古墳は、昭和44（1969）年に県指定に先立って発掘調査が行われており、川原石

を平積にした石室をもち、石室の底には排水を兼ねた小石が敷いてあり、その排水溝は調査地点外まで伸びている。石室は長さ７m、高さ1.5m、幅約1.3mを測り当地方で見られる一般的な横穴式石室である。石室内部からは須恵器編年のⅣ～Ⅴ期（７世紀初頭～８世紀末）の須恵器が出土している。

〈奈良・平安時代〉

清源那遺跡Ｂ地区で検出された層状に重なる竪穴住居址からは８世紀から９世紀後半にかけての遺物が検出されている。また、矢上川周辺に位置する中原遺跡、旦原一号・二号遺跡、池の尻遺跡がある。特に池の尻遺跡からは現在水田であるが、圃場整備の際に円面硯（けん）が出土しており、官衙跡が所在していた可能性もある。

前述の詳細分布調査により当時代の遺跡として、中野地区森実及び横引の濁川に向かって張り出した丘陵先端部から高野屋遺跡、松山下遺跡、坂木屋遺跡が確認されている。

〈中世以降〉

中世の遺跡としては、中山丘陵上の井原地区寄りの普明寺（ふみょうじ）に平城、西野原に稲積城がある。その他、矢上川を挟んで中野地区の中央部である小原迫（おばらざこ）に余勢城、町に源太ヶ城が所在していた。平城、稲積城は戦国時代尼子方である小笠原氏の配下にあった武将の拠点で、余勢城、源太ヶ城は毛利方である福屋氏の配下にあった武将の拠点であったと伝えられている。余勢、源太に関しては、永禄４（1561）年の吉川勢との合戦で落城したと伝えられている。後述の２城ともに盆地の中央部に位置しており、源太ヶ城は、跡地も明確な遺構をもっているが、余勢城に関しては農用地などに利用されていたため、現在ではほとんど原形をとどめていない。

製鉄遺跡としては、調査対象地から２km圏内に現在８箇所確認されており、製鉄業で栄えた石見町の昔を物語っている。

【参考文献】

⑴「遺跡と遺物」門脇俊彦・吉川　正（『石見町誌』上巻）石見町　1972年

⑵『町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ・Ⅱ』石見町教育委員会　1991･1992年

⑶「尖頭器出土地の探索」前島己基（『季刊文化財』28号）島根県文化財愛護協会　1977年

⑷『石見町の遺跡』石見町教育委員会　1983年

⑸「島根県邑智郡石見町中野仮屋銅鐸出土地の調査」田中義昭・三宅博士（『山陰地域研究　伝統文化』第７号）島根大学山陰地域研究総合センター　1991年

⑹「石見町出土の最新考古資料」松本岩雄（『季刊文化財』28号）島根県文化財愛護協会　1977年

⑺『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会　1992年

⑻『一般県道皆井田江津線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　清源那遺跡』石見町教育委員会　1998年

⑼『中山古墳群発掘調査概報』石見町教育委員会　1977年

⑽「中山古墳群発掘調査報告書」門脇俊彦（『石見町の遺跡』）石見町教育委員会　1982年

⑾『中山古墳群発掘調査報告書　－第３次－』石見町教育委員会　1989年

⑿『中山古墳群　－平成５年度実態調査概要報告書－』石見町教育委員会　1994年

⒀「石見町下川原墳墓群の調査」寺脇孝彦･中田健一･大谷晃二（『島根考古だより』第48号）島根考古学会 1995年

⒁「邑智郡石見町割田古墳」門脇俊彦（『石見町の文化財』）石見町教育委員会

第３章 調査の概要及び遺構・遺物

１．調査の概要

大地ノ元遺跡は、井原川と「261号」の北側に位置し、その対岸には前年度に調査を行った清源那遺跡を含む中山丘陵がある。この丘陵は、石見町の中央となる於保知盆地の東北端に位置し、南北に延びる約1.30kmの主脈と、それに伴う支脈から成っている。丘陵上に立地する中山古墳群は支脈ごとにＡ～Ｆの６地区に分かれ、今回調査した大地ノ元遺跡はその最北端であるＥ地区の対岸に位置している。

本遺跡は道路改良工事に伴う分布調査で所在が判明し、その後平成７年10月23日～25日にかけて行った試掘調査で遺構、遺物などの存在が確認された。

今回の調査は、試掘調査の結果により約1,000㎡を調査範囲とした。現況は斜面を段状に加工した畑で、調査区の東にある一番高い段の標高は約179.50m、低い段で約165.50mを測る。遺跡の東側を「261号」が井原川に沿って走っており、遺跡と井原川との比高は約20～30mである。

遺構の検出作業は次のように行った。

①調査区全体を地形に伴い４区割を行う。

Ａ区：段状に加工した畑面の最下段

Ｂ区：Ａ区北東側斜面

Ｃ区：Ａ区東側の段状畑面

Ｄ区：調査区西側にある畑につながる道路（以下、進入路）部分

②設定された区割のうち層位確認のため、Ａ区からＣ区にかけてほぼ東西軸方向の主軸を畦状に残し（以下、ベルト）、層を確認しつつ土の剥ぎ取りを行う。

③層の剥ぎ取り時に確認された周辺とは土色の異なる部分（以下、平面プラン）に主軸を設定する。

④その主軸沿いに幅の狭く長い溝（以下、トレンチ）を設け掘り込みの状態を確認する。

⑤ベルトを残して掘り込みの覆土を除去する。

以上の調査の結果、本遺跡からは溝状遺構、礎石建物跡１棟、竪穴住居址４棟、土壙墓２基、ピット群が検出された。

以下、検出遺構ならびに出土遺物について述べる。

本遺跡の層位は以下のように観察された（第５図）。

第１層：表土

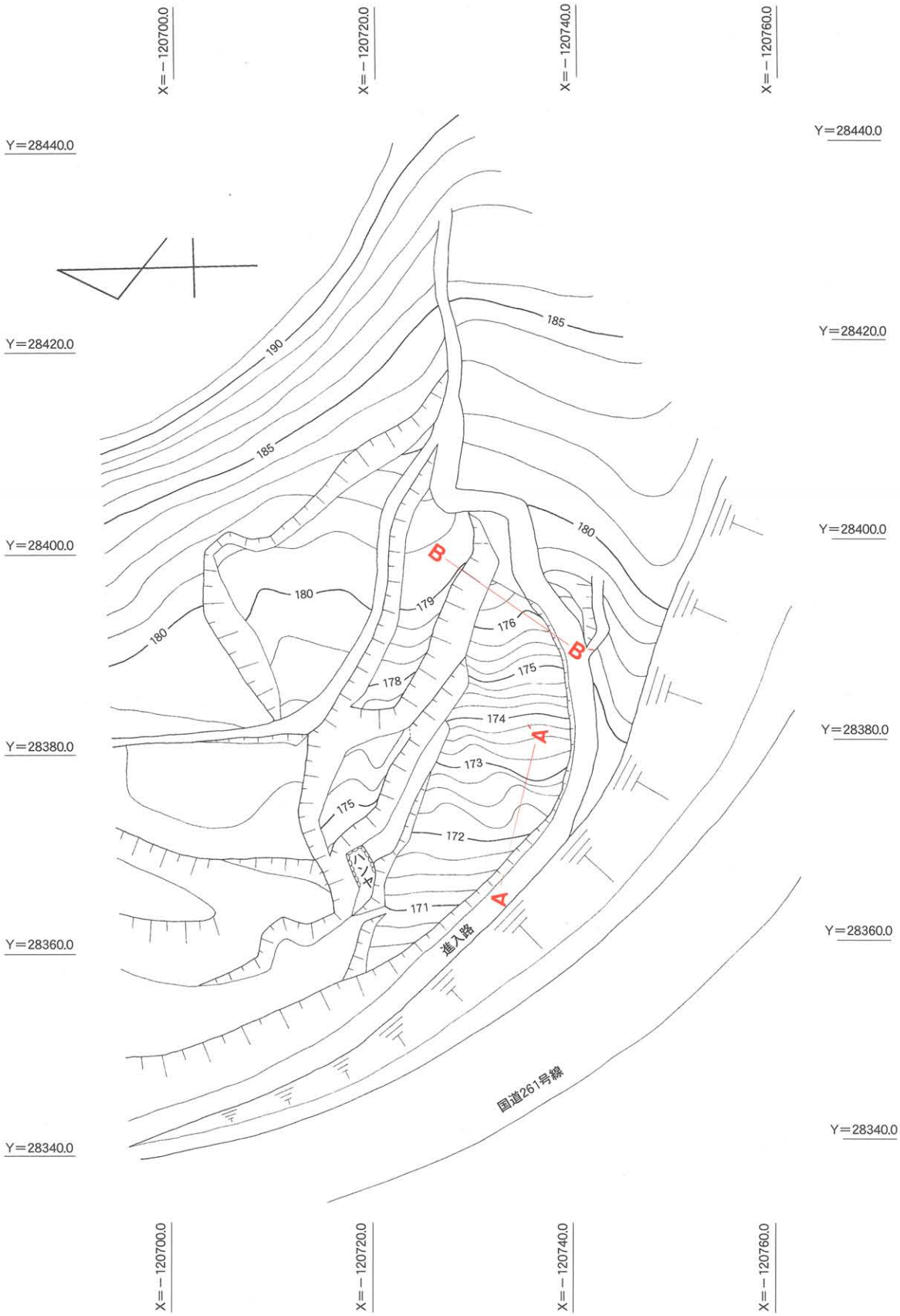
第２層：茶褐色土層

第３層：暗褐色粘質土層（遺物包含層）

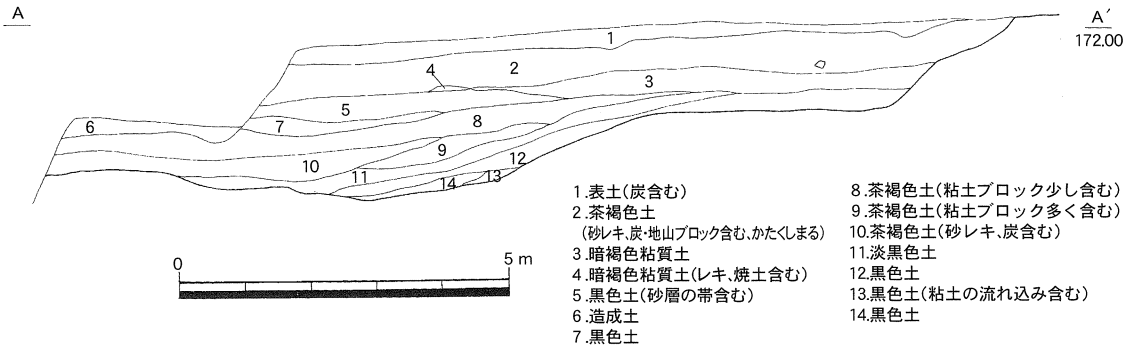
第４層：黒色土層（遺物包含層）

第５層：茶褐色土層（遺物包含層）

第６層：黒色土層


X=－120700.0
X=－120720.0
X=－120740.0
X=－120760.0
Y=28440.0
Y=28420.0
Y=28400.0
Y=28380.0
Y=28360.0
Y=28340.0
190
185
180
179
178
176
175
174
173
172
171
A
B
ハンヤ
進入路
国道261号線

第３図　調査前地形図



第４図　基本土層断面図（第３図Ａ-Ａ′）

試掘調査の段階で、表土から約1.5m下より住居址らしき掘り込みが確認されていたが、上層部分から土器片が大量に出土しており、表土に近い部分にも遺構が存在する可能性が考えられたため、本調査では、重機を使用せず、人力による作業を行うこととした。

作業を開始する前に調査区を横切る東－西方向の谷に沿ってグリッド中心線（Ｌ）を設け、Ｌに直交するａ、ｂのラインをＡ区に設定した。各ラインにベルトを設けて調査を進めていたところ、第４層中に砂層が薄い帯状に広がっているのが確認された。そこで、便宜上、第４層を上黒色土層、中砂層、下黒色土層と分けることとした。この砂層は、生活面である下黒色土の上に堆積したものと判断し、砂層全体を検出して精査を行った。精査の結果、中世以前の遺構は第４層下黒色土層以下より、また、中世以降の遺構は砂層付近から検出された。

遺構は、Ａ区に集中していたが、Ｂ区及びＣ区、Ｄ区からも検出された。

２．遺構・遺物

(1) 住居址・建物跡

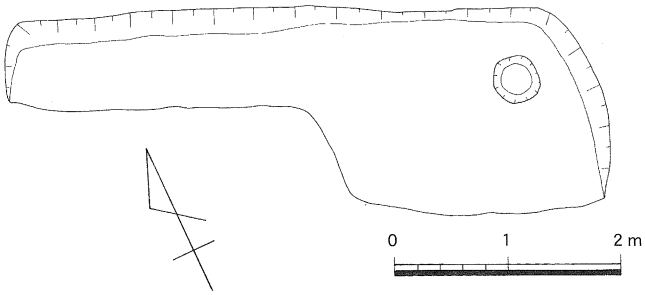
Ａ・Ｂ・Ｄ区より竪穴住居址４棟（ＳＢ01～04と名付けた）、礎石建物跡１棟を検出した。竪穴住居址のうちＢ区より検出された２棟は、斜面を削平して作られているため、斜面下部に向けての壁面は確認できず遺存状態は不良である。

■ＳＢ０１（第5図、図版3-a）

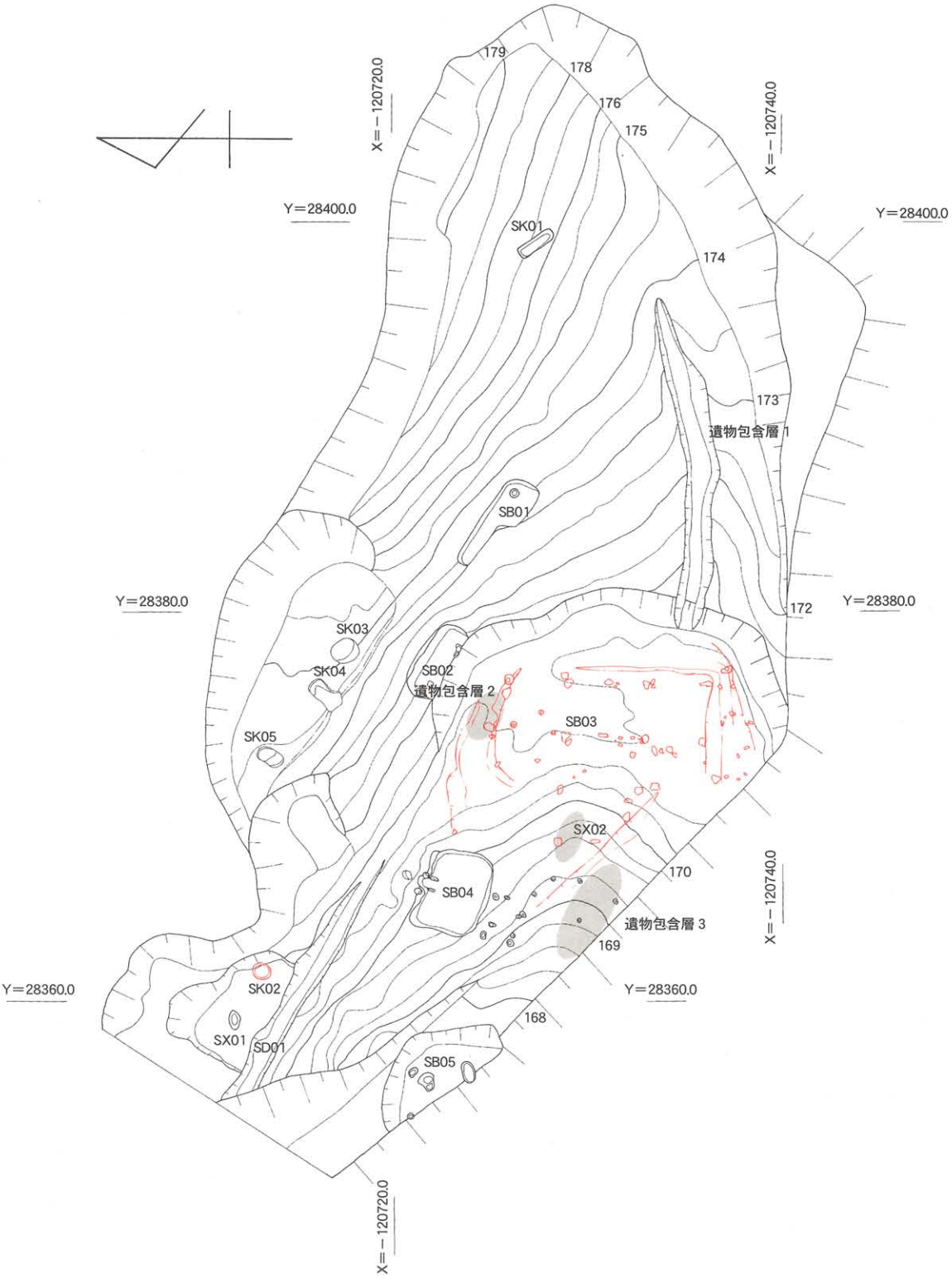
〈検出状況〉

この遺構はＢ区より検出された。斜面の覆土は非常に薄く、表土を除去した段階で風化した堅い岩盤（以下、地山）があらわれた。

斜面上部から地山を検出していると、ほぼ等高線に沿った長方形プランに掘り込みとみられる一辺が確認された。その辺を追跡していくと両端がＬ字状に屈折しており、方形状遺構の存在が確認された。次にトレンチを設け遺構内の覆土の層位確認を行ったところ、粘質土を含んだ茶



第５図　SB01測定図


X=－120720.0
X=－120740.0
Y=28400.0
Y=28400.0
Y=28380.0
Y=28380.0
Y=28360.0
Y=28360.0
X=－120740.0
X=－120720.0
179
178
176
175
174
173
172
170
169
168
SK01
SB01
遺物包含層 1
SK03
SK04
SK05
SB02
遺物包含層 2
SB03
SX02
SB04
遺物包含層 3
SK02
SX01
SD01
SB05

第６図　遺溝配置図

褐色土１層であったため、この覆土がどの方向から遺構に流れ込んだのかが判定できなかった。

遺構中の覆土を全て除去するとピット１個と須恵器片が検出された。この遺構は、地山を掘り込んで作られており、地形上斜面を利用して一部埋土により床面を形成していたと推測され、遺構床面及び壁の掘り込みの大部分は、斜面の流出により失われているが、方形の竪穴住居址ＳＢ01とした。ＳＢ01からは須恵器片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

〈平面・断面形〉

ＳＢ01は、残っている掘り込み部分の一辺5.30mで、床部分の辺4.60mである。斜面上部の地山から床面までの深さは32cm、ピットは径40cmの円形を呈し、地山からの深さ33cmである。

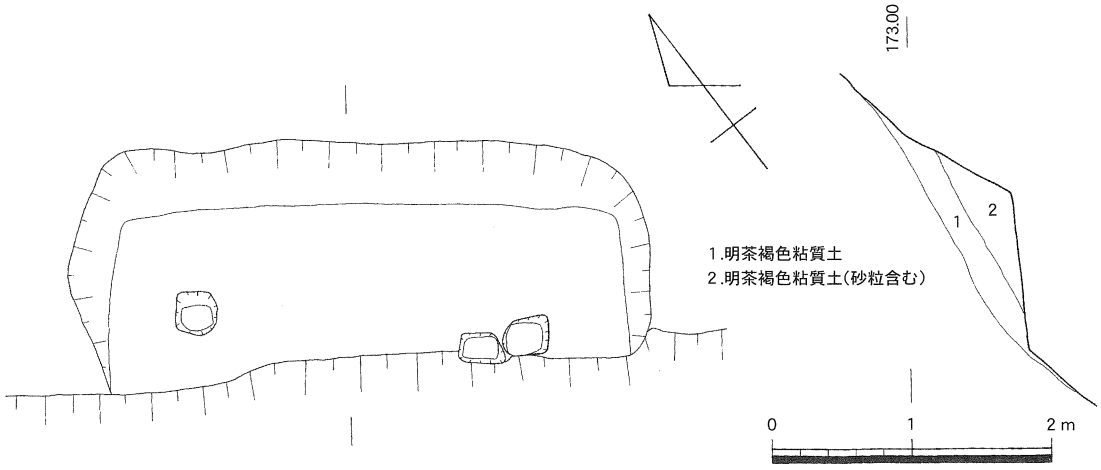
■ＳＢ０２（第7図、図版3-b）

〈検出状況〉

この遺構はＢ区より検出された。ＳＢ01検出時と同様に、掘り込みの一辺が現れ、その追跡により両端がＬ字状に屈折しているのが確認できた。次に覆土の層位確認を行ったところ、茶褐色土粘質土層が２層に分かれるのが確認された。その内の下層部分は砂粒を含む。これら掘り込みの覆土である粘質土を除去すると、ピット３個（東からＰ１、Ｐ２、Ｐ３とする）と床面直上から須恵器片が検出された。床面は後世の掘削により大部分が流出しているが、方形の竪穴住居址ＳＢ02とした。出土した土器は小片のため時期は不明である。

検出されたピットは、遺構東側の掘り込み屈折部付近にＰ１、西側にＰ２とＰ３が東西方向に重複なく並列している。本住居址の主柱穴は単独のＰ１がまず当てはまる。Ｐ２・３については、残った掘り込み底部の長辺がN58°Wをとり、Ｐ１－Ｐ２及びＰ１－Ｐ３の中心軸がそれぞれN52°W、N48°Wをとることから、長辺軸により近い値のＰ３が主柱穴と判断した。また、Ｐ３は掘り込み底部の長辺に沿った壁面からピット間の距離がＰ１とほぼ同程度であることからも主柱穴であるとの判断材料になった。Ｐ２の詳細については不明である。

ＳＢ02から出土した須恵器は小片のため、住居址の時期は判定できない。



第７図　SB02実測図

〈平面・断面形〉

ＳＢ02は、残っている掘り込み部分の一辺4.15mで、床部分の辺3.70mである。斜面上部の掘り込み検出面から床面までの深さは約１mである。

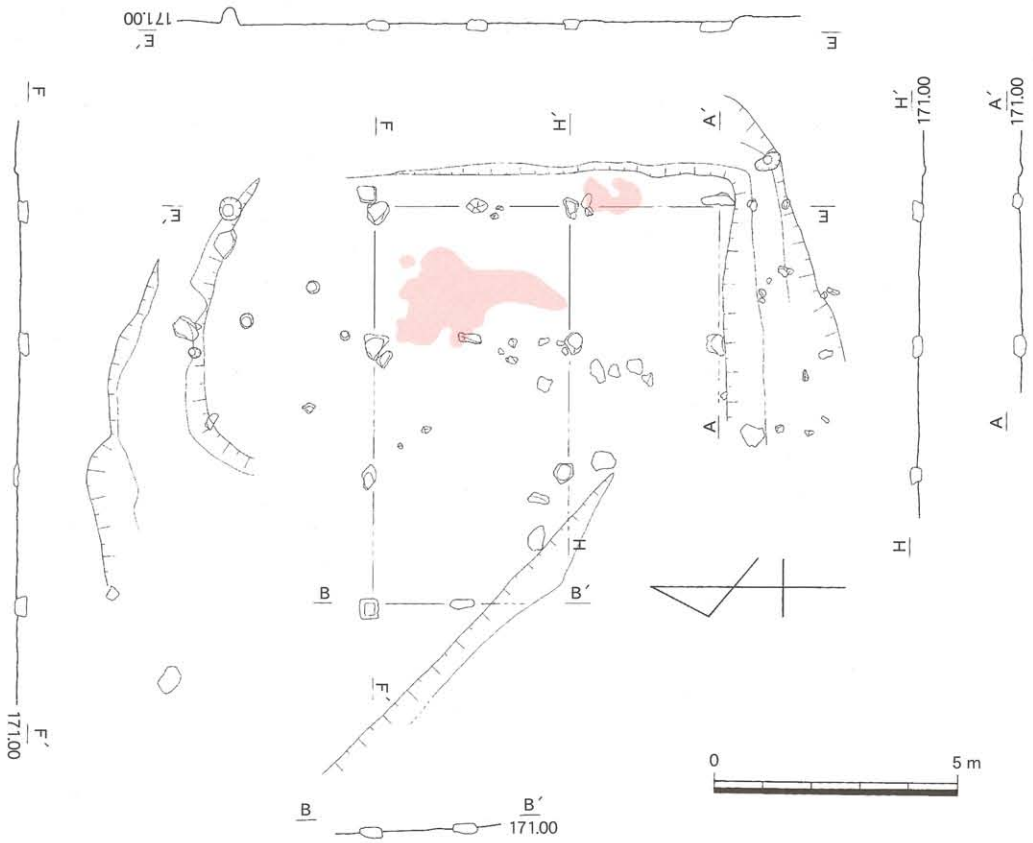
Ｐ１は一辺約30cmの方形を呈し、床面から深さは41cmである。Ｐ２は長径30cm、短径22cmの長方形様で、床面からの深さは約45cmである。Ｐ３は一辺約30cmの方形を呈し、床面からの深さは39cmである。壁面からピット間は、掘り込み底部の長辺に沿ってそれぞれ47cm、90cm、57cmを測る。これらは床面内での分布状態や形状から主柱穴と推測する。Ｐ１－Ｐ３間の距離はは2.35mを測る。

■ＳＢ０３（第8・9図、図版3-c,4-a,4-b,4-c,5-a,5-b,5-c）

〈検出状況〉

この遺構は、Ａ区及びＤ区の第４層中砂層の下面から検出された。「261号」及び進入路の開設により一部礎石が流出しているが、以下のような検出状況から礎石建物跡と判定された。

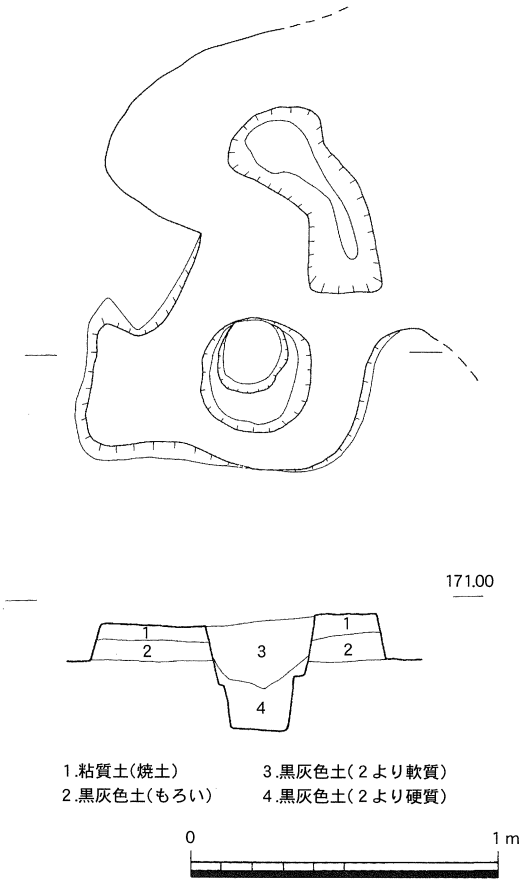
まず、表土以下第３層まで層位確認用のベルトを残して除去し、第４層上黒色土層の剥ぎとりを始めたところ、上部に平坦面をもった石が露出した。そこで土の剥ぎ取りを中止し、ボーリングステッキによる広範囲の探査を行ったところ、土の除去部分だけでなくベルト中にも石の感覚が確認できた。その位置にマーキングを行いさらに精査したところ、石の直線的な配列が２本平行にある



第８図　SB03実測図

ことを確認し、次に黒色土を剥ぎ、ベルト中以外に確認された石の上部を露出させたところ、全ての石の上面が平坦で、表面が滑らかな川原石であることが確認された。

ベルトを除去し、第４層中砂層まで剥いだ段階で、平坦面をもつ石が存在する範囲は調査区中央部平坦面に限られており、その外縁部を結ぶとほぼ長方形様に配列することが確認された。また、石の配列中心部付近から焼土が広範囲に広がっており、焼土中にピット（第9図）を検出した。このピットの掘り込みは焼土以下の黒色土層まで掘り込まれており、周辺よりもろい黒灰色の覆土で、検出面上層の土質とは異なっていた。



第９図　SB03焼土中土坑実測図

さらに石の性格を判断するためにあらためて石の配列を精査したところ、ほぼ南北及び東西の座標軸に主軸をとる配列が各４本ずつ確認された。これら石列は重複しており、外縁部の石群を結んだ長方形様の配列の中に格子状の配列が想定できたことから、これら石群は建物の柱を立てるときに使用されたものと判断し、礎石建物跡ＳＢ03とした。進入路による後世の掘削のため、ＳＢ03南西部分（１／４）の礎石は確認できなかった。

この礎石を完全に露出させるために砂層を剥ぎ下黒色土層を露出させると、礎石群の外側を取り囲むように「コ」の字状の平面プランが検出された。このプランに直交するトレンチを設け覆土の性格を調べた結果、浅い「U」の字状の底面に薄い砂層が含まれているのが確認された。この砂層を第４層中砂層と同質のものと想定すると、礎石群を囲む溝状遺構が存在したことが考えられる。この溝状遺構は礎石建物を巡る排水用の溝と判断した。

検出された焼土面については、この焼土がＳＢ03の中に広がっていることから、この位置に炉を据えた土間があったと推測される。

遺物については、第４層中砂層まで剥いだ段階で高台をもつ土師質土器の坏（第28図８）や鉄斧（第35図43）、下黒色土層の段階で土師質土器片・須恵器片が多数出土している。

〈平面・断面形〉

礎石建物の規模は、溝状遺構に囲まれた部分である礎石外縁として、以下ＳＢ03の平面形を解説する。

礎石の残りが良好な建物北側及び東側の礎石から東西にＳ１－Ｓ５－Ｓ９－Ｓ11の３間、南北にＳ１－Ｓ２－Ｓ３－Ｓ４の３間（8.1m×７m）の建物跡である。礎石の間隔は東西と南北では違い

がみられ、東西2.7m、南北は北側から２m、２m、３mで方位に沿って布石されていた。ＳＢ03の基準柱間寸法は９尺（2.72m）に計画されたと推定され、東西方向の柱間は９尺を１間、南北方向については９尺の1.5倍を半分（あるいは６尺７寸間）としている。外縁部以外の礎石では、Ｓ６に間仕切りの柱が立つと想定すると、周囲に溝が巡っていることからＳ２とＳ12の位置に外壁があったと推測される。

以上のことから、桁行３間、梁間２間の長方形建物跡（時計回りにＳ12－Ｓ11－Ｓ９－Ｓ５－Ｓ１－Ｓ２－Ｓ３－Ｓ７－Ｓ10）が復原できる。その他の礎石の並びとしては、進入路により破壊されており不完全ではあるが、2.7m×３mの建物跡（Ｓ３－Ｓ４－Ｓ８－Ｓ７）が復原できる。この建物跡が長方形建物に付随する張り出し部分なのか、それとも破壊された部分を含めた建物の一部なのかは現状では判断できない。

溝として明確に確認できるのは南側部分だけである。幅１～1.50m、深さ約５cm、底面幅約50cmを測る。東側及び北側は10cm前後の比高で落ち込みが巡っている。

焼土中から検出されたピットは径約35cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。

第２表　ＳＢ03出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴/その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
28-01 16-01	土師質 坏	15.2	6.8	3.6	底部厚めの平底。底部外面に回転糸切り痕。底部から体部の境目に稜をもつ。	外／橙 内／浅黄橙	２㎜以下の砂粒含む	良好
28-06 16-06	土師質 坏	13.4	5.6	4.5	底部平底。底部外面に回転糸切り痕及び指頭圧痕。内面に渦巻き状の凹み。底部から体部の境目に稜をもつ。	外／灰褐 内／橙	１㎜以下の砂粒含みきめが細かい	良好
28-08 16-08	土師質 坏		8.4		貼り付け高台。高台はわずかに外開き。底部内面はヘラ工具による回転ナデ後ナデ調整。	浅黄橙	３㎜以下の砂礫含む	良好
28-11 16-11	土師質 坏		5.0		底部厚めの上げ底。底部外面回転糸切り後ナデ。底部と体部の境は低い台状。	外／にぶい黄橙 内／にぶい橙	１㎜以下の砂粒わずかに含む	良好
28-14 16-14	土師質 坏		7.0		底部平底。底部外面回転糸切り後指ナデ。体部と底部の境に稜。	外／にぶい黄 内／暗灰黄	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-03 17-03	須恵質 坏	11.4	7.4	4.7	灯明皿（内面に芯の焦げた跡）。底部わずかに上げ底。底部外面に回転糸切り痕。底部と体部の境に稜。胴部逆「ハ」の字状に外傾。	内外／橙 底部外／淡黄	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-14 18-14	須恵質 坏		7.0		底部の中央部が厚手のやや上げ底。底部外面回転糸切り後ナデ。	にぶい橙	２㎜以下の砂粒含む	良好
30-23 18-23	須恵器 坏	13.6	6.8	2.7	底部わずかに上げ底。底部外面に回転糸切り痕。底部内面にスス付着。	外／明緑灰 内／緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-28 18-28	須恵質 坏		6.0		底部平底。底部外面に回転糸切り痕。内面に渦巻き状のナデ痕。底部と体部の境に稜。内面に油煙によるスス付着。	浅黄	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-31 18-31	須恵器 皿	14.0	5.4	2.4	底部平底。底部外面回転糸切り後ナデ。口縁端部つまみ出し。焼成時のスス付着。土師質土器に似た調整。	浅黄	３㎜以下の砂礫含む	不良
30-33 19-33	須恵器 蓋	3.2			釦状の貼り付けつまみ。	外／にぶい褐 内／灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
31-39 19-39	須恵器 甕				小型甕の体部片。胴部内湾。口縁部外反。	緑灰	３㎜以下の砂礫含む	良好

31-43 19-43	須恵器 甕				大型甕の胴上部。外面格子タタキメ。 内面同心円状タタキメ。	外／灰白 内／灰	３㎜以下の 砂礫含む	良好
31-45 20-45	須恵器 甕				自然釉。大型甕の体部片。頸部と胴部の境は「く」の字状に屈折。	外／黄灰 内／オリーブ灰	２㎜以下の 砂粒含む	良好

第３表　SB03出土鉄製品・石器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形　態・手法の特徴	備　　考
		器長	器幅	器厚		
35-43 22-43	鉄　斧	9.8	4.5	2.4	小型の鍛造鉄斧。	
35-44 22-44	不　明			2.2	簀の子の一部か	
35-45 22-45	刀　子		3.3	0.3	鉄製	
35-46 22-46	鉄　釘		0.7	0.7	頭部は「L」字状に屈折。閂受けの一部か。	
35-47 22-47	閂受け		0.7	0.4	横木を受ける部分は「コ」の字状に折り曲げており、扉板に付ける部分である端部を外側に屈折させている。	受部7.2×8.8
36-50 22-50	釘		0.7	0.6	鉄製	
36-51 22-51	釘				鉄製	
36-54 22-54	鉄　滓				単純塊状の精錬滓。不定形で気泡を多く含む。2㎜以下の砂粒多く含む。	

■ＳＢ０４（第10・11図、図版6-a,6-b,6-c,7-a,7-b）

〈検出状況〉

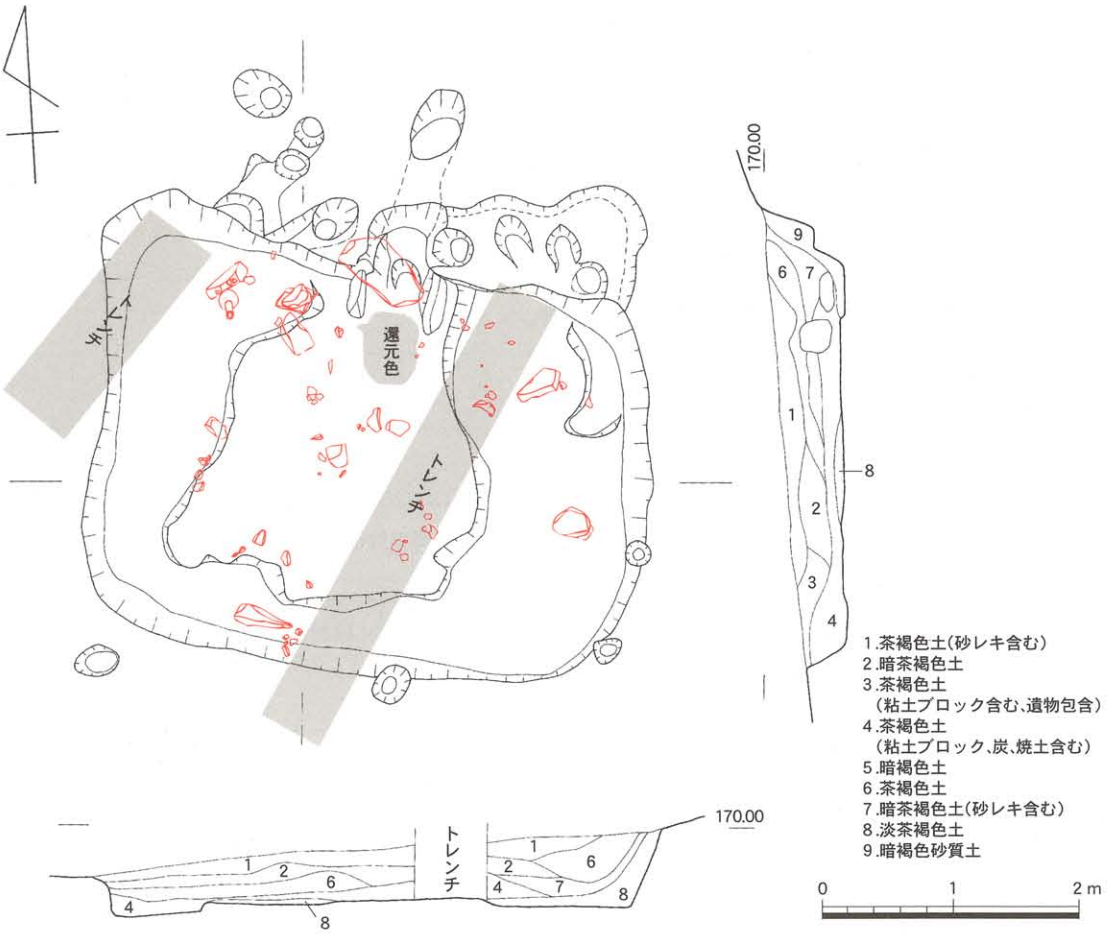
この遺構はＡ区より検出された。試掘の段階ですでに地山を掘り込まれているのが確認されており、以下のような検出過程から隅丸方形の竪穴住居址と判定された。

すでに確認されていた掘り込みは、ＳＢ03検出面よりも下層の第６層上面から始まっており、ＳＢ03完掘の後に、掘り込みを確認した周辺の第４、５層を除去し精査を行った。その結果、長軸をN74°Wにもつ長方形様の平面プランとそのプランの周囲にピット８個が確認された。

東－西に１本、南－北に３本のトレンチを設け遺構覆土の層位観察を行った結果、遺構中央部から焼土を含んだ層が確認され、この層上面まで掘り込み内の覆土の除去が可能であると考えた。

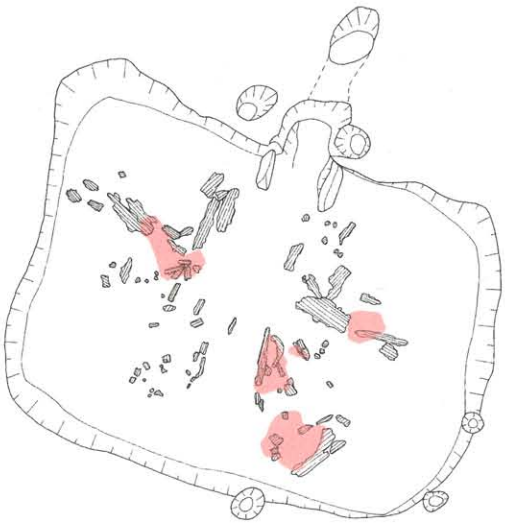
層位観察後に遺構覆土の除去を行っていたところ、遺構西側に位置する掘り込み検出層より須恵器長頸壺（第31図42）が出土した。この土器は、口縁端部に一部欠損が見つかる程度でほぼ完形に近い状況で９世紀のものと比定されるが、層位観察結果で覆土と確認された層からの出土であるため、この遺構に伴う遺物であるかの判断はこの段階ではできなかった。

続いて斜面上部から流入した覆土の除去を行ったところ、遺構北東側の掘り込み付近から並行に直立させた石２個が検出された。この石に付着している粘質土は、内側部分が赤く硬質のもので、上部及び外側のもろい粘質土とは異なるものであった。石の間の土を除去したところ、地山が現れ、その面も周辺とは異なる赤い土色になっていた。この赤く硬質な土色の性格を判断するため、石周辺を精査したところ、遺構北側のピット４個の内、２個が地山面を掘り込んでのいるのが確認され



第10図　SB04実測図

た。地山面から検出されたピットの内、長方形様の平面プランの短軸中央線の延長上に位置するピットの覆土を除去していくと、前述の石の間につながっており、このピットが作りつけカマドの煙道の煙出しであることが判明した。そのため、石周辺の土質の変容はカマドにより火を受けたものと推測できた。付着している粘質土の除去をおこない石表面を観察した結果、火を受けた形跡が見当たらず、これらの石はカマドの骨組みに使用されていたものと判断した。



第11図　SB04炭火物出土状況実測図

遺構の覆土を焼土が含まれている層まで除去したところ、遺構中心部の焼土面に大量の炭化物（第11図）が検出された。この炭化物を精査すると、建築部材であることが判明した。この木材は、木目の方向から東－西及び南－北の２種類の方向性をもっており、特に東西方向の木材は遺構中心の東－西軸上にあり、南北のそれと比較して大きい炭化物である。これらを住居の構造材と仮定すると、前述のものは棟木、後

述のものは垂木と推定できた。カマドの部分で述べた遺構北側のピットの内、カマド付近にあるものが柱穴とみられ、垂木と推測される炭化物がその柱穴を起点にして遺構中心部に向かう方向性をもっている。このことから、４本の柱で棟木を支える上屋が想定されるが、いずれにしてもこれほど大量の炭化物が検出されたのは、この建物が一挙に焼失したためと推測できる。

以後、カマド跡及び建物の部材が検出されたことから、この遺構を隅丸方形の竪穴住居址ＳＢ04とした。

炭化物及び覆土を除去し精査を行ったが、柱穴などのピットは確認できなかった。地山上の床面が検出されたのはカマド周辺部に限られ、中央部には地山とは異なる踏み固められたような面が確認できた。これはカマド底面の延長上に位置し、日中の生活面と推測できる。中央部以外の東西の各面は比較的軟質な土質をもち、ムシロなどを敷いて居住していた転び床と考えられるが、その事を立証できる資料である繊維痕は検出できなかった。

掘り込み周辺部のピットについては、北側に地山面を掘り込んだ１個と前述のカマド跡を中心にして左右に１個ずつ、西側に小規模のものが１個、南側に３個確認されている。南側ピットの内２個はＳＢ04の短軸中央延長線上に等間隔で並んでおり、この部分を本住居址の入口と仮定すると、屋根を支える柱が立っていた可能性が高い。

以上のことから、ＳＢ04は北側に作り付けカマドをもつ平入りの竪穴住居と復原できる。

ＳＢ04の炭化物以外の遺物では、覆土中より須恵器片、瓦質土器片、床面付近から土師器片が出土している。

〈平面・断面形〉

ＳＢ04は、長径約4.30m、短径約3.20mの隅丸方形の竪穴住居址で、遺構検出面からの深さ約60cmを測る。中央の生活面と想定できるものは幅約２mの方形を呈し、５cm前後の比高をもつ。

〈出土遺物〉

ＳＢ04から出土している遺物は、大部分が覆土中からのものであり、床面直上からの出土した遺物は１点のみである。

第４表　SB04出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
26-10 14-10	土師器 甕	22.2			単純口縁。	外／浅黄橙 内／にぶい黄橙	２㎜以下の 砂粒含む	良好

第５表　SB04覆土中土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
29-12 17-12	須恵器 坏	14.0	11.2	3.9	底部平底。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境に丸みをもつ。口縁端部直下押さえ。	灰白	１㎜以下の 砂粒含む	やや 不良
29-19 18-19	須恵器 坏	12.6	10.0	3.7	ケズリ出し高台。低い高台が底部縁よりやや内側に付く。口縁端部の内面側に浅い沈線状の凹み。	緑灰	１㎜以下の 砂粒含む	良好

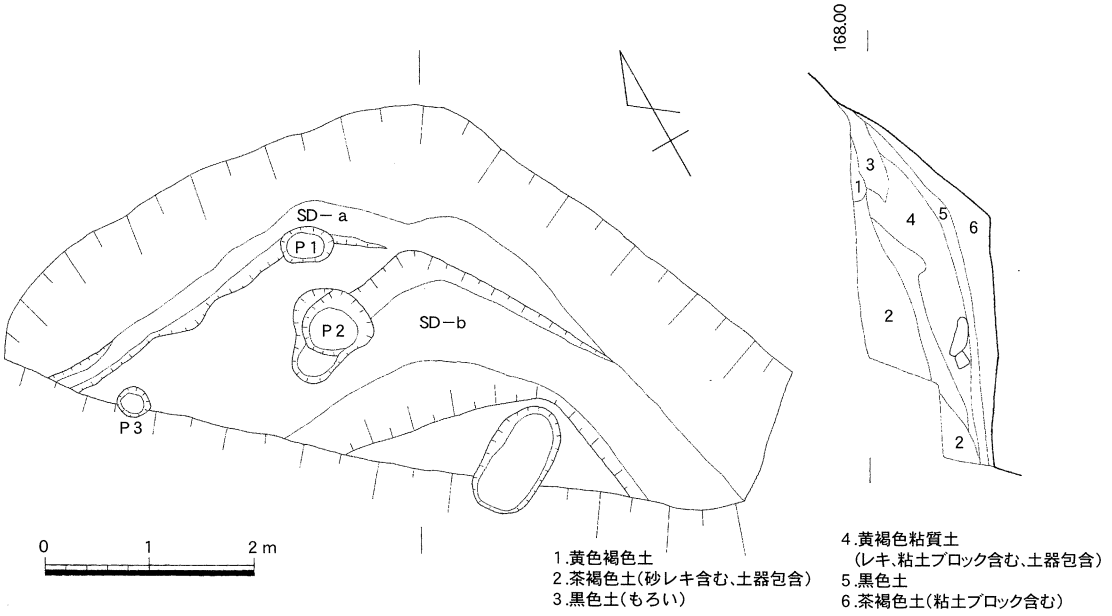
30-35 19-35	須恵器 蓋	16.0			釦状のつまみが付くタイプと考えられる。天井部内面は平坦で口縁端部を逆「L」字状に折り返し、内側に浅い溝を設ける。	天井部／暗青灰 口縁外／青黒 内／緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
31-42 19-42	須恵器 壷		8.3		9世紀。ほぼ完形品。張り付け高台。肩部は張っている。頸部細長。肩部と頸部に平行沈線を施す。	外／明青灰、一部暗青灰	４㎜以下の砂礫含む	良好
31-44 20-44	須恵器 壷				瓦質土器。大型壷の体部片。上下不明。	外／黄灰 内／淡黄	２㎜以下の砂粒含む	良好

■ＳＢ０５（第12・13・14図、図版7-c,8-a,8-b）

〈検出状況〉

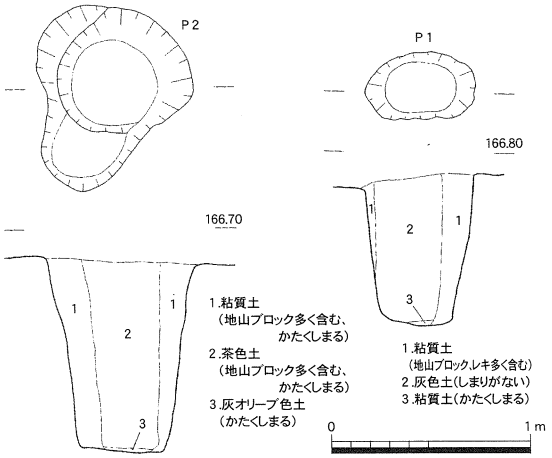
この遺構は、Ｄ区の進入路面直下から検出された。「261号」開設により床面の大部分が失われているが、以下のような検出過程から隅丸方形の竪穴住居址と判定した。

グリッド中心線（Ｌ）を延長し進入路面の土を除去したところ黄褐色粘質土が露出した。ボーリングステッキによる調査では硬度が高いことから地山であるとの見解をもった。そこで進入路面直下の粘質土面を全て露出させたところ、「261号」開設時に掘削された部分を１辺とした北東側頂点部の丸い三角形様のプランが確認された。この平面プランに北東－南西のベルトを設け地山以外の面を除去した結果、検出面から1.5m下に平坦面とその平坦面上から土坑１基及びピット３個（東からＰ１、Ｐ２、Ｐ３とする）と掘り込み下部に沿うような溝状遺構のプランが検出された。この溝状遺構は掘り込み下部を巡る幅の狭いものとＬ字状に屈折する比較的幅の広いものが重複しているのが確認され、前者をＳＤ－ａ、後者をＳＤ－ｂとした。この溝の覆土を観察した結果、ＳＤ－ｂは、ＳＤ－ａを削り込んで作られており、ＳＤ－ｂの屈折に沿って掘り込みも一部分が東側に入り込んでいるのが確認された。これら溝状遺構が平坦面の掘り込み下部を巡っていることに加えて、ピットが平面プラン頂点部の下に集中していることから、この平坦面を住居址の床面と判断し、竪穴住居址ＳＢ05とした。



第12図　SB05実測図

ＳＢ05は、溝状遺構及び壁の掘り込みからＳＤ－ａを伴う住居（ＳＢ05－ａ）の東側部分拡張してＳＤ－ｂを伴う住居（ＳＢ05－ｂ）が建てられたことが推定される。ピットについては、Ｐ１、Ｐ２の土層観察から柱の根跡が確認され、ＳＢ05に伴う柱穴と判断された（第13図）。Ｐ３については不明である。また、土坑については、長軸延長部の掘り込み側から覆土が流入しており、床面より下２層目から「代田」と書かれた墨書土器（第30図29）が出土しているが柱の根跡などは検出されなかった（第14図）。



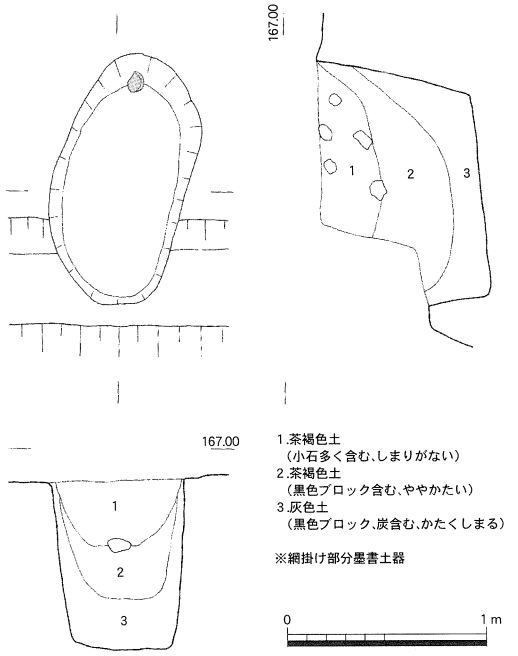
第13図　SB05 P1･P2実測図

以上により、本遺構は、掘り込み及び床面の形状、柱穴の位置から隅丸方形の竪穴住居址と推定される。

墨書土器以外の遺物としては、覆土から土師器の甕片が出土している。

〈平面・断面形〉

この遺構は「261号」開設時の掘削により床面の半分以上が流失しているが、残った部分では、検出面の北東部分で鈍角に屈折しており南北及び東西方向に共に約５ｍの範囲が確認できた。検出面から床面までの深さ1.40m前後である。床面には壁に沿ってＳＤ－ａが幅25～35cm、床面からの深さ約５cmで巡っており、その南側にＳＤ－ｂが存在する。ＳＤ－ｂは幅0.65～1.50mを測り、床面からの深さ１～９cmである。ピットは、Ｐ１が長径55cm、短径33cmの楕円形を呈し床面からの深さ75cmを測る。Ｐ１の覆土中には長径35cm、短径30cm、深さ70cmを測る黒色土層があり、住居の部材の根が腐食したものと推測される。Ｐ２は、径75cmの円形を呈し、床面からの深さ95cmを測る。Ｐ２は、Ｐ１と同様に径40cmの黒色土層があり、この部分に柱材が存在していたと推測される。



第14図　SB05土坑実測図

第６表　SB05出土土器

挿図図版番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
26-11 14-11	土師器 甕	20.4			単純口縁。頸部浅く湾曲。口縁部大きく外反。外面及び口縁内面にスス付着。	外/にぶい黄褐 内/にぶい黄橙	1.5 mm 以下の砂粒含む	良好

30-29 18-29	須恵器 蓋	13.5	5.2	2.5	つまみ内に「代田」の墨書。ほぼ完形品。ケズリ出しの輪状つまみ。天井部に平坦面はなく、口縁部に向けてなだらかに下降する体部をもつ。口縁端部わずかに外反。	天井部／緑灰 口縁外／明緑灰 内／緑灰	４㎜以下の砂礫含む	良好
30-30 18-30	須恵器 蓋	12.4			自然釉。外面に身の口縁部付着。つまみ欠失。口縁部を「コ」の字状に折り返し、内面わずかにくぼむ。天井部は広く平坦。	外／オリーブ黒 内／明緑灰	4.5 ㎜ 以 下の砂礫含む	良好

⑵ 土壙墓・土坑

本遺跡からは土壙墓２基と詳細不明土坑３基の計５基が検出され、この内４基がＢ区に集中していた。残る１基であるＳＫ01は当初設定していた調査区外から検出された。

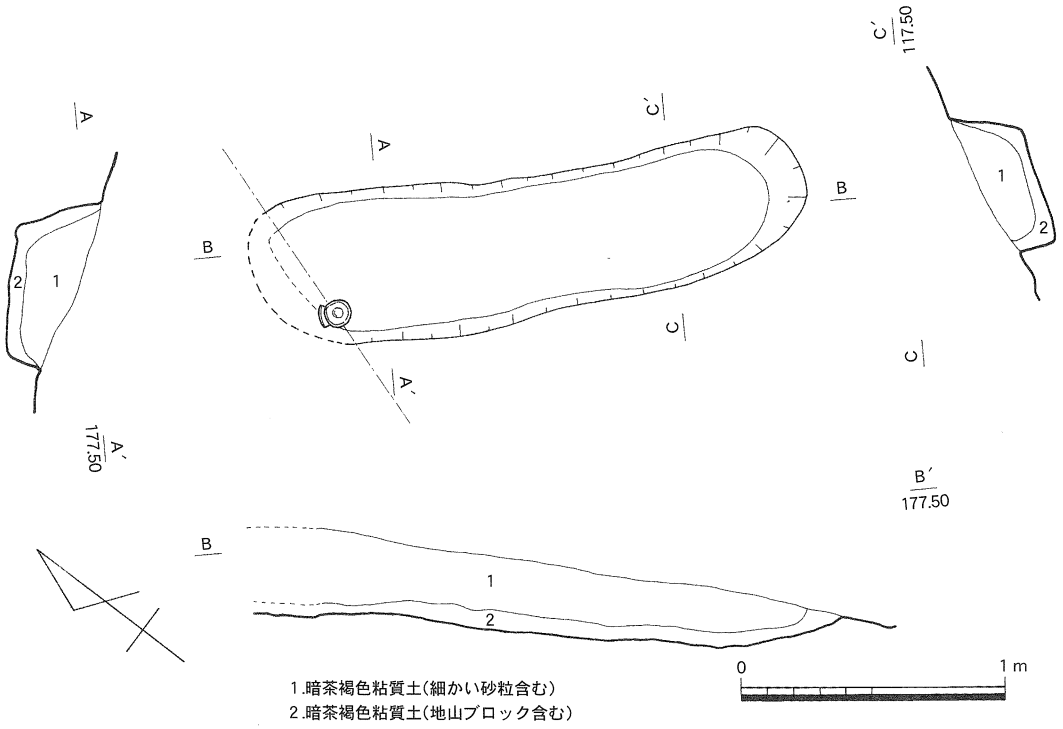
Ｂ区北東側の１段目平坦面より３基の土坑がN35°Wの軸線上に並列して検出され、南東からＳＫ03、ＳＫ04、ＳＫ05とした（図版10-a）。この平坦面は試掘時のトレンチ掘削により確認されており、トレンチの底に円形の平面プランの一部検出されていた。土壙が検出された平坦面は、地山を削り込んで作られており、北東側に削り込んだ斜面が３基の土坑を取り囲んでいる。

平坦面上の東側斜面には芋類を保管するための横穴と平坦面下の西側斜面には石組みが確認されており、聞き取り調査からこの石組みは山仕事用の作業小屋（ハンヤ）に伴うものであることが判明した。

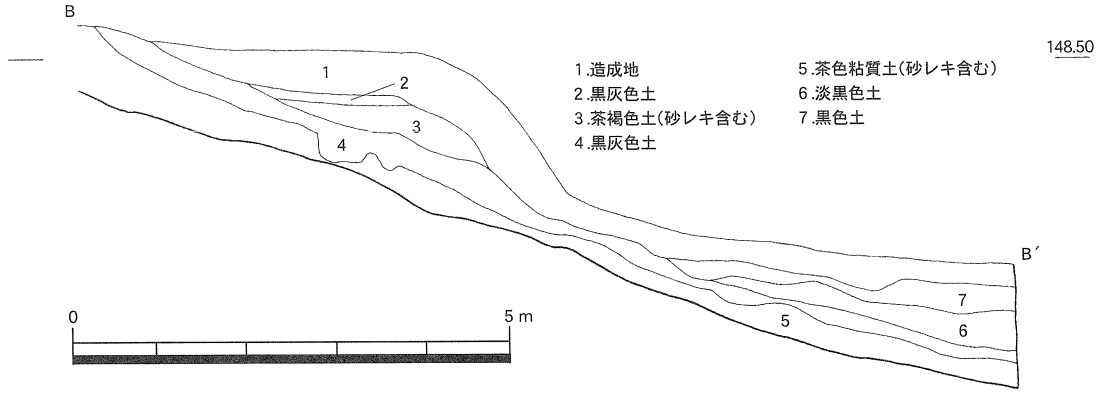
■ＳＫ０１（第15図、図版9-a）

〈検出状況〉

この遺構は、Ｃ区最東端の当初設定した調査区外から検出された。以下のような検出過程から隅丸長方形の土壙墓と判定した。



第15図　SK01実測図



第16図　最東端土層断面図（第３図Ｂ-Ｂ′）

Ｃ区の東端を設定するために、グリッド中心線（Ｌ）に直交する南北軸の最東端にトレンチを設けた。層位確認を行った結果、トレンチの西面は自然堆積の層が地山面まで続いていたが、東面からは溝のような落ち込みとその落ち込み底部に須恵器の混入しているのが確認された（第16図、図版8-c)。そこで、調査区を拡張し落ち込み直上まで表土及び畑の造成土を除去したところ、長方形様の平面プランが確認された。このプランの覆土を除去した結果、層位観察で落ち込みと見られた部分から土坑の四隅の一部が確認された。規模から遺体が埋葬されていたものと判断され、隅丸長方形の土壙墓ＳＫ01とした。ＳＫ01は等高線に並行せず、長軸をN36°Wにとる。

〈平面・断面形〉

ＳＫ01は、Ｃ区に設けた層位確認のトレンチ掘削により、北西部掘り込み及び底面が破壊されている。しかし、コーナーの一部が確認されたことから長径が2.10mと復原できる。短径は55cmを測る。検出面からの深さ約37cmを測る。断面観察からは木棺の痕跡が確認できないので埋葬方法は直葬と考えられる。

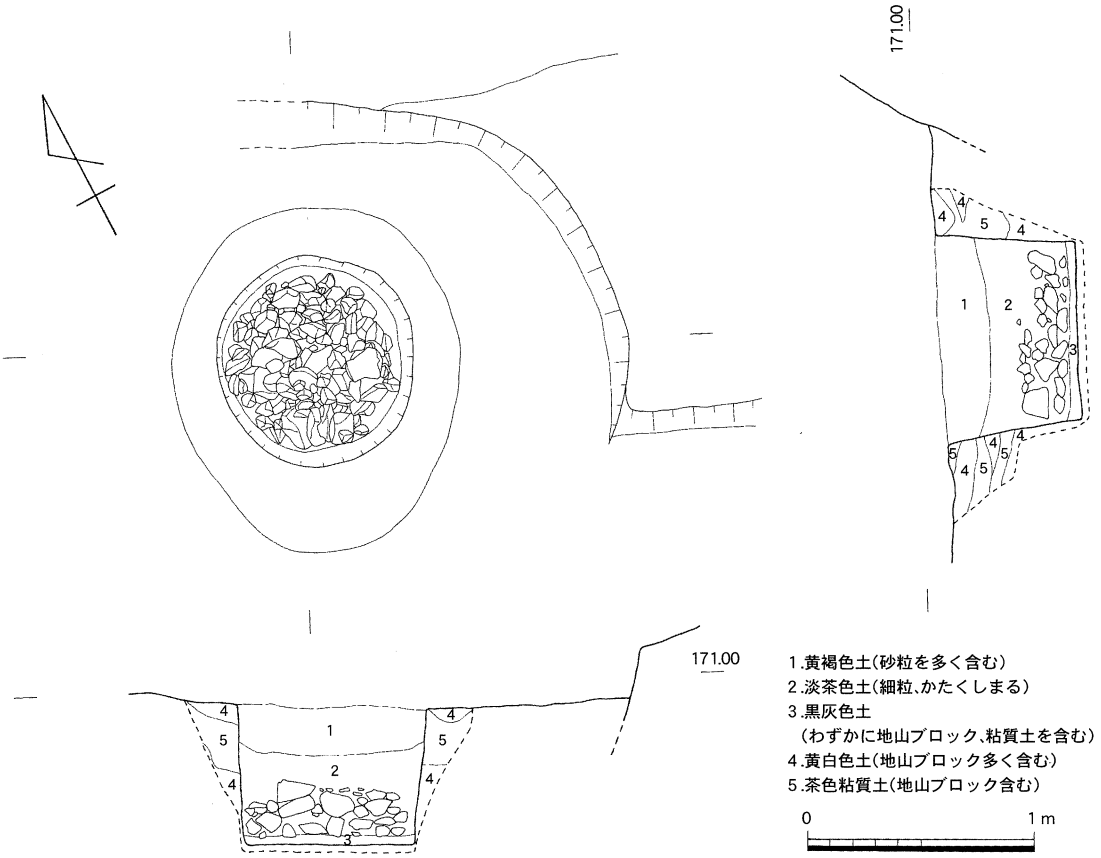
第７表　SK01土器出土

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
29-1 18-1	須恵器 坏	14.6	8.0	4.0	７世紀前葉TK207併行期。完形品。底部外面ヘラケズリ。口縁部やや外反。	灰白	２㎜以下の砂粒含む	良好
29-4 18-4	須恵器 坏	8.4	8.0	3.2	７世紀前葉TK207併行期。完形品。宝珠形つまみが付く蓋をもつ小型の杯。底部外面ヘラおこし後ナデケシ。	口縁～体部外/灰 底外/灰オリーブ 内／灰白	３㎜以下の砂礫含む	良好

■ＳＫ０２（第17図、図版9-b,9-c）

〈検出状況〉

この遺構は、Ｂ区２段目平坦面より検出された。検出面では、地山ブロックを含んだ土の面に粘質土がドーナツ状に廻っているのが確認できた。土層観察から、土壙内に粘質土を充填し丸形の棺桶を埋置したことが判明したが箍の痕跡は確認されなかった。この土壙の覆土を除去すると、底面より２～27cmの間で５～20cm大の礫が確認された。これらは棺押えの石が棺桶の腐食とともに沈下したものと推測される。



第17図　SK02実測図

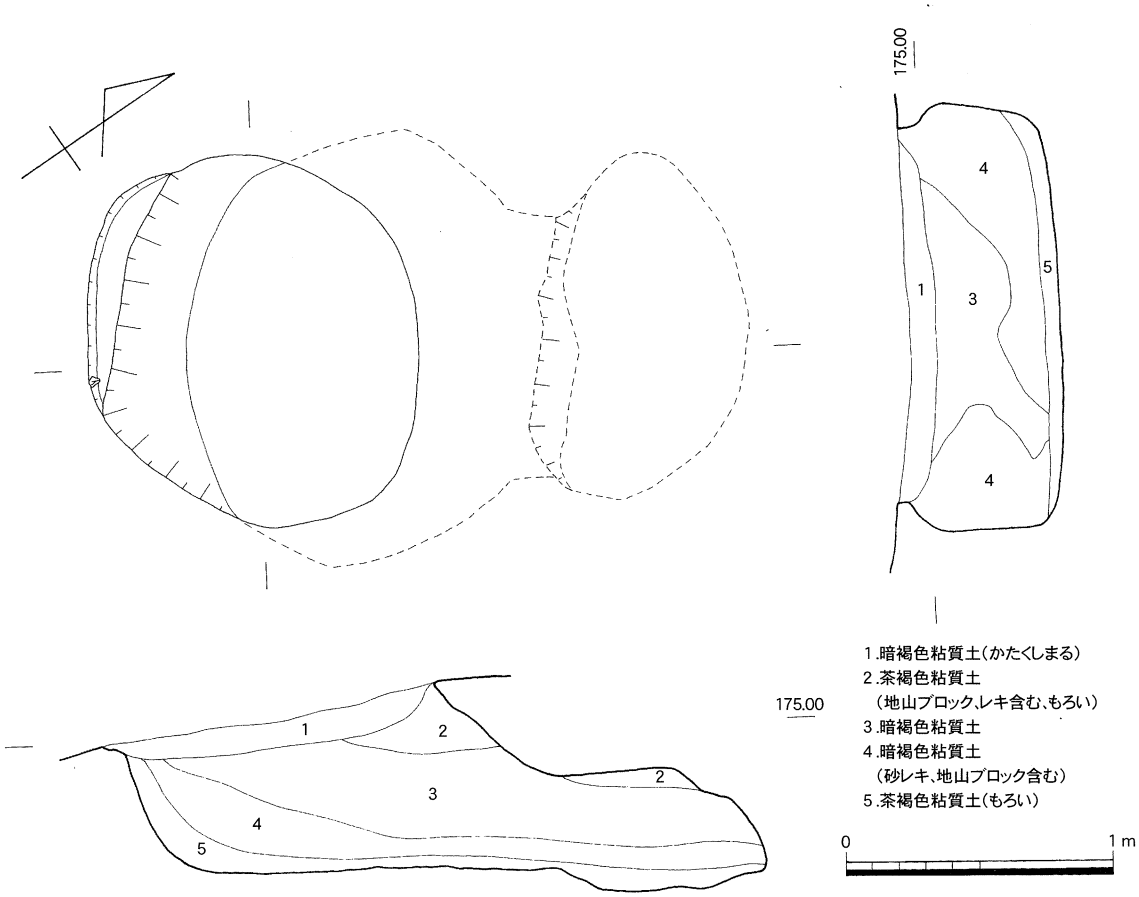
〈平面・断面形〉

ＳＫ02は長径92cm、短径85cmの円形を呈し、深さ約60cmを測る。粘質土の断面は逆台形で、検出面での平面形は長径1.50m、短径1.25mの楕円形を呈し、底面径約80cm、深さは約65cmを測る。

■ＳＫ０３（第18図、図版10-b）

〈検出状況〉

この遺構は、Ｂ区北東側１段目平坦面より不整円形の平面プランとして検出された。平坦面下の斜面に沿って十字ベルトを設け円形プランの覆土を除去する段階で、土坑壁面の一部や底面から黄褐色粘質土の地山が露出した。このことから、この土坑は地山を削り込んで作られていることが判明し、楕円形土坑ＳＫ03とした。壁面全体の土を除去したところ、北東寄りの壁面の一部に地山ではない脆弱な土質のものが露出した。北東方向のベルトを延長してこの地山とは異なる土を追跡したところ、円形土坑中心点よりN40°Eへ地山が水平に掘り込まれているのが確認された。この水平方向のベルトを精査した結果、水平方向の掘り込みの底面は土坑底面とほぼ同じ深さで延長されているが確認され、奥壁部付近では土坑底面の延長面に同様の脆弱な土が検出された。この土を除去したところ、地山の掘り込みが１段下面にも確認され「２段目底面」、前述のものを「１段目底面」とした。ＳＫ03の掘り込み方は、土坑の形態からまずは縦方向に掘り込み横穴を設けたと推測されるが、覆土からは確認できなかった。ＳＫ03の覆土の状況は、ベルトの観察から南方向から流れ込んでいることが想定できる。



第18図　SK03実測図

ＳＫ03に伴う遺物は確認されていないため、時期及び性格などは不明である。

〈平面・断面形〉

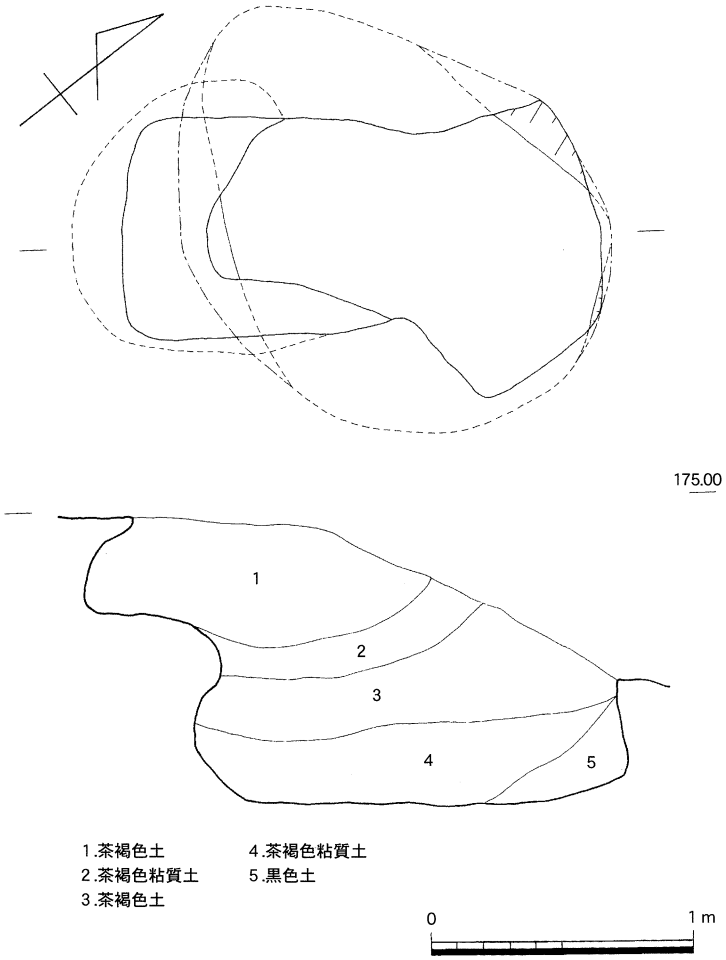
検出面での平面形は長径1.40m、短径1.23mの楕円形を呈し、検出面より１段目底面までの深さ約70cm、２段目底面までは約80cm、底面全体の総延長は約2.10mを測る。

１段目底面に伴う壁面の掘り込みは、検出面平面形の中心点よりも北東側に50cm程度中心点がずれており、底面延長方向に直交する長径をもつ楕円形を呈する。２段目底面に伴うものは南側底面端より1.30m北東方向に落ち込みが始まり、１段目と同様の楕円形を呈する。

■ＳＫ０４（第19図、図版10-c）

〈検出状況〉

この遺構は、Ｂ区北東側の１段目平坦面より南西側斜面の等高線に直交する方向を長軸にもつ長方形様の平面プランとして検出された。平面プランの長径中心軸に沿ってベルトを設け土坑覆土を除去した結果、北東側で地山と同質の壁面及び平坦面が確認された。その平坦面レベルを目安としてベルト以外の覆土を除去したところ、南側に覆土と同質の土の面が露出し、下面への覆土の追跡を行った。この追跡により、壁面以外にも地山面を削り込んだ平坦面が確認され、有段土壙ＳＫ04とした。ＳＫ04の２段目の掘り込み方は、竪穴掘削した壁の面に横穴を設けたＳＫ03とは異なり、竪穴を掘り込み平坦面を作った後、その直下を掘削したことが推定される。このことから２段目平坦面をＳＫ04の底面とした。



第19図　SK04実測図

ＳＫ04は、ＳＫ03と同様に遺物が出土していないため、時期及び性格などは不明である。

〈平面・断面形〉

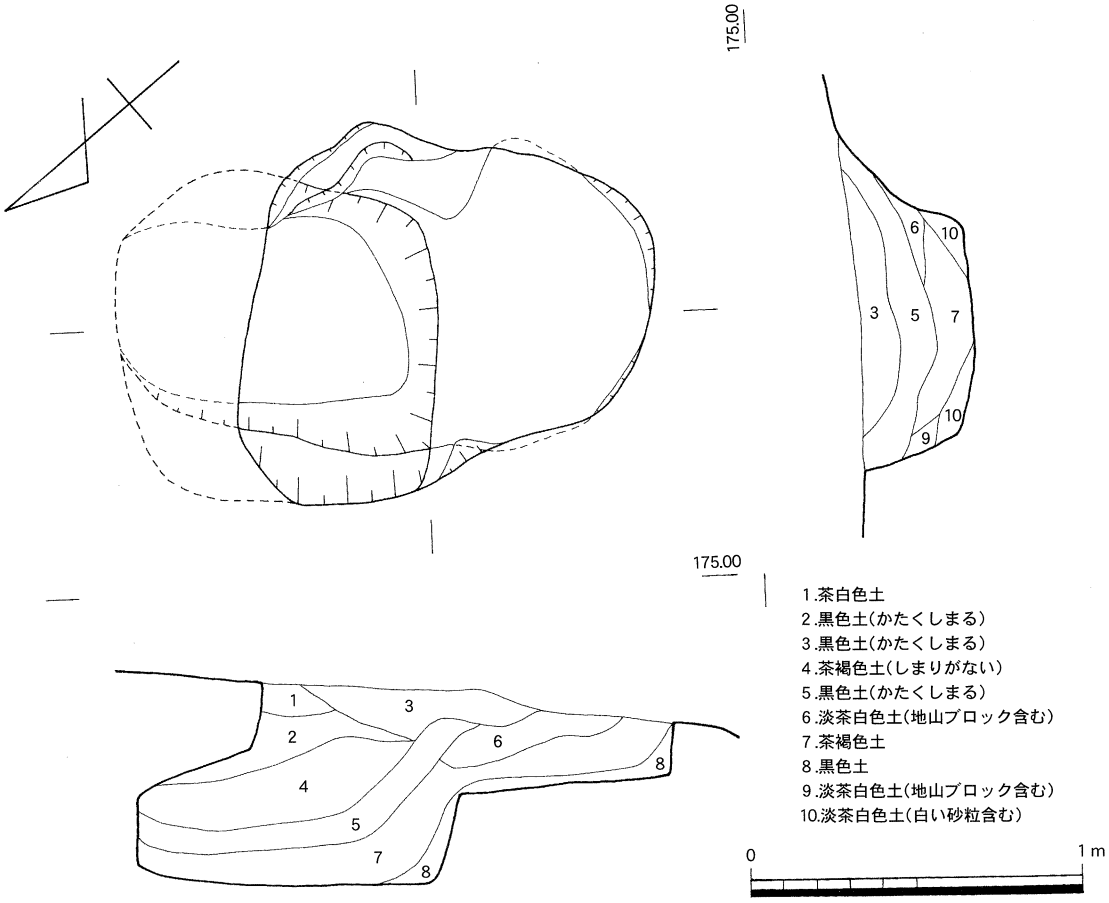
ＳＫ04の検出面での平面形は、南西部分が斜面にあたるため不明であるが、北側の平坦部分では幅53cmの方形を呈している。１段目平坦面に伴うものは、検出面からやや外反気味に掘り込まれており、平坦面付近にその掘り込みの最大径を確認できる。１段目平坦面は検出面から37cmの深さにあり、最大径約１ｍを測る。底面に伴う掘り込みの形態は、最大径を最深部ではなく１段目平坦面から底面間のほぼ中間点にとり、最大径の長軸をほぼ東西軸上にもつ卵形を呈している。規模は、長径1.85m、短径1.30m、検出面から底面までの深さは1.15mを測る。

■ＳＫ０５（第20図、図版11-a）

〈検出状況〉

この遺構は、Ｂ区北東側の１段目平坦面より不整円形の平面プランとして検出された。前述の試掘時に確認されていたプランの一部はこの遺構に該当する。当初、同じ平坦面上にＳＫ03、ＳＫ04が位置することから、この土坑も掘り込み方が特殊なものと想定していた。そのため、不整円形のプランにＳＫ03と同方向に十字ベルトを設け覆土の除去を行った。その結果、地山を浅く掘削した竪堀の平坦面北東側から脆弱な覆土が露出し２段目の掘削面が確認され、有段土壙ＳＫ05とした。２段目は、上部平坦面の１／２の位置からほぼ垂直に掘り込みが始まり、検出面よりも北東方向に水平の掘削が続き平坦面を作っている。この平坦面は、全体に地山が露出したことからＳＫ05の底面とした。

ＳＫ05の覆土は、ベルトの観察によりＳＫ03、同様に南方向から流入していた確認され、これら遺構が存在していた時期には、遺構面の広がりが南側にも存在していたことが想定できる。ＳＫ05からも遺物が出土していないため、時期及び性格などは不明である。



第20図　SK05実測図

〈平面・断面形〉

上部平坦面は検出面からの深さ約30cmを測る。２段目の掘り込みの始まりは、上部平坦面南西端より北東側約53cmの位置にあり、検出面から底面までの深さ約60cmを測る。底面は南北径約87cm、東西径60cmを測る。東西の壁部分が膨らんでおり、最大径約１ｍを測る。

(3) 溝状遺構

Ｃ区の覆土を除去していたところＵ字状の溝が確認され、その底面から表裏に貝殻条痕文をもつ縄文土器が出土した。当初この部分を溝状遺構と判断しＳＤ01と仮称し、後にＡ区とＢ区の境界付近から検出された溝状遺構をＳＤ02としていた。しかし、精査の結果、Ｕ字状の溝は縄文土器の包含層と判断し、ＳＤ01を「遺物包含層１（縄文土器包含層)」、ＳＤ02を「ＳＤ01」と変更した。また、ＳＤ01は、ＳＸ01と重複しておりことから、詳細は「(4) その他遺構」に記載している。

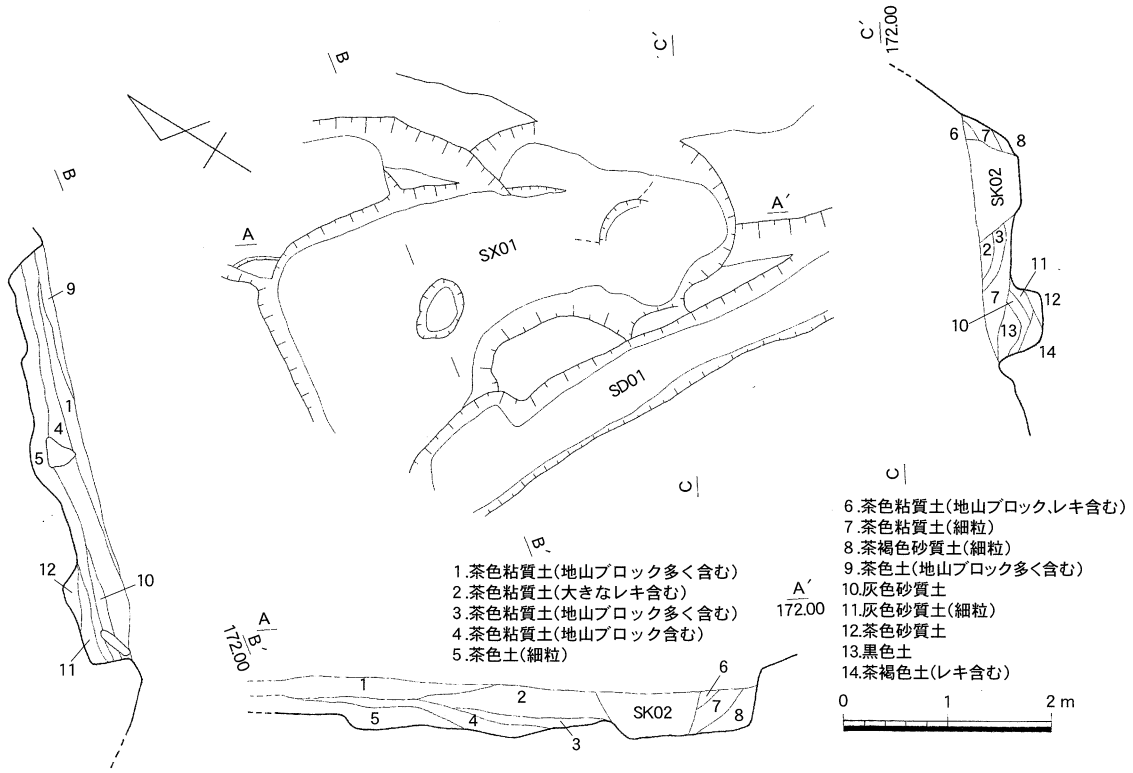
■ＳＤ０１（第21図、図版11-b)

ＳＤ01は、Ａ区とＢ区の境界付近であるＳＸ01南側よりN60°Wを中心軸にとる直線状の平面プランとして検出された。ＳＤ01の南東端はＳＢ04北側に位置し、延長は調査区外の国道建設時の掘削面までつながっている。

(4) その他遺構

■ＳＸ０１（第21図、図版11-c)

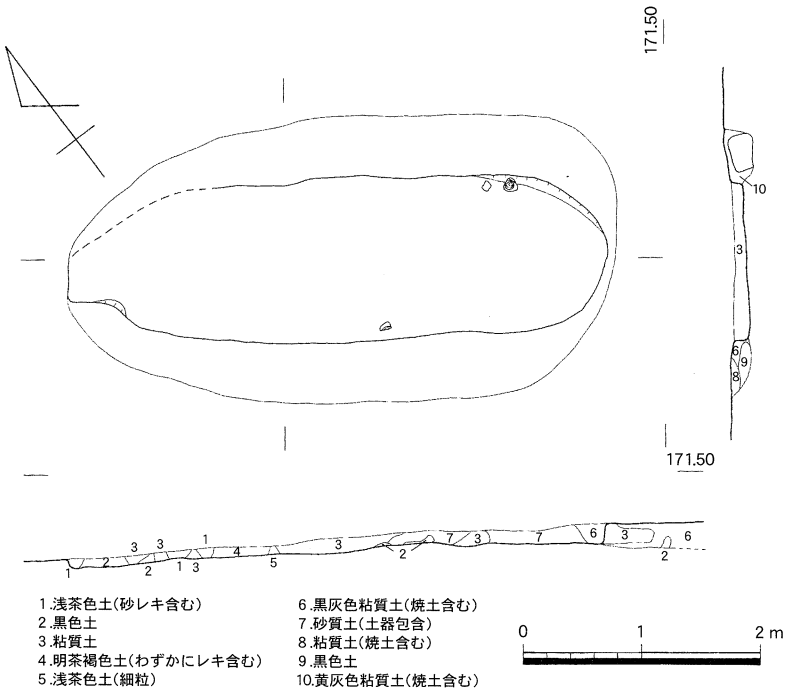
ＳＸ01は、Ｂ区２段目平坦面の地山面より検出された。平面ではＳＤ01及びＳＫ02と重複してい



第21図　SD01・SX01実測図

るが、土層観察からＳＸ01はＳＤ01よりも後出であることが判明した。その過程は、「ＳＤ01→ＳＸ01→ＳＫ02」である。遺物が出土していないため詳細については不明である。ＳＸ01は、竪穴住居址の一部とも考えられるが柱穴に相当するピットが確認できないため推測の域を脱しない。

■ＳＸ０２（第22図、図版12-a）



第22図　SX02実測図

〈検出状況〉

この遺構はＡ区中央のＳＢ03直上から検出された。検出過程は以下の通りである。

第３層まで剥いだ段階で焼土の混入した面が検出された。その焼土を追跡した結果、焼土の混入した面と同レベルで黄褐色砂質土を確認した。次にベルトを除去して精査を行うと、この砂質土が楕円形のプランとなり、これをＳＸ02とした。砂質土を除去すると土師質土器２点（第28図４・９）が検出された。この遺物は、２点ともＳＸ02の内

傾している掘り込みに底部を密着させ、口縁部を遺構底面に付けた状態で出土している。ほぼ完形で出土していることから、これら遺物は砂質土が混入する当初から遺構中に置かれていたと推測できる。

〈平面・断面形〉

平面形は黄褐色砂質土が混入した範囲が長径4.52m、短径1.40mの楕円形を呈し、深さは最も深いところで16cm、浅いところで約７cmを測る。また、焼土の粒が混入している範囲の長径は4.60m、短径2.40mである。

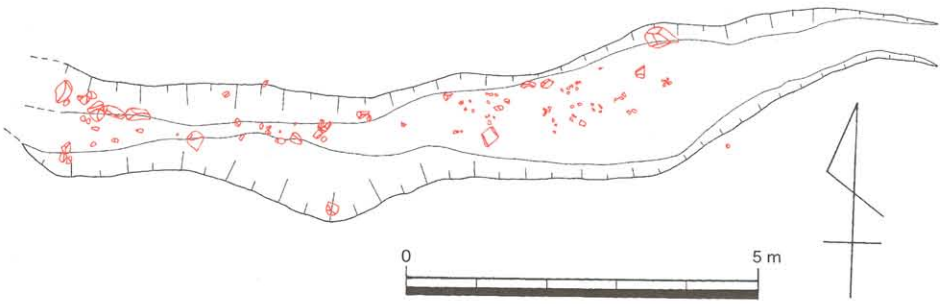
第８表　SX02出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
28-4 16-4	土師質 坏	12.0	5.6	5.0	底部わずかに中央部が凹む。底部外面に回転糸切り痕。体部との境は段なし。大きく外反する胴部をもち、つまみ出しの口縁端部へと続く。	浅黄橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
28-9 16-9	土師質 坏	12.8	6.6	4.5	底部平底。底部外面に回転糸切り痕。底部と体部の境に段をもち、大きく外形する胴部へと続く。	灰白	２㎜以下の砂粒含む	良好

■遺物包含層１（第23、図版12-b）

〈検出状況〉

この包含層は、調査区を横切る東－西方向の深い谷部分に位置する。グリッド中心線（L）に直交する南北軸トレンチを精査中に貝殻条痕文を内外面にもつ縄文の土器片が検出された。その広がりを追求した結果、トレンチの東西両面に土器の包含層が確認され、包含層上面までトレンチの拡張を行った。遺物の包含は、東面で当初のトレンチより２m程度の位置で途切れたが、西面では谷に沿って延長しているが確認された。土器を包含していた層は第６層黒色土層上面である。この層以下からは遺物及び遺構などが検出されていないため第６層を最終面と判断した。



第23図　遺物包含層１実測図

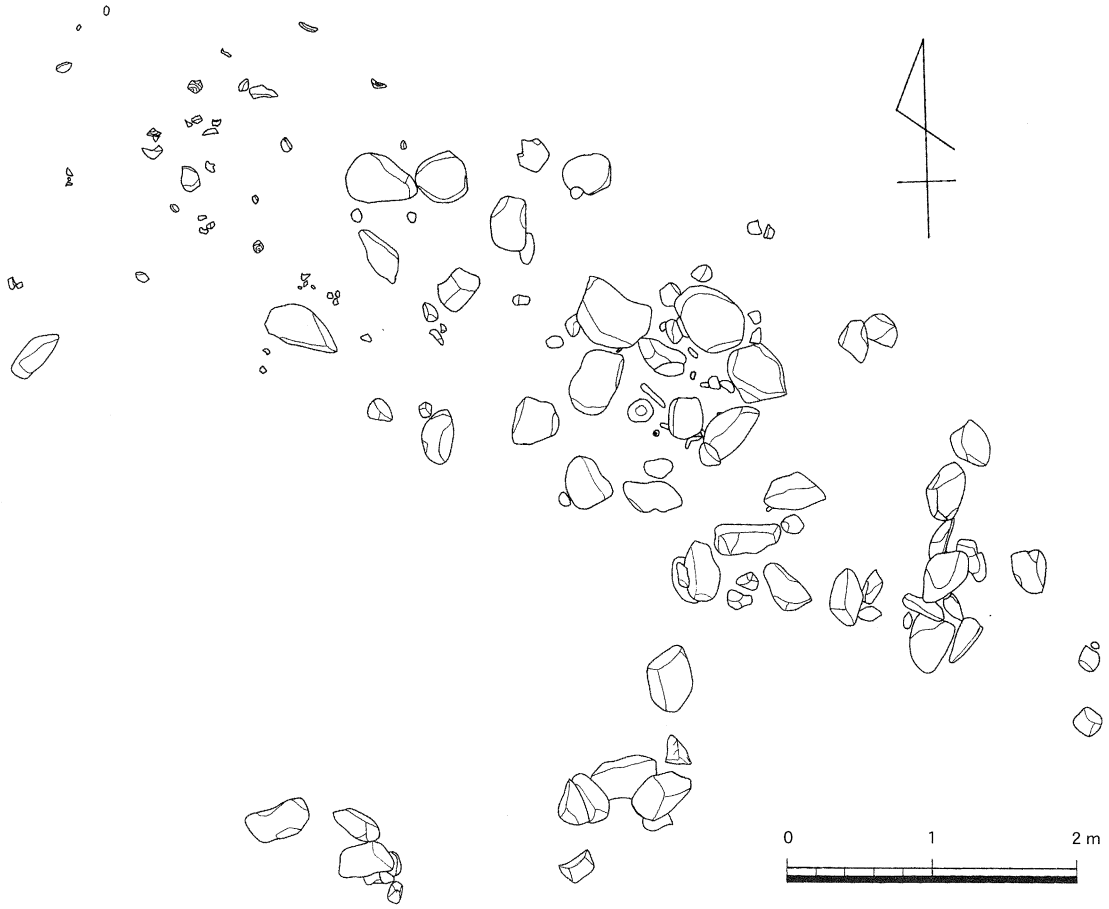
第９表　遺物包含層１出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
27-16 15-16	縄文土器 鉢				口縁端部は平坦。内外面に２枚貝による貝殻条痕文、口縁端部に縄文を施す。	外／にぶい赤褐 内／赤褐	２㎜以下の砂粒含む	普通

■遺物包含層２（第24図、図版12-c）

〈検出状況〉

この包含層は、ＳＢ02南西側の中央部平坦面に位置する。第２層除去時に人頭大の石が検出され、精査を行った結果検出されたものである。遺物は、河原石等の散布している間に鉄製の槍先や釘及び土師質土器の皿、寛永通宝などを確認できた。土師質土器については井原川を挟んで対面している古墓から出土しているものと酷似しており近世の遺物と考えられる。遺物の散布状況を確認した結果、河原石が散布している範囲は６ｍ四方以上であることと比較して、遺物は３ｍ四方以内と狭い範囲に限られていた。河原石及び遺物を除去してさらに精査した結果、土坑やピットなど検出できなかった。



第24図　遺物包含層２実測図

第10表　遺物包含層２出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　調	胎　土	焼成
		口径	底径	器高				
28-3 16-3	土師器 坏	12.0	5.6	3.8	底部平底。底部外面回転糸切り後工具によるナデ調整。	橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
28-5 16-5	土師器 坏	12.6	7.2	4.5	底部平底。底部外面回転ヘラおこし。内面にナデ押さえの同心円痕。	浅黄橙	１㎜以下の砂粒含む	良好

28-7 16-7	土師質 坏	12.0	6.6	4.3	底部平底。底部外面に回転糸切り痕。内面に同心円状のナデ痕。	にぶい黄褐	２㎜以下の砂粒含む	良好
28-10 16-10	土師質 坏		8.0		底部厚めの平底。底部外面回転糸切り痕。内面同心円痕。底部と体部の境は台状。	にぶい橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
28-12 16-12	土師質 坏		6.0		底部厚めの平底。底部外面に回転糸切り痕。	外／にぶい橙 内／橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
28-13 16-13	土師質 坏		5.8		底部は中央部が厚めの平底。底部外面に回転糸切り痕。内面に渦巻き状の凹み。底部と体部の境は台状。	橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-25 18-25	須恵質 坏	12.6	7.4	4.7	底部平底。底部外面に回転糸切り痕。底部と体部の境に稜。口縁端部わずかに内湾。	橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-26 18-26	須恵器 坏		6.0		底部は中央部が薄い平底。底部外面に回転糸切り痕。体部外面に回転ナデ後指頭圧痕。	浅黄	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-32 18-32	須恵質 坏	12.8	7.6	3.0	完形品。底部わずかに上げ底。底部外面に回転糸切り痕。胴部わずかに湾曲し、半ばで外傾。	にぶい黄橙	３㎜以下の砂礫含む	不良
31-48 18-48	須恵器 壷		16.0		底部平底。胴部は直線的に外傾。	外／灰オリーブ 内／暗灰黄	1.5㎜以下の砂粒含む	良好

表11表　遺物包含層２出土鉄製品・銅銭

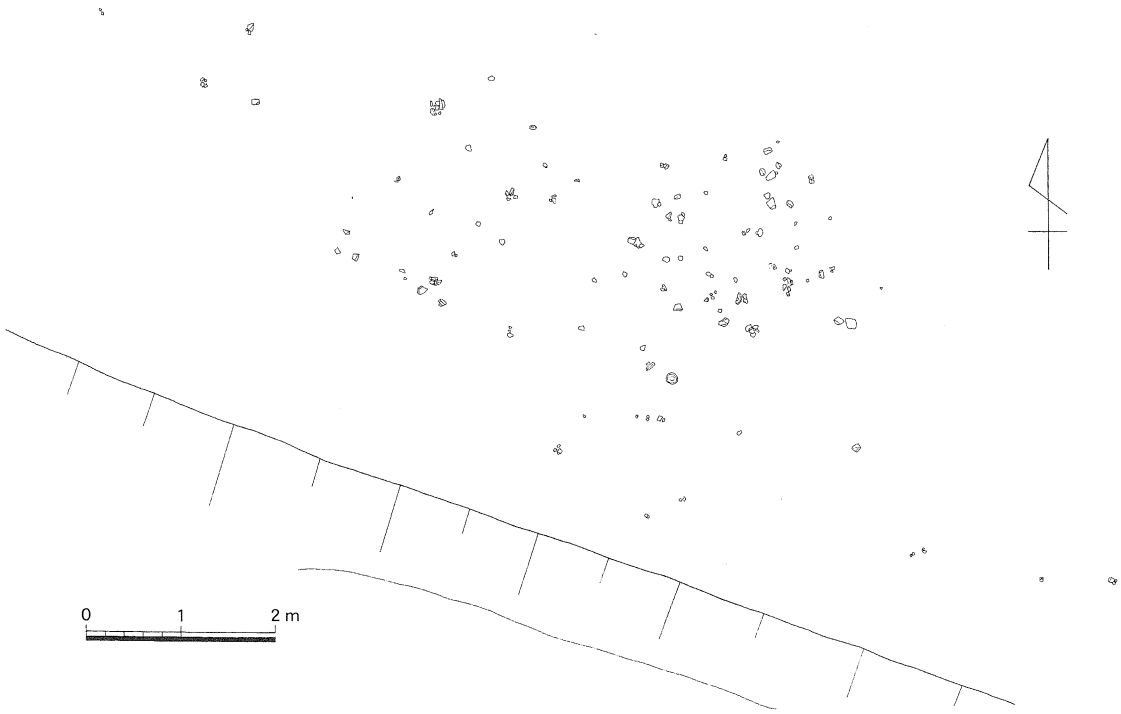
挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形　態・手法の特徴	備　　考
		器長	器幅	器厚		
35-42 22-42	槍　先	復元長 16.0	最大幅 3.2		鉄製	
36-48 22-48	槍　先				鉄製	
36-52 22-52	銅　銭				寛永通宝。	復元径 2.1cm
36-53 22-53	銅　銭				摩耗が激しく、「元」の字のみ判読。篆書字体。字体から元豊通宝（宋神宗・元豊年間1078～1085）か。	復元径 2.4cm

■遺物包含層３（第25図、図版6-a）

〈検出状況〉

この包含層はＳＢ04南側に位置する。土器の包含している層は第５層茶褐色土層である。この層は、上から暗褐色土と明褐色土の２層に分層され、両層から須恵器片、土師質土器片が出土している。出土した遺物の中には異なる層から出土していても接合できるものあることから、ほとんど時期差がなく堆積したことが推測できる。土器が包含されていた範囲は、縄文土器を包含していた深い谷の延長部であり、ＳＢ03検出の下層からＳＢ04検出層まで広がっていた。

土器以外の遺物としては、遺物包含層の第２層目である明褐色土層の下層の第６層黒色土層直上から石鏃が出土している。この層は前述の縄文土器が出土している層（遺物包含層１）と同質のものと判断される。また、包含層より出土している遺物は、この包含層の東側に位置するＳＢ04覆土中の遺物と接合できることから、Ｂ区からの土の流れ込みも想定できる。



第25図　遺物包含層３実測図

第12表　遺物包含層３出土土器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴／その他	色　　調	胎　　土	焼成
		口径	底径	器高				
26-9 14-9	弥生土器				弥生後期。スス付着。	外／にぶい黄橙 内／灰黄褐	２㎜以下の砂粒含む	良好
27-15 14-15	弥生土器 甕				弥生後期。薄手の作り。内外面にスス付着。	にぶい橙	１㎜以下の砂粒含む	良好
26-1 13-1	土師器 甕	22.0			単純口縁。直線的に立ち上がる胴部をもち、短く厚手の口縁部は大きく外反。端部近くは上面が平坦をなす。スス付着。	にぶい黄橙	３㎜以下の砂礫含む	良好
26-2 13-2	土師器 甕	24.0			単純口縁。胴部が直線的に立ち上がり、口縁部を強く外方に折り曲げている。外面スス付着。	外／灰黄褐 内／にぶい黄橙	２㎜以下の砂粒含む	良好
26-3 13-3	土師器 甕	26.0			単純口縁。直線的に立ち上がる胴部をもち、短く厚手の口縁部は大きく外反。端部近くは上面が平坦をなす。内外面スス付着。	外/にぶい黄橙、一部赤橙 内/にぶい黄橙	３㎜以下の砂礫含む	良好
26-4 13-4	土師器 甕	16.0			単純口縁。口縁部が大きく外反している。	浅黄橙	４㎜以下の砂礫含む	良好
26-5 13-5	土師器 甕	29.0			単純口縁。頸部は「く」の字状に屈曲。口縁部大きく外反し端部がふくらむ。	外／にぶい黄橙 内／浅黄橙	４㎜以下の砂礫含む	良好
26-6 13-6	土師器 甕	29.6			単純口縁。口縁部大きく逆「L」字状に外反し端部をつまみ上げている。	口縁外／浅黄橙 体部外／にぶい橙 内／にぶい橙	３㎜以下の砂礫含む	良好
26-7 13-7	土師器 甕				単純口縁。口縁部は逆「L」字状。内面スス付着。	外／にぶい橙 内／にぶい黄褐	1.5㎜以下の砂粒含む	良好

26-8 14-8	土師器 甕	28.8			単純口縁。擬口縁が見られる。開き気味の胴部をもち、頸部は弓状に湾曲。口縁部は大きく外反。スス付着。	外／にぶい褐 内／にぶい橙	1～2㎜の砂粒含む	良好
26-12 17-12	土師器 甕	37.0			単純口縁。頸部は「く」の字状に湾曲。短く厚手の口縁部は大きく外反している。	灰黄褐	３㎜以下の砂礫含む	良好
27-13 17-13	土師器 甕	28.0			単純口縁。余り張らない胴部をもち口縁部は短く強く外反している。外面スス付着。	外／橙 内／にぶい橙	４㎜以下の砂礫含む	良好
27-14 17-14	土師器 甕	21.4			薄手の単純口縁をもつ。頸部と口縁部の境がない。外面ヨコナデ後小さい格子目のタタキを施す。外面スス付着。	橙	２㎜以下の砂粒含む	良好
28-2 16-2	土師質 坏	11.4	5.0	4.1	底部平底。底部外面は回転糸切り痕後ナデケシ。底部と体部の境に稜。胴部は大きく外反。口縁端部わずかにつまみ出し。スス付着。	灰白	2.5㎜以下の砂礫含む	良好
29-2 17-2	須恵器 坏	14.8	12.0	3.5	底部わずかに上げ底。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境に丸みを帯び、体部は余り開かず、直線的に口縁に到る。	口縁/にぶい黄橙 内外/灰オリーブ	２㎜以下の砂粒含む	良好
29-5 17-5	須恵器 坏	16.0	10.4	4.1	底部平底。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境に丸みを帯び、体部は余り開かず、直線的に口縁に到る。	灰白	１㎜以下の砂粒含む	不良
29-6 17-6	須恵器 坏	15.0	13.0	3.5	薄手の作り。胴部はやや直線的。口縁端部は直下押さえ。	緑灰	２㎜以下の砂粒含む	良好
29-7 17-7	須恵器 坏	14.0	9.4	4.0	深めの坏身。底部平底。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境に丸みをもつ。	体内外/オリーブ灰 底部内外/灰黄	３㎜以下の砂礫含む	良好
29-8 17-8	須恵器 坏	15.4	10.4	2.9	浅めの坏身。胴部大きく外傾。口縁端部は刃状に尖るようにつまみ出し。	緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-9 17-9	須恵器 坏	14.4	10.0	4.0	底部やや上げ底。底部と体部の境に丸みをもつ。口縁端部は直下押さえ。	口縁内外／緑灰 底部内外／灰黄	２㎜以下の砂粒含む	不良
29-10	須恵器 坏		12.0		底部やや上げ底。底部外面回転ヘラおこし。胴部は底部よりやや丸みをもって外傾。	外／赤褐 内／暗灰黄	２㎜以下の砂粒含む	良好
29-11 17-11	須恵器 坏	15.2	11.8	3.4	薄手の作り。底部平底。胴部は直線的に外傾。口縁端部尖る。	灰オリーブ	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-13 17-13	須恵器 坏	14.4	11.4	3.7	薄手の作り。底部はわずかに凹む。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。全体的に変形（焼成時）。	暗青灰	２㎜以下の砂粒含む	良好
29-15 17-15	須恵器 坏	14.0	9.2	5.9	自然釉。薄手の作り。内外面とも工具による強い回転ナデ調整を施す。底部と体部の境は湾曲。	外／青灰 内／緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-16 17-16	須恵器 坏		10.4		底部わずかに上げ底。底部外面ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境はゆるく湾曲。	外／緑灰 内／青灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-17 17-17	須恵器 坏	17.0	8.6	4.1	貼り付け高台。薄手の作り。底部上げ底。口縁端部が尖る。	体部外/暗青灰 底部外/灰 内/灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
29-18 18-18	須恵器 坏	13.2	10.1	4.4	ケズリ出し高台。底部外面ヘラおこし。	緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-20 18-20	須恵器 坏	18.4	12.0	5.5	貼り付け高台。内外面に入念な回転ナデ調整を施す。底部と体部の境は鋭く屈曲。	緑灰	2.5㎜以下の砂粒含む	良好
30-21 18-21	須恵器 坏		10.0		ケズリ出し高台。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。	外／灰白 内／灰オリーブ	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-22 18-22	須恵器 坏	16.4	10.6	5.1	貼り付け高台。底部と体部との屈曲部に高台。底部回転ヘラおこし。	外／灰オリーブ 内／灰白	１㎜以下の砂粒含む	良好

30-24 18-24	須恵器 坏		11.0		貼り付け高台。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部内面にスス付着。	灰白	２㎜以下の砂粒含む	良好
30-27 18-27	須恵器 坏		12.0		薄手の作り。底部平底。底部外面回転ヘラおこし後ナデ。底部と体部の境に稜。	緑灰	２㎜以下の砂礫含む	良好
30-34 19-34	須恵器 蓋	16.0			薄手の作り。天井部平坦。肩部幅広。口縁端部はほぼ垂直に折れ曲がる。	緑灰	１㎜以下の砂粒含む	良好
30-36 19-36	須恵器 高坏		9.4		低脚坏。裾部大きく開く。口縁端部は逆「L」字状に折り返す。	灰白	２㎜以下の砂粒含む	やや不良
30-37 19-37	須恵器 壷				長頸壷の胴部片。胴部球形。	外／オリーブ黒 内／黒褐	２㎜以下の砂粒含む	良好
31-41 19-41	須恵器 壷		9.4		長頸壷の胴部片。幅広のケズリ出し高台。高台と体部の間に沈線を施す。胴部わずかに外傾。肩部は内側に屈折。	暗青灰	３㎜以下の砂礫含む	良好
32-46 20-46	須恵器 甕				大型甕の体部片。胴部内湾。	外／オリーブ灰 内／緑灰 底内外/にぶい黄橙	２㎜以下の砂粒含む	良好
32-47 20-47	須恵器 甕				大型甕の体部片。	外／浅黄 内／淡黄	２㎜以下の砂粒含む	普通

第13表　遺物包含層３出土石器

挿図 図版 番号	器　種	法　量（cm）			形　態・手法の特徴	備　　考
		器長	器幅	器厚		
36-38 22-38	石　鏃	1.8	1.2	0.2	基部に抉入のある小型の凹基無茎鏃。脚部が丸く抉入が比較的浅い形態をもつ。	縄文中期

（5）遺構に伴わない遺物

大地ノ元遺跡が所在する地域は広範囲で畑地として利用されていたことから、耕作土と遺構検出面の間の層に各時代の遺物が包含されていた。以下その中から陶磁器及び石器、鉄製品について報告する。

陶磁器に関しては伊万里系及び肥前系、石見焼が多く出土しており、時期は18世紀から19世紀までの間のものが大部分を占める。

第14表　調査区内出土陶磁器

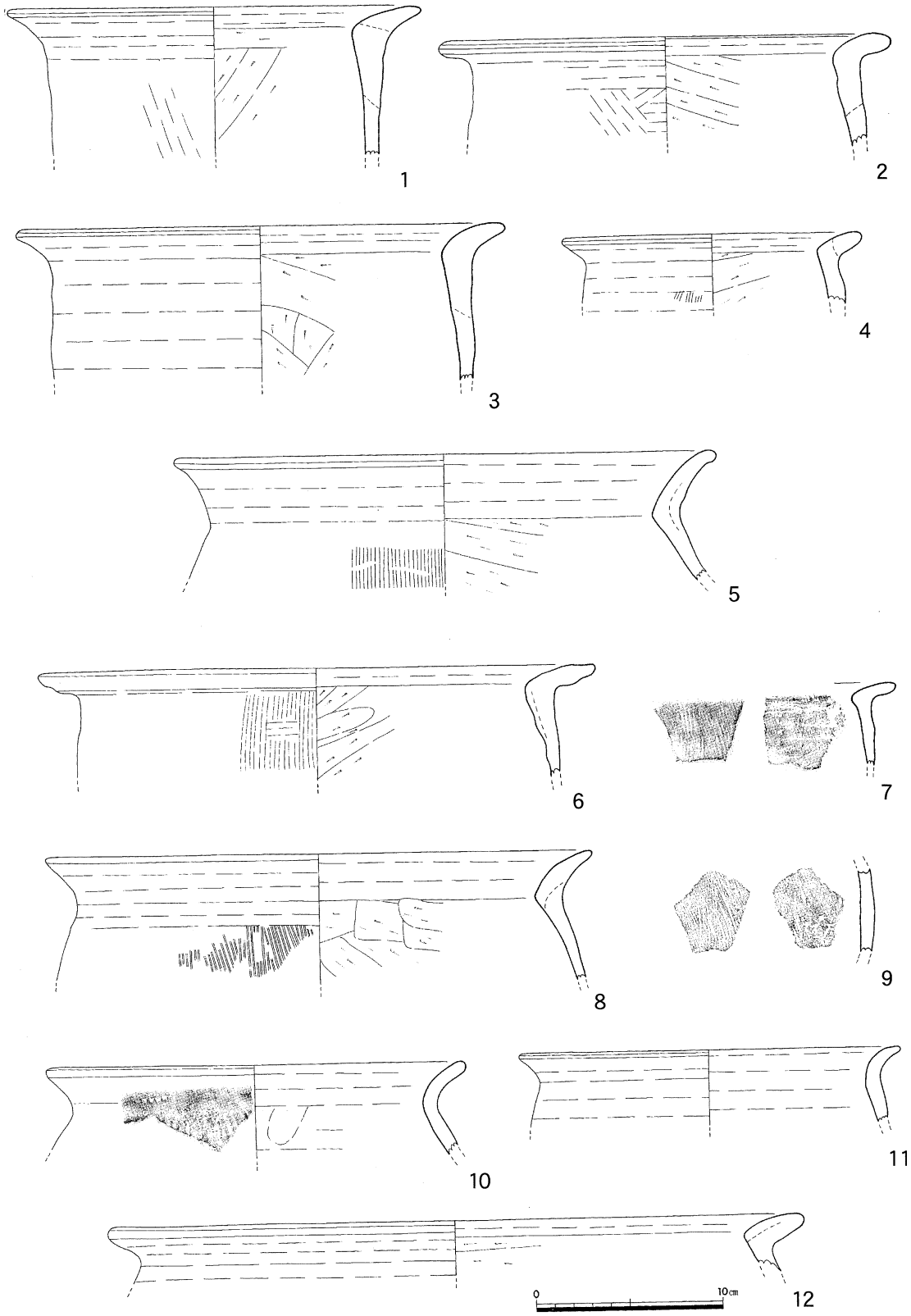
挿図 図版 番号	出土場所	器　　種	法　量（cm）			形　態・手法の特徴	色　　調	備　考
			口径	底径	器高			
33-1 21-1	Ａ区表採	染付磁器 碗		4.5		ケズリ出し高台。 外／底部に２条と高台に１条線。 内／見込に１条線と不明文様。	内外／青白 染／藍	伊万里系
33-2 21-2	Ａ区表採	染付磁器 碗		6.0		高めのケズリ出し高台。体部は逆「ハ」の字状に開きわずかに湾曲。 外／花弁文様と１条線。 内／見込に１条線と文字。	内外／青白 染外／藍、濃藍 染内／鈍い藍	伊万里系
33-3 21-3	Ａ区表採	染付磁器 碗		3.9		ケズリ出し高台。体部内湾しながら立ち上がる。 内／見込に１条線と不明文様。	内外／青白 染外／鈍い藍 染内／藍	伊万里系

33-4 21-4	A区表採	染付磁器 蓋	9.2		3.1	ほぼ完形品。ケズリ出し高台。天井部外面なだらかに湾曲し、内面平坦。口縁部短く垂直に下りる。外／内側と外側に１条線。松・蝶・牡丹。	内外／青白 染／藍、鮮やかなプリント	伊万里系 つまみ径 4.0cm
33-5 21-5	A区表採	染付磁器 碗		3.0		やや低めのケズリ出し高台。体部は底部から大きく外向きに立ち上がる。内／見込に２条線。	外／灰 内／青白 染／藍	伊万里系
33-6 21-6	A区表採	染付磁器 碗				外面青磁釉。体部はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。 内／四方襷文。	外／灰 内／青白 染／鈍い藍	伊万里系
33-7 21-7	A区表採	染付磁器 碗				体部は内湾し、口縁部に向かって直立的に立ち上がる。 外／格子目。内／四方襷文。	内外／青白 染外／濃藍 染内／薄藍	18～ 19世紀 伊万里系
33-8 21-8	A区表採	磁器 碗				青磁。体部は内湾しながら立ち上がる。	灰オリーブ	伊万里系
33-9 21-9	A区表採	施釉陶器 碗				口縁部直立的に立ち上がる。 外／四方襷文。	内外／淡青緑 染／鈍い藍	木原唐津
33-10 21-10	A区表採	施釉陶器 碗		5.5		ケズリ出し高台。体部は内湾しながら立ち上がる。外／櫛刷毛目	内外／黒灰	肥前系
33-11 21-11	A区表採	染付磁器 碗		6.8		ケズリ出し高台。底部から体部の移行は大きな変化がない。 外／文様不明。内／見込に１条線。	内外／青白 染／藍	肥前系
33-12 21-12	B区表土	施釉陶器 碗		6.8		ケズリ出し高台。体部は緩く内湾しながら立ち上がる。外／高台と底部に１条線。内／文様不明。	内外／淡黄橙 染／濃藍	
33-13 21-13	A区表採	施釉陶器 碗	11.0			体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。外／四方襷文と花弁文。	内外／青灰 染／にぶい藍	木原唐津
33-14 21-14	B区表土	施釉陶器 碗	10.4	3.8	4.9	高めのケズリ出し高台。	暗オリーブ	石見焼系
33-15 21-15	A区表採	染付磁器 碗				体部は内湾しながら立ち上がる。 外／松竹梅文。	内外／青白 染／淡藍、藍	肥前系
33-16 21-16	A区表採	染付磁器 碗		3.7		ケズリ出し高台。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。 外／高台に１条線、文様不明。 内／見込に１条線、花弁文。	内外／青白 染／淡藍、濃藍	肥前系
33-17 21-17	A区表採	施釉陶器 碗		4.1		小型碗。ケズリ出し高台。	灰	石見焼
33-18 21-18	A区表採	施釉陶器 碗		6.3		ケズリ出し高台。体部はなめらかに内湾しながら立ち上がる。	にぶい黄橙	石見焼
33-19 21-19	B区表土	施釉陶器 碗		6.4		高めのケズリ出し高台。体部は湾曲しながら立ち上がる。窯道具痕。	灰オリーブ	石見焼
34-20 21-20	A区表採	施釉陶器 皿	32.0			大型皿片。口縁部短く逆「く」の字状に屈曲し端部を丸くおさめる。複合部にぶく水平。	外／茶褐 内／黄褐	肥前系
34-21 21-21	A区表採	磁器 皿		2.6		白磁。薄手の作り。体部は内湾しながら立ち上がり、端部を少し膨らませる。砂目積みの痕。	青白	伊万里系
34-22 21-22	A区表採	磁器 皿	9.6			18世紀後半。外面青磁釉。小型皿。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。内／見込に２条線と五弁花文。口縁部に四方襷。	外／淡青 内／明オリーブ 染／鈍い藍	伊万里系
34-23 21-23	A区表土	染付磁器 皿		6.9		ケズリ出し高台。体部やや平たくゆるやかに立ち上がる。外／高台に２条底部に１条線。内／見込に１条線と文様不明。	内外／青白 染／藍、淡藍	18世紀 伊万里系
34-24 21-24	A区表土	染付磁器 皿		5.6		ケズリ出し高台。外／高台に１条線。内／見込に２条線と草花文。	内外／青白 染／濃藍、淡藍	17世紀 伊万里系

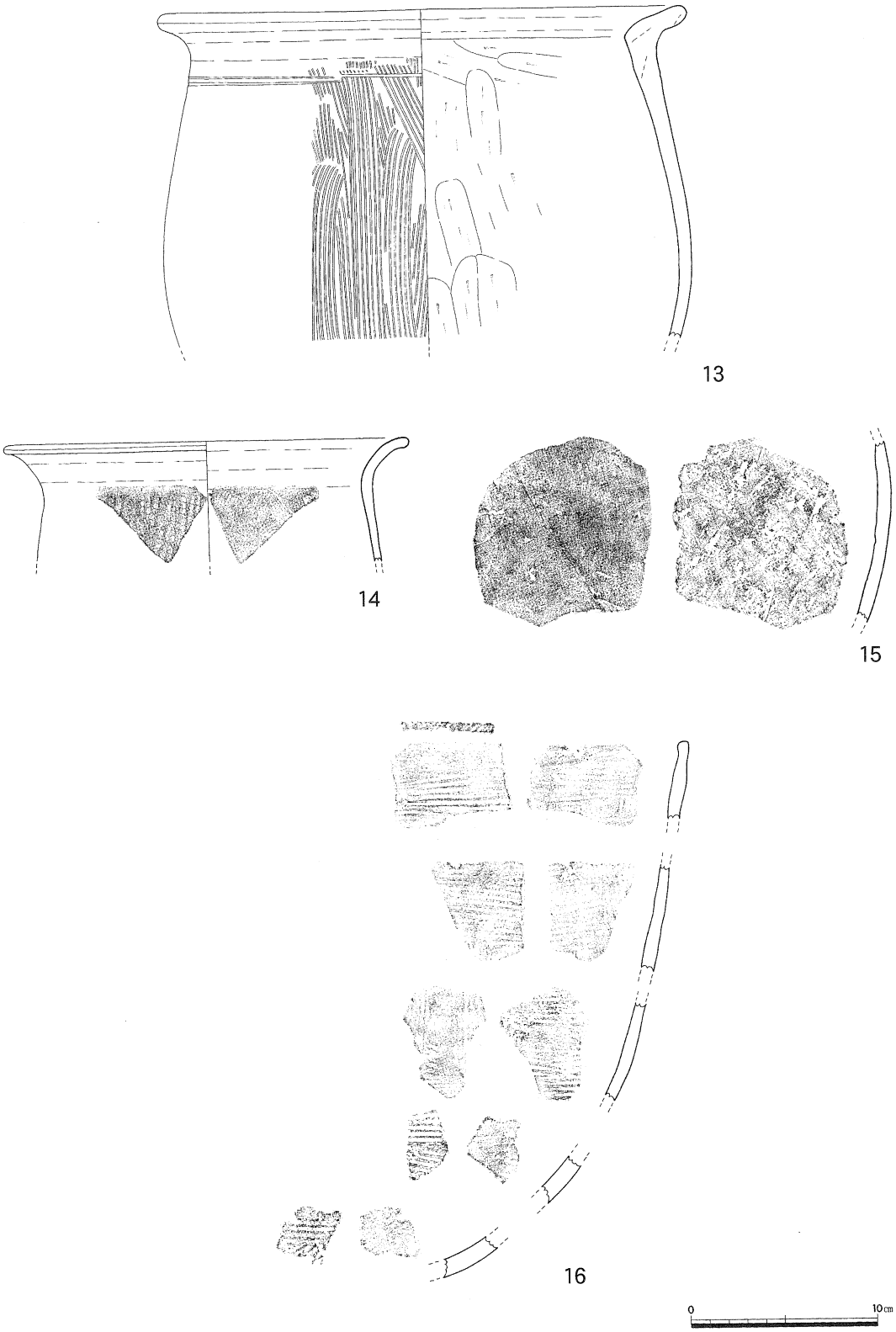
34-25 21-25	A区表土	施釉陶器 皿				体部は大きく外傾しながら立ち上がる。 内／ヘラによる象嵌。	外／黒褐、 淡茶褐 内／灰黄	肥前系
34-26 21-26	A区表採	施釉陶器 鉢				片口鉢片。体部はやや内湾気味に立ち上がる。端部に平坦面をもち、直下に片口を貼り付ける。外／刷毛目。	濃茶	
34-27 21-27	A区表採	施釉陶器 鉢				体部は外反しながら立ち上がる。 口縁端部をつまみ出し。内／刷毛目	外／灰オリーブ 内／オリーブ黄	
34-28 21-28	A区表採	施釉陶器 鉢				薄手の作り。体部は大きく外反しながら立ち上がる。口縁端部は玉縁。	明緑灰	石見焼
34-29 21-29	A区表採	施釉陶器 鉢	22.0			片口鉢片。体部はゆるく内湾しながら底部へ移行する。貼り付け片口。 口縁端部は玉縁。	明緑灰	石見焼
34-30 21-30	A区表土	施釉陶器		8.0		高めのケズリ出し高台。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	外／明緑灰 内／にぶい褐	石見焼系
34-31 21-31	A区表採	施釉陶器 鉢	19.2			口縁端部を外に折り曲げ突帯状に肥厚させる。器壁を折り曲げ端部を付ける。内外面回転ナデ。	薄茶	石見焼系
34-32 22-32	A区表採	施釉陶器 鉢		8.6		ケズリ出し高台。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。工具による強いナデのため段をもつ。内外面回転ナデ。	外／明緑灰 内／明黄緑灰	石見焼系
34-33 22-33	A区表採	施釉陶器 甕		7.0		厚手の作り。直線的に外傾しながら立ち上がる。外面回転ナデ。	外／黒褐、一 部赤褐、褐 内／暗茶褐	
35-34 22-34	A区表採	磁器　皿	4.7	1.5	1.2	完形品。極低い高台。口縁端部に平坦面をもつ。 外面：陽刻、型押成形による貝文様。	白	
35-35 22-35	A区表土	磁器　皿				口縁端部に平坦面をもつ。 外：龍段文。	外／にぶい橙 内／白	
35-36 22-36	C区表採	磁器　瓶				体部は偏球状。外面回転ヘラナデ。 １条の線文様、模様不明。内面上部回転ヘラナデ。	外／明緑灰 内／にぶい黄橙 染／明赤褐	
35-37 22-37	A区表採	瓦質土器				外面回転ヘラナデ後ミガキ。 内面回転ヘラナデ。	外／オリーブ黒 内／灰	

第15表　調査区内出土石器・鉄製品

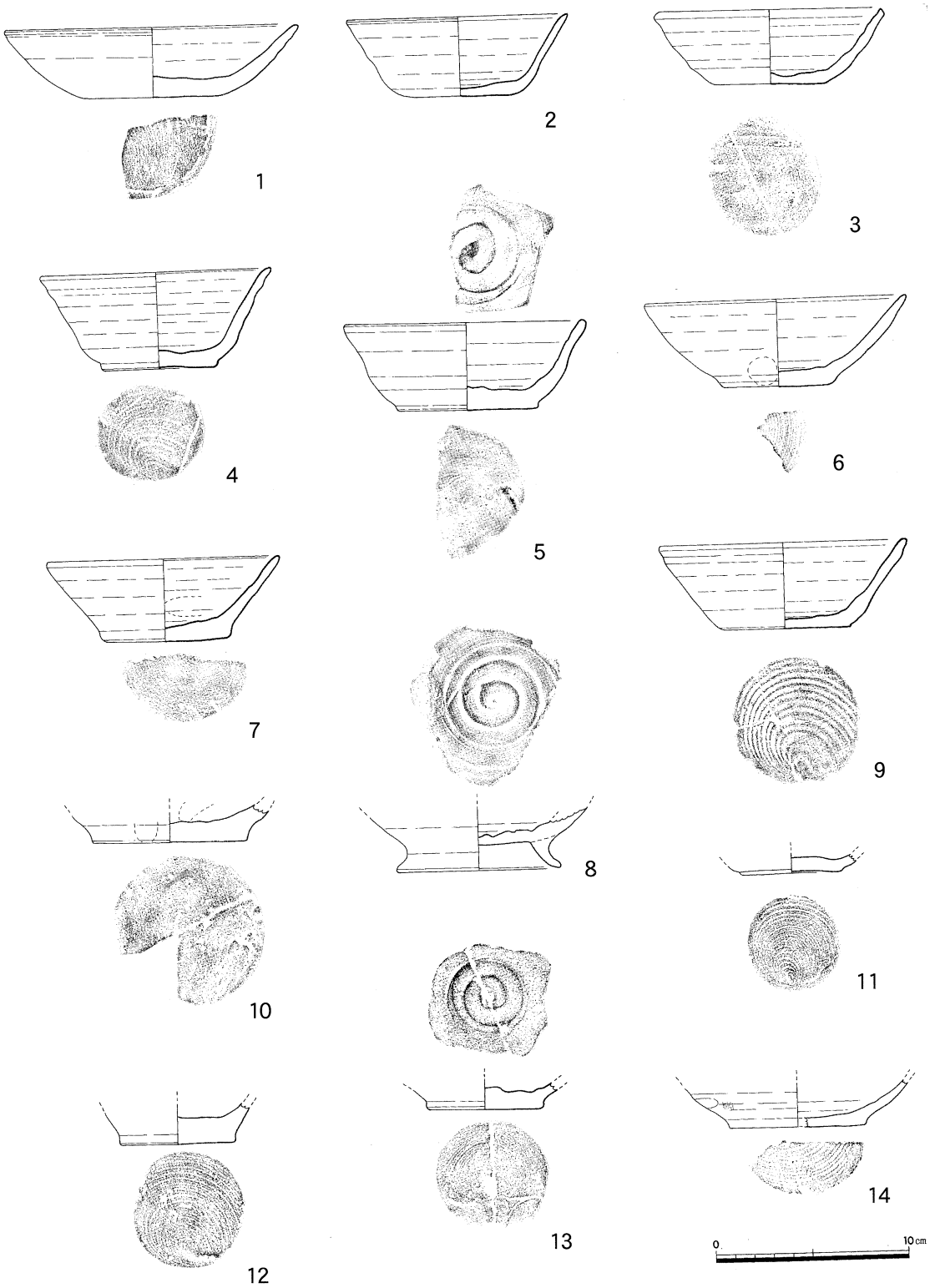
挿図 図版 番号	出土場所	器　種	法　量（cm）			形　態・手法の特徴	備　考
			器長	器幅	器厚		
36-39 22-39	A区 砂層上面	石　鏃	3.0	2.8	0.4	基部に抉入のある凹基無茎鏃。先端が尖る長い脚部をもつ。	
35-40 22-40	A区表採	磨　石	6.5	5.1	2.3	花崗岩。ほぼ円形の川原石を利用。表面は摩滅して平ら。片面に破面がある。	風化気味
35-41 22-41	A区表採	磨　石	9.2	8.0	4.9	花崗岩。楕円形の川原石を利用。表面は摩滅して平ら。	風化気味
36-49 22-49	B区表土	鑿	15.2	2.3	1.4	鉄製袋式鑿。	



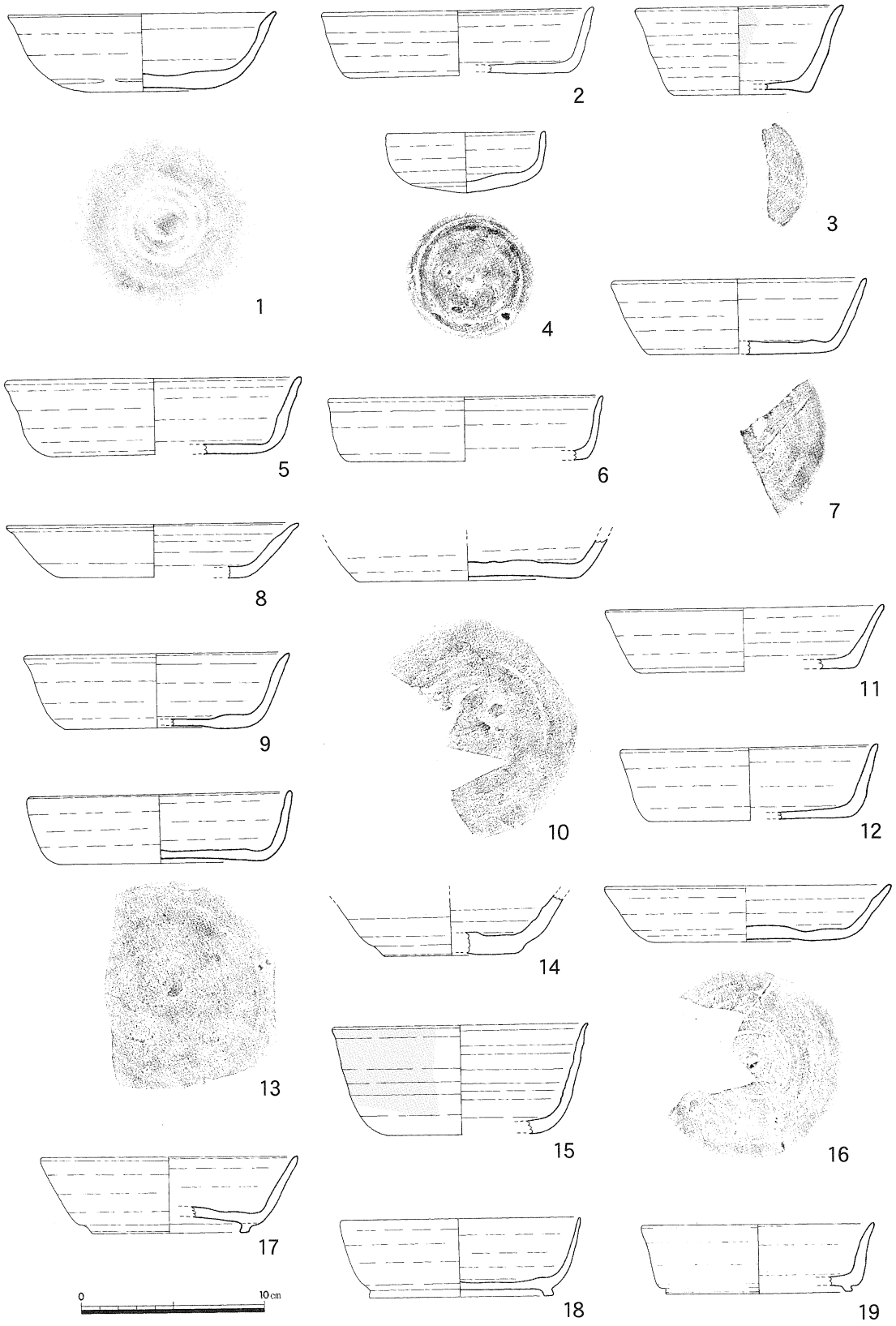
第26図　出土土器実測図(1)（弥生・土師器）



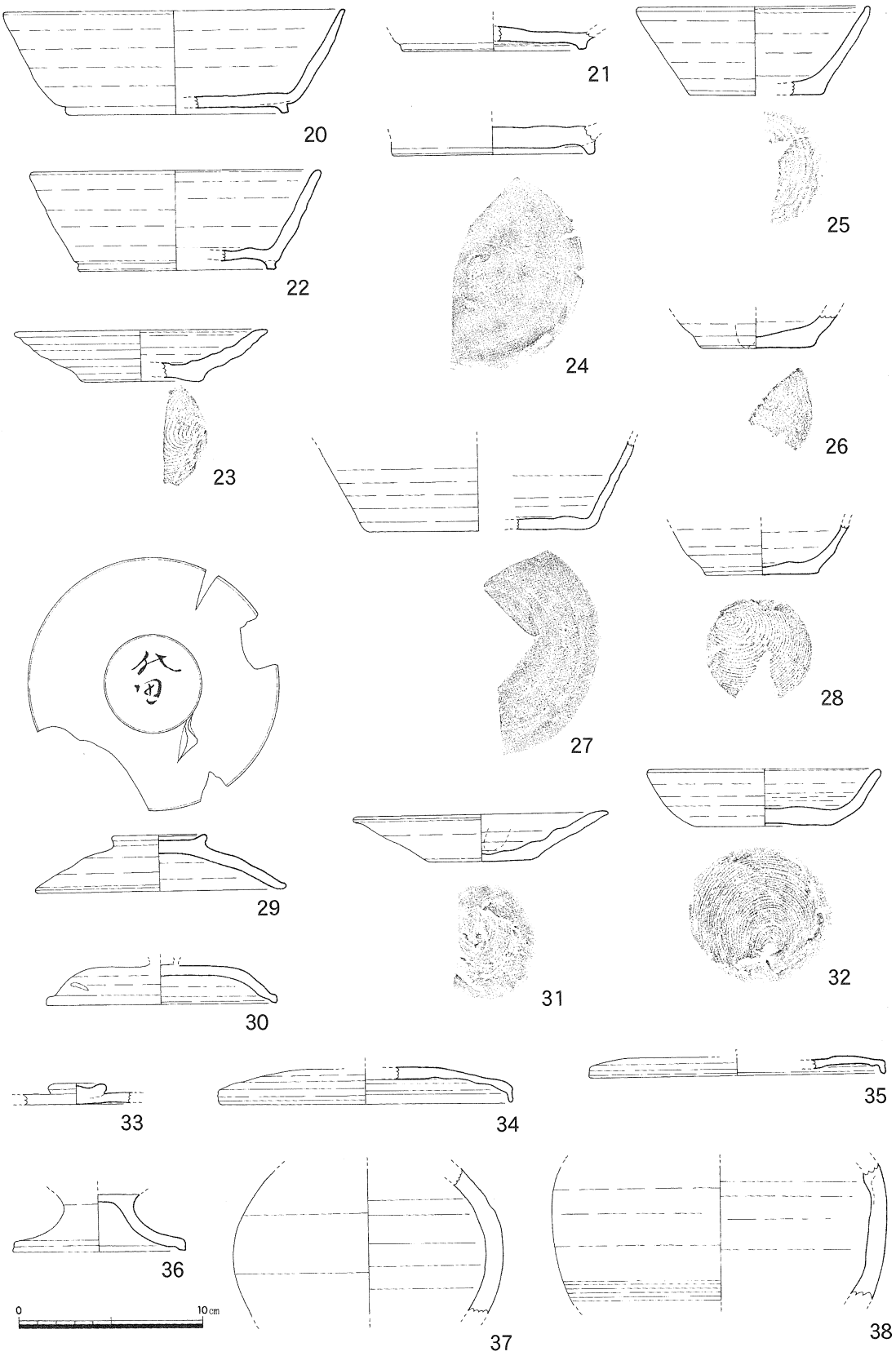
第27図　出土土器実測図(2)（縄文・弥生・土師器）



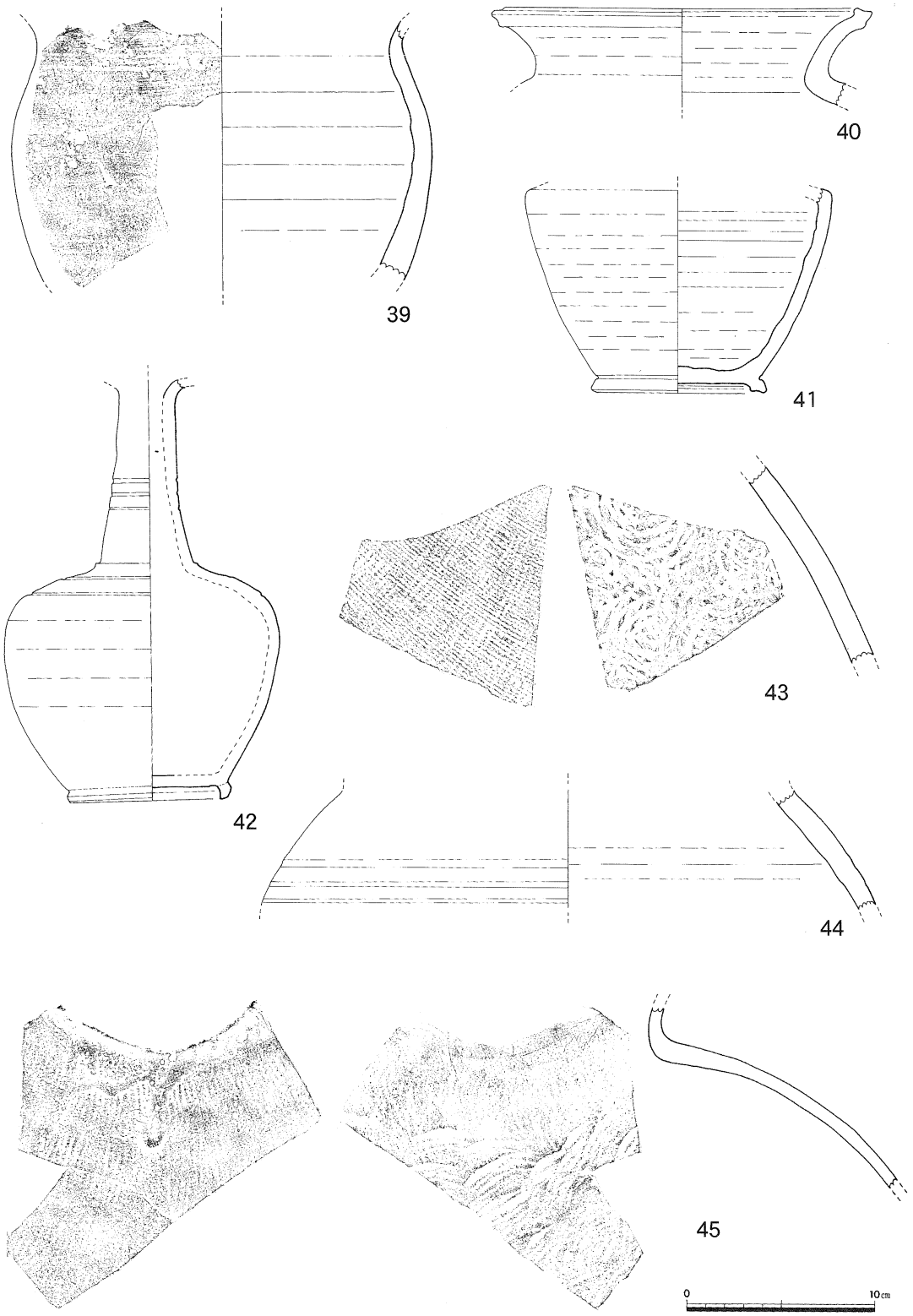
第28図　出土土師質土器実測図



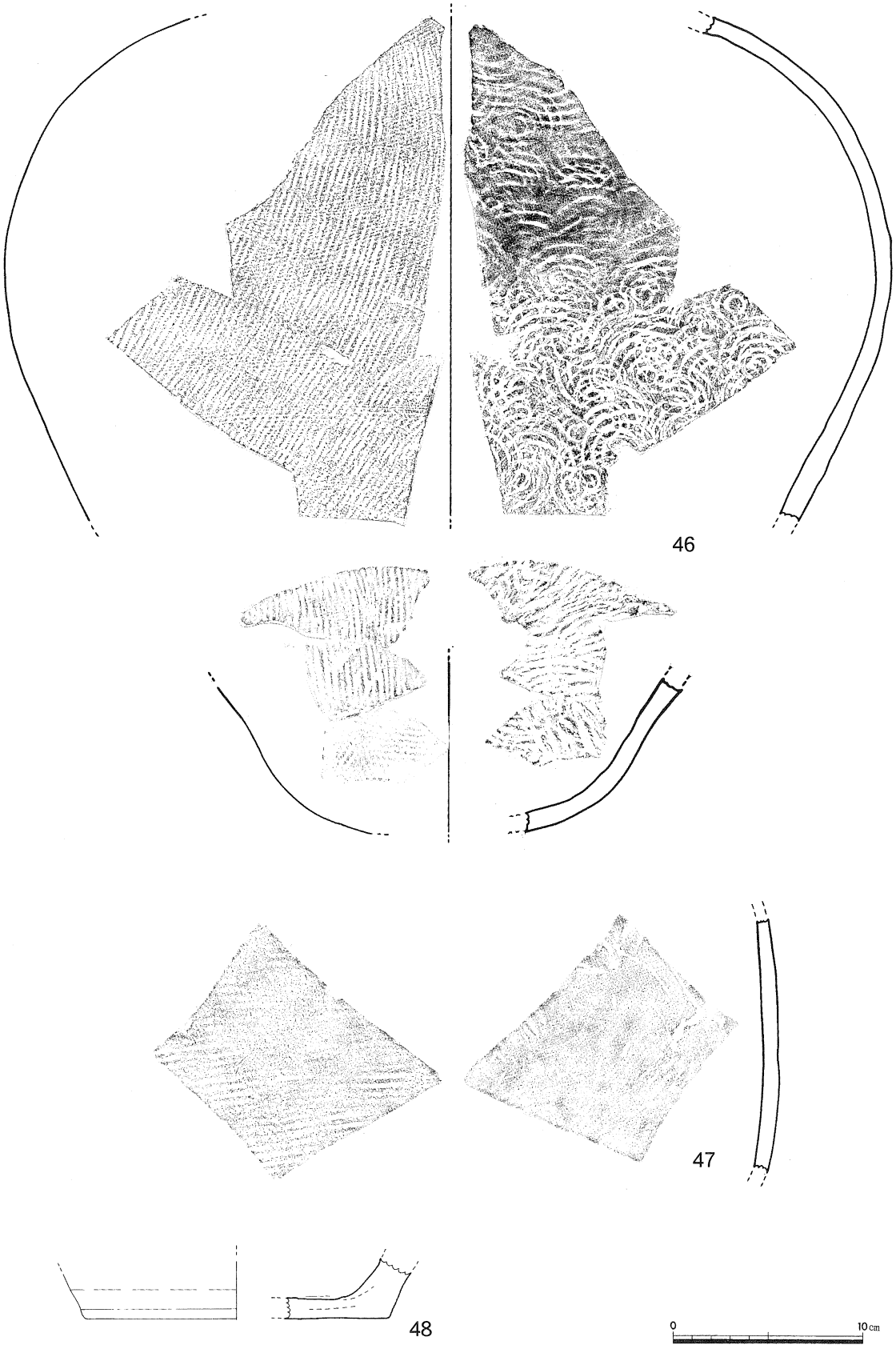
第29図　出土須恵器実測図(1)



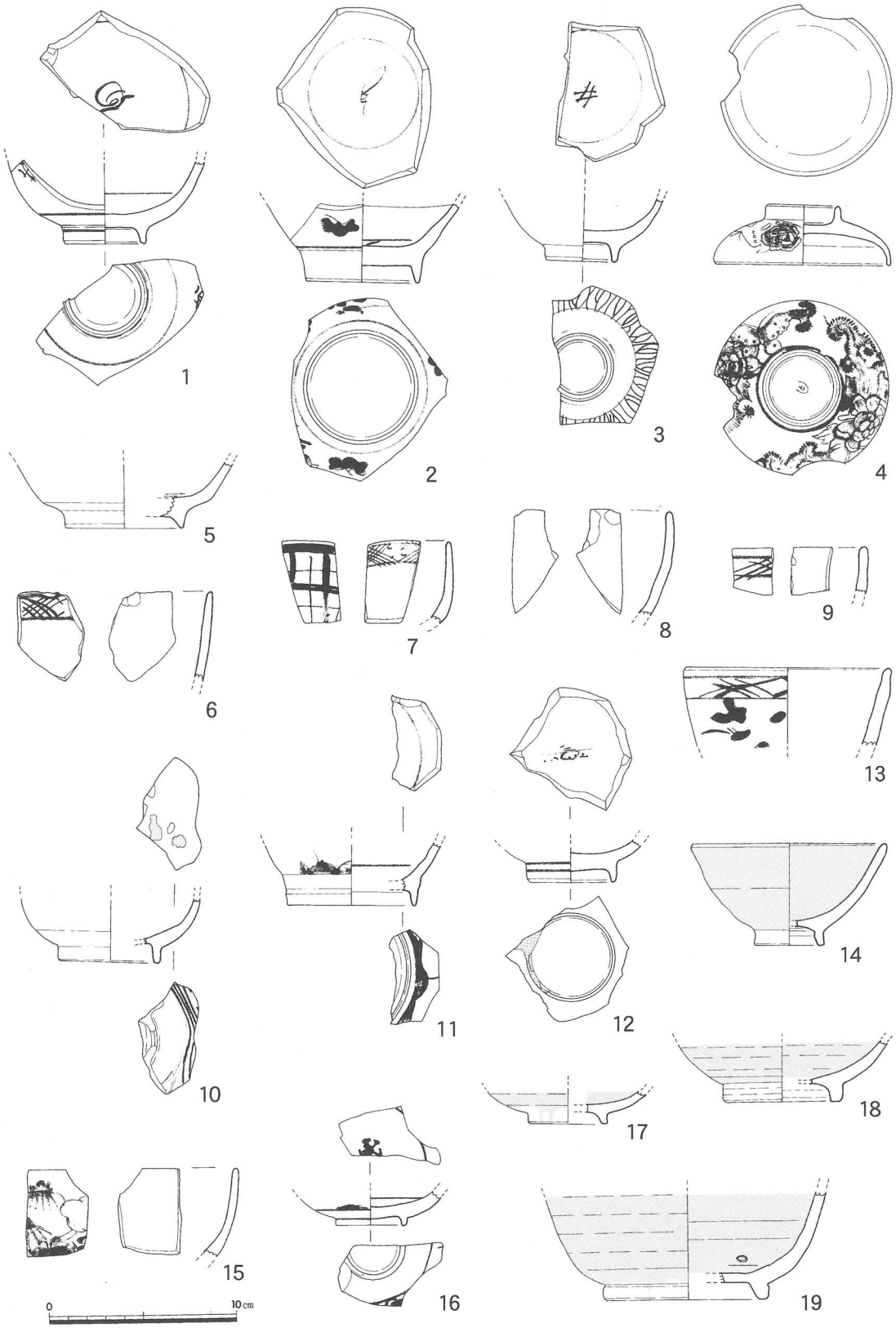
第30図　出土須恵器実測図(2)



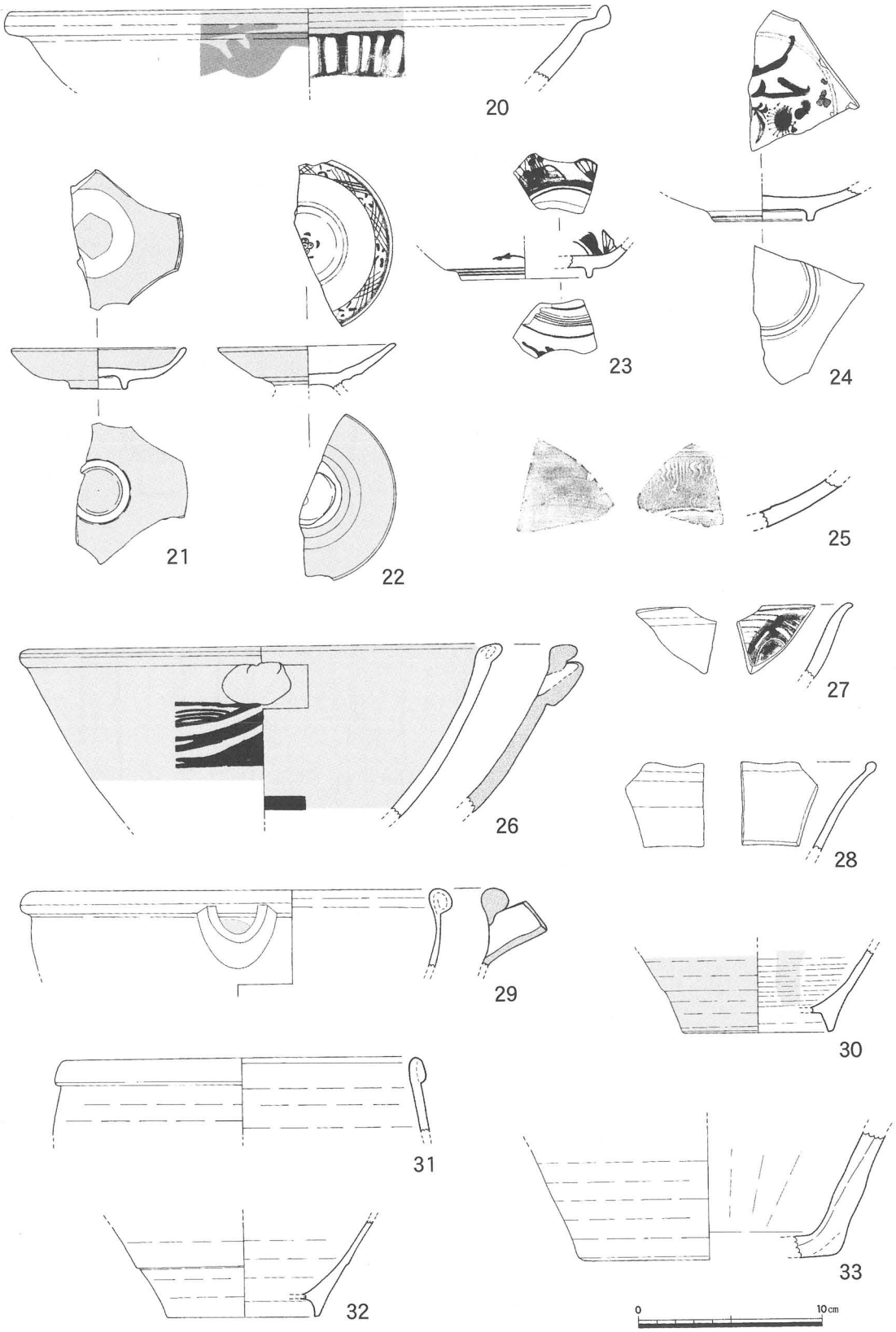
第31図　出土須恵器実測図(3)



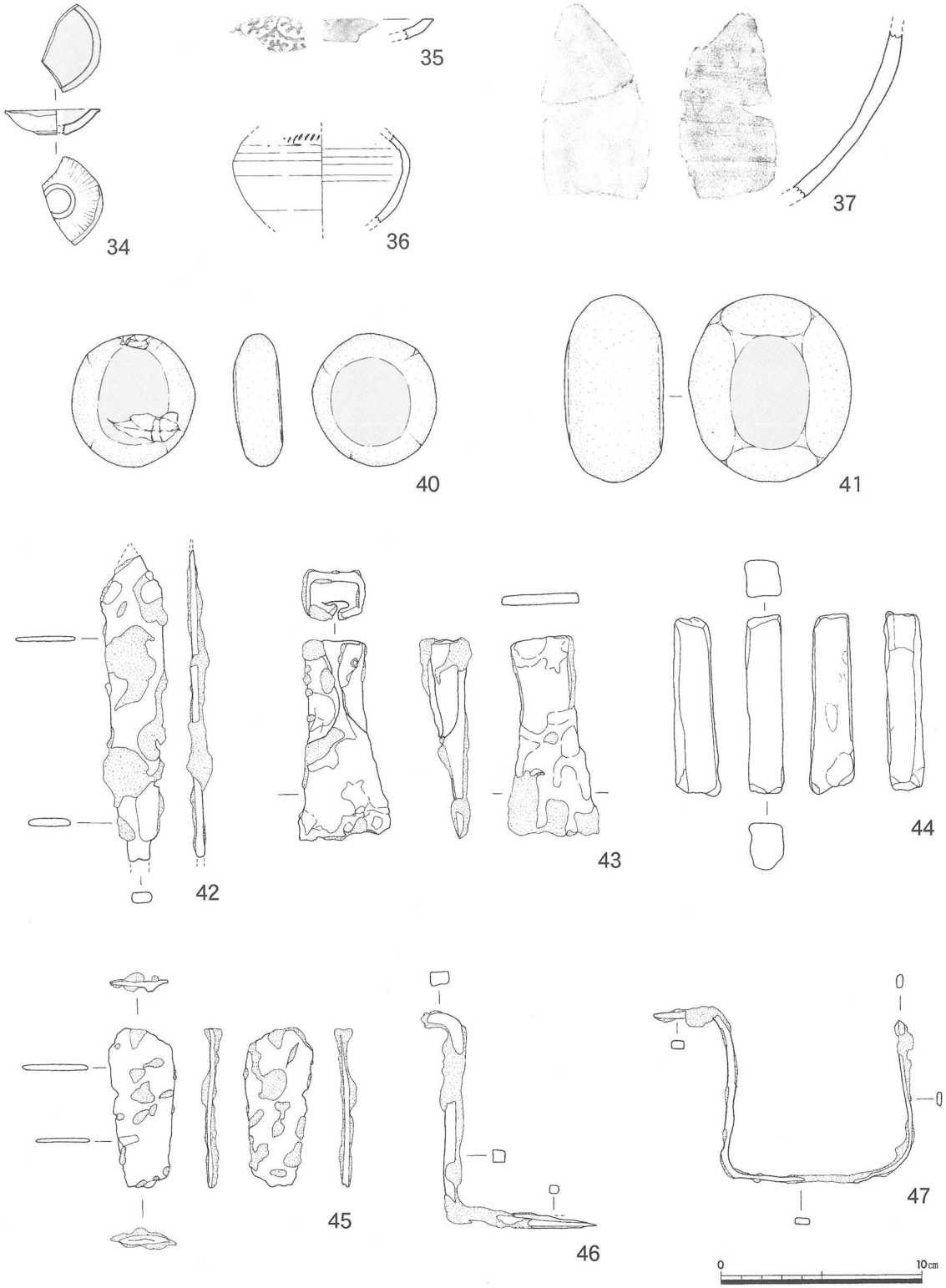
第32図　出土須恵器実測図(4)



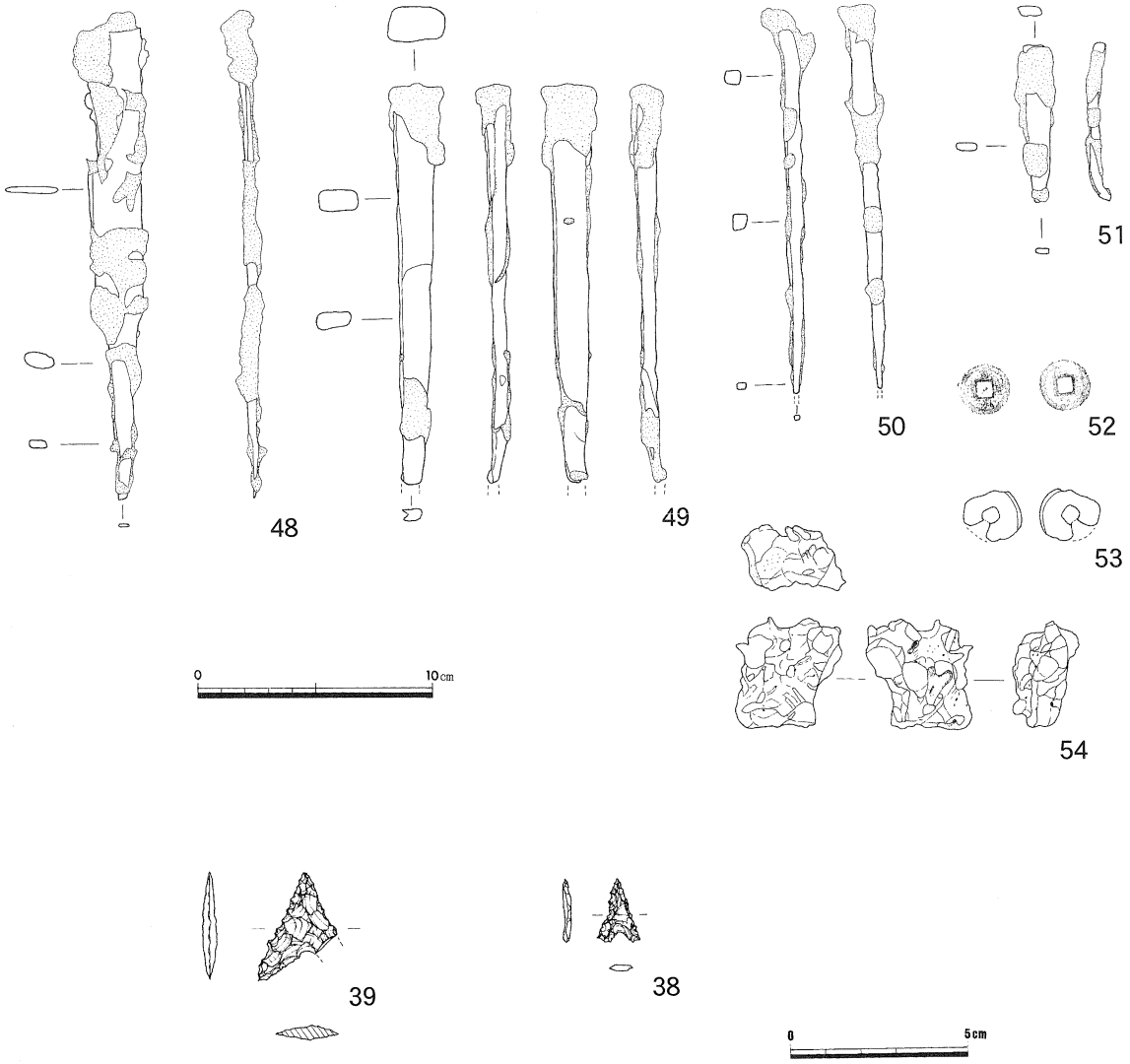
第33図　出土遺物実測図(1)（陶磁器）



第34図　出土遺物実測図(2)（陶磁器）



第35図　出土遺物実測図(3)（陶磁器・石器・鉄製品）



第36図　出土遺物実測図(4)（鉄製品・石器・銅銭・鉄滓）

第4章　ま　と　め

大地ノ元遺跡は、県道及び「261号」の改良工事に伴い町教委が実施した遺跡の分布・試掘調査により確認された遺跡である。本遺跡は中山古墳群が所在する中山丘陵の対岸に立地することから、調査以前に古墳（墳墓）に関わる住居跡が検出できる地域と判断していた。

本調査を行った結果、予想以上の遺構及び遺物の成果があり、確認できた主な遺構は、竪穴住居址４棟、礎石建物跡１棟、溝状遺構１条、土壙墓２基、土坑３基である。

１．住居址及び出土遺物について

(1) 竪穴住居及び礎石建物について

今回確認できた４棟の竪穴住居址のうち、遺物が検出された２棟の存在年代は、供伴遺物を鑑定した結果、８世紀から10世紀に想定することができる。それぞれの概要は以下の通りである。

方形の竪穴住居址と想定されたＳＢ01及びＳＢ02は、出土遺物である須恵器が小片のため、この遺物からの時期判定は不可能である。しかし、対岸の清源那遺跡Ｂ地区で確認された円形住居址を埋め立てることによって作り替えられた方形住居址の形態及び立地と比較的酷似していることから、８世紀後半から９世紀に存在していたと推定される。斜面を削平して作られた両住居址より下部に立地するＳＢ04の覆土より須恵器長頸壺（第31図42）が出土しており、口頸部が細長く、頸接合部から肩部にかけてほぼ平坦になっており中村陶邑編年Ⅳ－４の様式をもち合わせている。時期は９世紀に比定され、前述のＳＢ01及びＳＢ02の推定時期と合致している。

竪穴住居址ＳＢ04は、作り付けカマドをもち、床面直上から土師質土器片が出土している。

礎石建物については、前述の長方形建物部分が身舎（母屋）、その他の礎石が進入路開設による礎石流失部分を復原することで、身舎に付随する庇と分析した。つまり、復原された建物は、桁行３間、梁間２間の身舎の南正面に１面庇（切妻造に正面庇を葺き下ろした形式）である。また、身舎が９尺間であること、庇の梁間（９尺）が身舎の梁間（13.5尺／２）よりも大きいことから、ＳＢ03は平安建築の特色をもっているとされる。[1]

(2) 墨書土器について

墨書土器は、古代の役所跡や寺院跡などから出土している事例が数多く報告されているが、この墨書自体の意味については、使用している人の名前や所在を意味するもの、また、焼いた窯の名前など諸説がある。

今回の発掘で、須恵質の器に「代田」と判読できる墨書が確認された。読みとしては「しろた」、「よた」、「だいた」または「だいのた」と推測できる。この読みの手がかりを探すために地籍の書類に目を通していたところ、「大（代）田」という字名が井原地区の日向にあり、この「大（代）田」を「だいのた」と呼ぶことから「代田」は「だいのた」と読む可能性が考えられる。しかし、日向は本遺跡が所在する皆井田より３km以上離れていることから、この地域との関連性が低いのではないだろうか。また、島根県簸川郡玉湯町の蛇喰（じゃばみ）遺跡から出土している須恵器に「白田原」のヘラ書きがあり、これを「しろたはら」と読むことから、「代」を「白」と読み替えて「しろ

た」とも推測できる。[2]

この墨書が意味するところは、地名、屋号、役所名等さまざま推測できるが、近隣にこのような地名及び屋号は無く、聞き込み調査等を行った結果からも詳細不明である。しかし、松江市の出雲国庁跡より出土している須恵器に「苗代」という時期が限定できる文字が確認されており、推測の域を脱しないが、水を張って田植えの準備を整えた田を「代田（しろた）」と称することも考慮して、この墨書は季節と何らかの関連性があるのではないだろうか。また、大化前代には上代の田地の面積を「代」をもって数えられていたことから、「代田」の墨書が施されたとも推測できる。[3][4]

墨書土器が出土している県内の遺跡を報告書等から確認した結果（第16表）、「代田」に類似する文字が出土している遺跡は確認できなかった。

２．土壙墓について

本遺跡からは長方形墓ＳＫ01と円形墓ＳＫ02の２種類が確認されている。

ＳＫ01は遺構底部より出土している須恵器完形品から17世紀前葉の土壙墓と考えられる。

ＳＫ02からは遺物等が確認されていないため時期の判断はできないが粘質土を桶棺の周りに充填しており、清源那遺跡Ｂ地区の土壙墓群の中に同様な遺構が確認されていることから近世墓と推測できる。

３．その他遺構について

ＳＫ03～05は、トレンチの観察から木棺などの埋葬方法が確認できるものは検出されず、土が充填されていない状態で機能していたと考えられる。これら土坑は、その特異な堀込みをもつ形態からも土壙墓とは推測しがたい。

ＳＸ01及びＳＤ01は、ともに地山を深く削り込んで作られており、これら遺構の存在時は重要な役割を果たしていたことを伺うことができる。

縄文土器の小片が広範囲から出土している遺物包含層１は、土器の散布状況及び旧地形の観察から、この土器と同時期の遺構が遺物散布の東側延長線上に存在していたことが推測できる。

土師質土器の皿及び鉄製の槍先、寛永通宝が出土している遺物包含層２は、河原石の散布範囲よりも遺物の散布範囲が狭い範囲に限られていたことから、遺物包含層ではなく古墓が存在していたことが推測できる。

４．周辺遺跡（中山古墳群、清源那遺跡）との関わりについて

今回の調査で出土した遺物から鑑みて、本遺跡は弥生中期から古墳後期前半に位置する中山古墳群との強い関連性を導き出すことはできなかった。しかし、本遺跡が所在する地域は丁度鉄穴流しによる一次改変地[5]のため、弥生の遺物がほとんど出土していないことだけで、中山丘陵一帯との関連性を否定することはできないのではないだろうか。

ほぼ同レベルの標高で所在する清源那遺跡は、出土する遺物及び遺構の性格が似通っており、同時期に存在していた可能性がある。また、清源那遺跡Ａ区の竪穴住居址から出土した遺物の形態から中山古墳群との強い関連性がみられる。

５．おわりに

今回の調査地は遺跡台帳に記載されていない範囲であったが、調査前の想定以上に遺構及び遺物が確認された。また、清源那遺跡との強い関わりも推定できるだけの成果があり、この地域の当時

の様子がある程度復原できるのではないだろうか。しかし、中山古墳群との関わりが明確にできなかったこともあり、今後の課題として解決していかなければならないことである。

【参考文献】

(1) 広島大学工学部三浦正幸氏のご教示による
(2) 大田市教育委員会文化振興室の遠藤浩巳氏・中田健一氏のご教示による
(3) 島根県教育庁文化財課の西尾克己氏のご教示による
(4)『条里制』落合重信　吉川弘文館　1967年
(5)『中国地方における鉄穴流しによる地形環境変貌』貞方　昇　溪水社　1996年

第16表　墨書土器が出土している遺跡一覧

出土遺跡名	釈　　文	種類	器　形	書部位	出土遺構	年　代	文献
邑智郡石見町 大地ノ元遺跡	墨書「代田」	須恵器	蓋	つまみ内側	竪穴住居址		
安来市沢町 沢遺跡	墨書「寺」	須恵器	坏	－	包含層	－	(1)
安来市吉佐町 石田遺跡	墨書「上」 墨書「古？」 墨書不明	須恵器	坏 高台付坏 坏	底部外面	河川氾濫原 （包含層）	8世紀中 ～後半	(2) (3)
安来市島田町 島田南遺跡	墨書「宮」	須恵器	高台付皿	底部外面	包含層	奈良～平安	(4)
安来市佐久保町 岩屋口南遺跡	墨書不明	須恵器	皿	底部外面	包含層	中世	(5)
松江市竹矢町 中竹矢遺跡	墨書「東□」「井？」	須恵器	坏	底部外面	包含層	奈良～平安	(6)
松江市竹矢町 才ノ峠遺跡	墨書「井」 墨書不明	土師器 須恵器	坏 坏	－	－	－	(7) (8) (9)
松江市竹矢町 出雲国庁跡	墨書「勝」「私」 墨書「南」 墨書「少目」「厨」「酒坏」 墨書「寧」「大」「玉女」等	土師器 須恵器 須恵器 須恵器	坏 蓋 高台付坏 坏	－ － 底部外面 －	－	7世紀後半 ～9世紀初頭	(9) (10) (11) (12) (13)
松江市竹矢町 出雲国分寺跡	墨書「西寺」 墨書不明	須恵器	坏	底部外面 －	－	奈良	(9) (10)
松江市竹矢町 出雲国分尼寺跡	墨書「東室」 墨書「子刀自」「□房」 墨書「泰館」「堂東」等	須恵器	高台付坏 坏 坏	底部外面 底部外面 －	－	奈良	(9) (10)
松江市大庭町 黒田畦遺跡	墨書「云石」	須恵器	高台付皿	底部外面	土壙	8世紀中 ～後半	(14)
松江市西川津町 タテチョウ遺跡	墨書「□平」 墨書「驛」	須恵器	坏	底部内面 －	包含層 －	平安	(9) (15)
松江市福原町 芝原遺跡	墨書「校尉」「美」 墨書「出雲家」	須恵質	坏－	底部外面 －	－	8世紀後半 ～9世紀前半	(16)
松江市東生馬町 平ノ前廃寺	墨書「大」	須恵器	坏	－	－	－	(9)
松江市大野町 丁の坪遺跡	墨書「館」	須恵器	坏	－	－	奈良～平安	(9)
平田市国富町 中村遺跡	墨書「中」 墨書「草」「少」「人？」 墨書不明	須恵器	高台付坏 坏 坏	底部外面 － －	－	－	(9) (17)
簸川郡玉湯町 有ノ木遺跡	墨書「家」	須恵器	坏	底部外面	包含層	－	(18)
簸川郡斐川町 後谷Ｖ遺跡	墨書「□□倉」	須恵器	高台付坏	底部外面	礎石建物跡	8世紀後半 ～9世紀初頭	(19)
出雲市上塩冶町 三田谷Ｉ遺跡	墨書「宅」「日」「土」	－	－	－	小河川跡 （包含層）	平安前期	(20)
出雲市天神町 天神遺跡	墨書「旱天」	丹塗土師器	蓋	天井部外面	包含層	－	(9) (21)
仁多郡仁多町 カネツキ免遺跡	墨書「伴」 墨書「大、上備(備)」 墨書「大、小」 墨書「少」「□氏」	須恵器	蓋 高台付皿 高台付皿 坏	天井部内面 底部外面 底部外面 －	包含層	奈良	(9) (22)

出土遺跡名	釈　　文	種類	器　形	書部位	出土遺構	年　代	文 献
仁多郡仁多町 芝原遺跡	墨書「大尉」or「大厨」	須恵器	皿	－	鍛冶場跡	奈良 ～平安初期	
大田市水上町 白坏遺跡	墨書「上内」「大」 墨書「梨」	須恵器	蓋 坏	天井部外面 底部外面	自然流路	10世紀初頭 前後	(23)
鹿足郡津和野町 高田遺跡	墨書梵字	土師器	椀	底部内外面	柱穴	中世	(24)
鹿足郡六日市町 前立山遺跡	墨書「今居」「今□」 墨書不明	須恵器	蓋	つまみ内側 天井部外面	掘立柱建物 跡周辺	9世紀中葉	(9) (25)
松江市竹矢町 出雲国庁跡	箆書「苗代」	須恵器	坏	－	－	7世紀後半 ～9世紀初頭	(9)
簸川郡玉湯町 蛇喰遺跡	箆書「白田原」「林」等	須恵器	坏	底部外面	包含層	8世紀後半 ～9世紀初頭	(26)

【文献一覧】

(1)『沢遺跡発掘調査概報』　安来市教育委員会　1980年（昭和53年度調査地）

(2)『石田遺跡Ⅲ　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15－』　島根県教育委員会　1998年

(3)「石田遺跡」池淵俊一（『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』）　島根県教育委員会　1997年

(4)『一般国道９号線安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　（島田南遺跡）』　島根県教育委員会　1992年

(5)『岩屋口南遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』　島根県教育委員会　1996年

(6)『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ　（中竹矢遺跡）』　島根県教育委員会　1982年

(7)「才ノ峠遺跡」広江耕史（『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅲ－』）　島根県教育委員会　1981年（図面及び釈文未掲載）

(8)『一般国道９号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ（才の峠遺跡）』　島根県教育委員会　1993年（図面及び釈文未掲載）

(9)「土器に書かれた文字」「島根県関係出土文字資料一覧」本間恵美子（『八雲立つ風土記の丘』No.61.62合併号）　島根県立八雲立つ風土記の丘　1983年

(10)『島根県立八雲立つ風土記の丘　－資料館展示図録－』　島根県立八雲立つ風土記の丘友の会　1986年

(11)『土地改良総合整備事業に伴う史跡出雲国府跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1988年

(12)「文字のかたる世界」本間恵美子（『八雲立つ風土記の丘』No.60）　島根県立八雲立つ風土記の丘　1983年

(13)「東アジアの金石文字」井上秀雄（『八雲立つ風土記の丘』No.106）　島根県立八雲立つ風土記の丘　1991年

(14)『黒田畦遺跡発掘調査報告遺書』　松江市教育委員会　1995年

(15)『タテチョウ遺跡発掘調査概報』　松江市教育委員会　1991年

(16)「松江市の歴史　歴史時代のまつえ」（『松江市遺跡地図』）　松江市教育委員会　1991年

(17)『丁の坪遺跡　片山遺跡』　松江市教育委員会　1981年

(18)『別所地区地すべり関連区画整理事業に伴う 有ノ木遺跡発掘調査報告書』　玉湯町教育委員会　1997年

(19)『後谷Ⅴ遺跡』　斐川町教育委員会　1996年

(20)「三田谷Ⅰ遺跡」今岡一三（『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』）　島根県教育委員会　1997年

(21)「天神遺跡とその周辺」池田満雄（『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』）　島根県教育委員会　1980年

(22)「仁多・カネツキ免遺跡」蓮岡法暲・西尾克己（『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅺ集』）　島根県教育委員会　1985年

(23)『白坏遺跡発掘調査概報』　大田市教育委員会　1989年

(24)『高田遺跡Ⅱ　平成３年度高田遺跡発掘調査概報』　津和野町教育委員会　1992年

(25)「前立山遺跡」内田律雄・卜部吉博他（『中国縦貫自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）　島根県教育委員会　1980年

(26)「蛇喰遺跡」高橋進一・松本岩雄（『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ　玉作関係遺跡』）　島根県教育委員会　1987年

なお、石見町が収蔵する文献から作成したため、県内遺跡の出土例全てを網羅しているわけではない。「釈文」については、本文及び実測図面から確認できるものだけを掲載した。

図　　版

図版　1

a．調査対象地（北西から）

b．調査前（東から）

図－1

a．A区土層断面

b．B区土層断面

c．C区土層断面

図－2

図版　3

a．SB01（南東から）

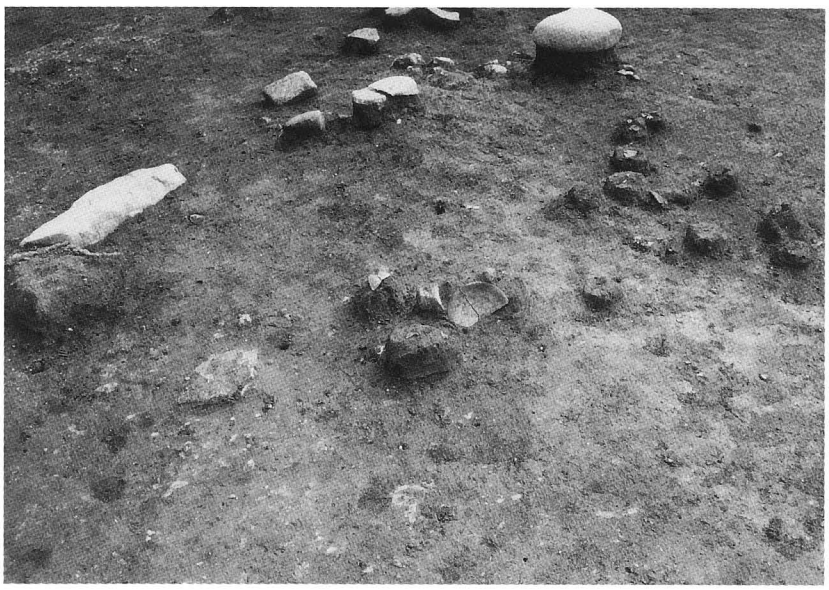
b．SB02（南東から）

c．SB03検出（北から）

図－3

a．SB03焼土（北東から）

b．同焼土中土抗完堀

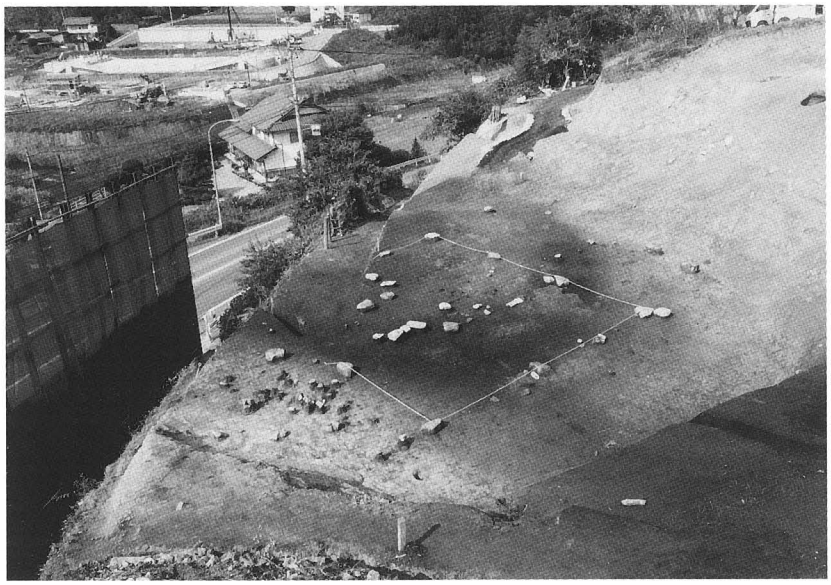


c．同焼土出土状況

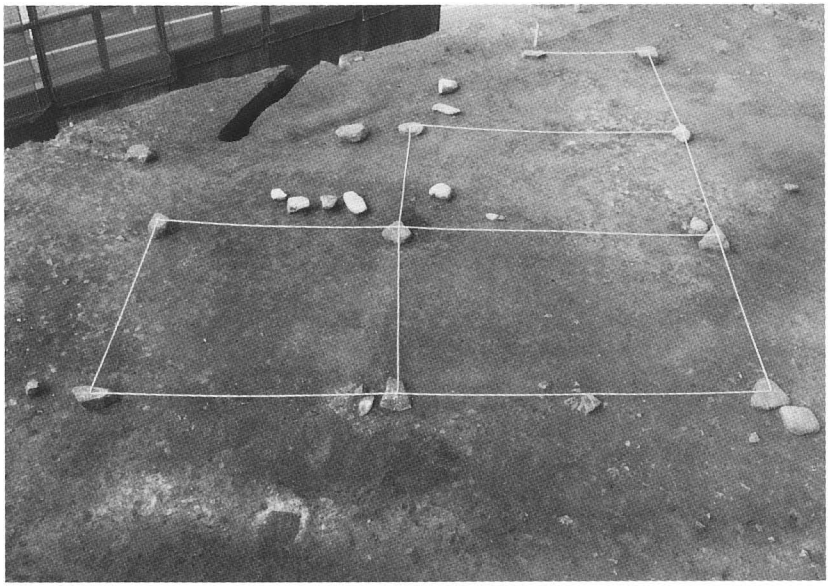
図－4

図版　5

a．SB03溝状遺構土層断面
（南から）



b．同礎石配列状況
（北東から）



c．同礎石配列状況
（東から）

a．（中央）SB04検出
（上）遺物包含層３
（北から）

b．SB04遺物出土状況
（北西から）

c．同炭化物出土状況
（東から）

図－6

図版　7

a．SB04煙道（南東から）

b．同完堀（南から）

c．SB05土層断面
（南東から）

図－7

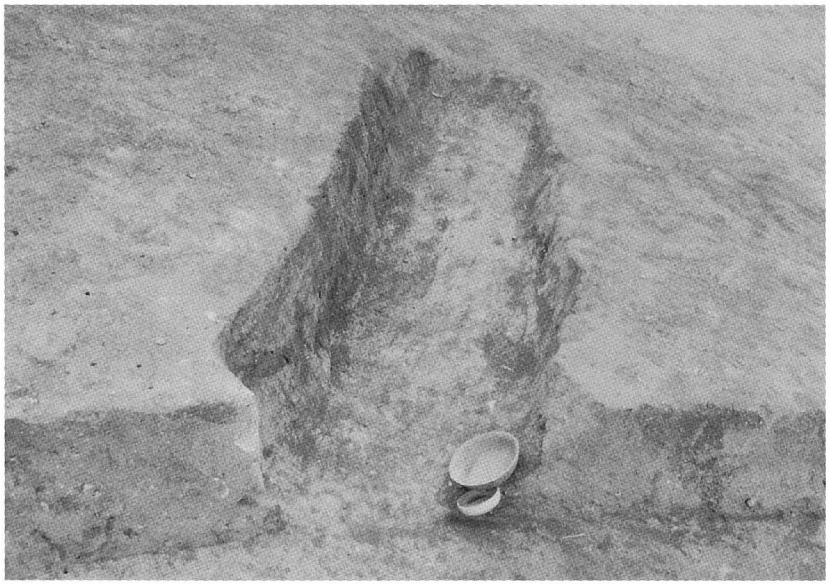
a．SB05墨書土器出土状況

b．同完掘（南から）

c．最東端土層断面
(B－B′)

図－8

図版　9



a．SK01（北西から）

b．SK02検出（南東から）

c．同礎検出（南西から）

a．SK03・04・05
（南東から）

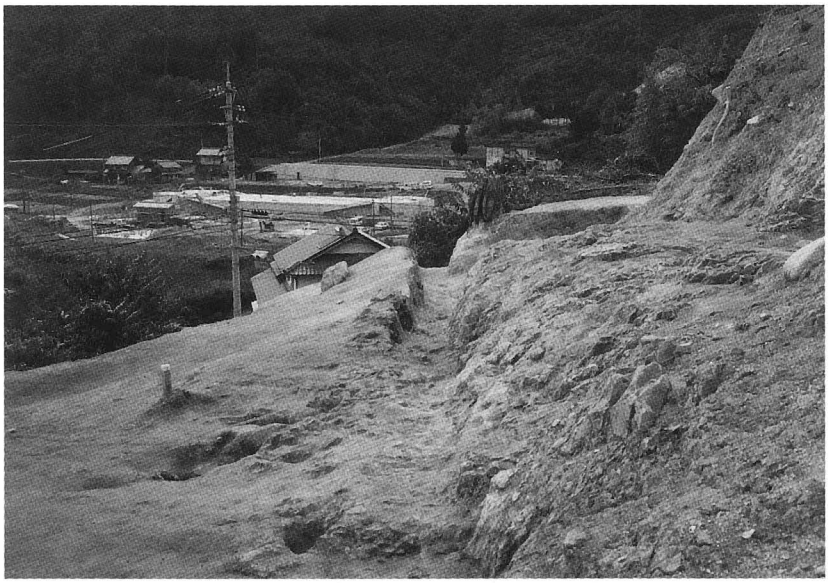
b．SK03（南東から）

c．SK04（北西から）

図－10

図版　11

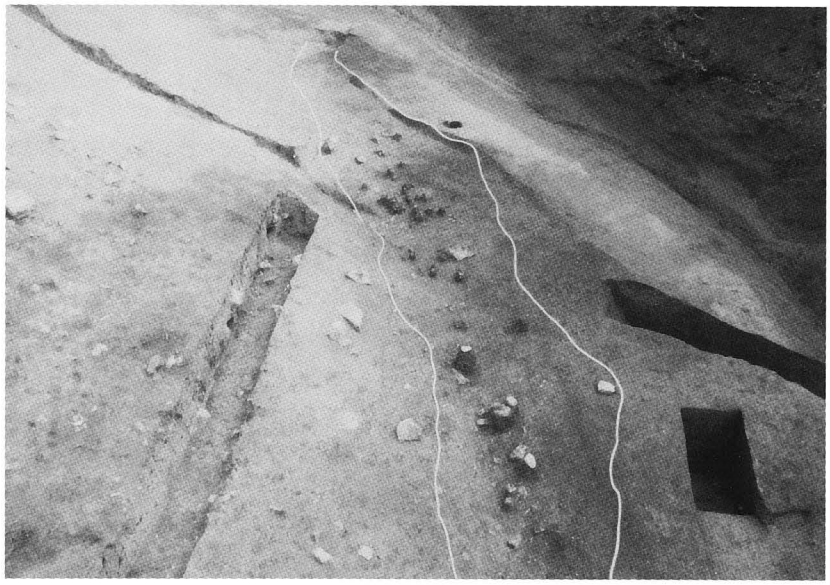
a．SK05（南西から）



b．SD01検出（南東から）

c．SX01（東から）

a．SX02 土器出土状況
（南西から）

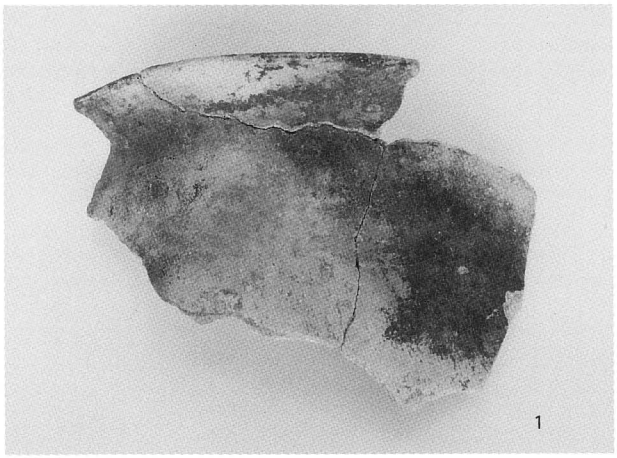


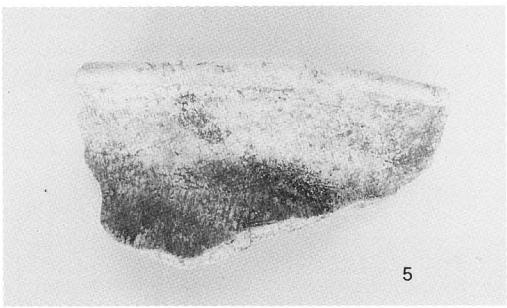
b．遺物包含層 1（西から）

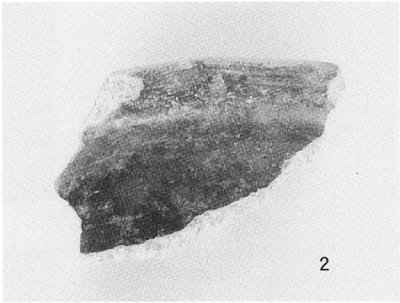
c．遺物包含層 2（西から）

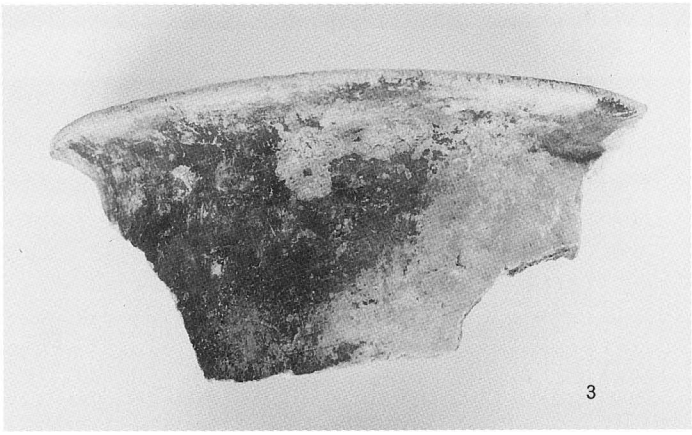
図－12

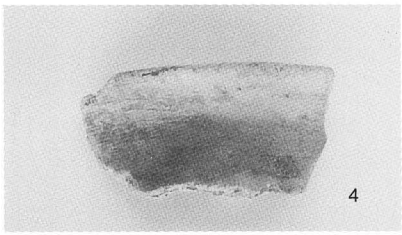
図版　13

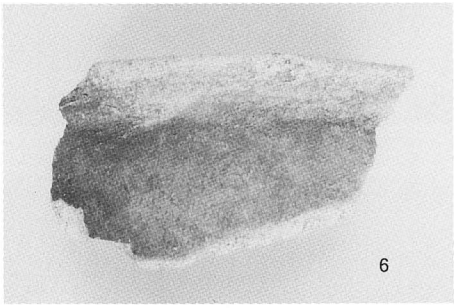


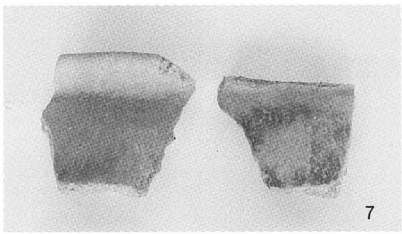






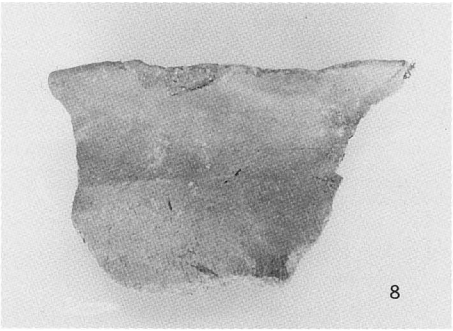


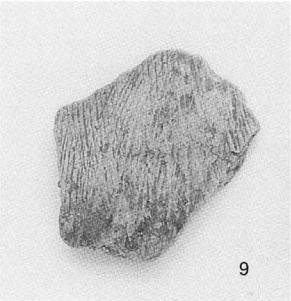


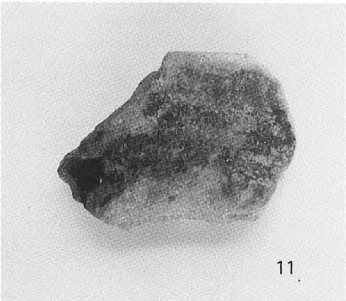


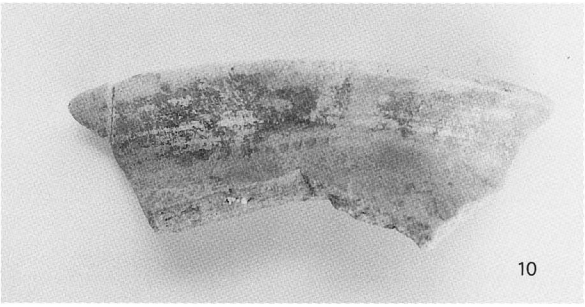
出土土師器

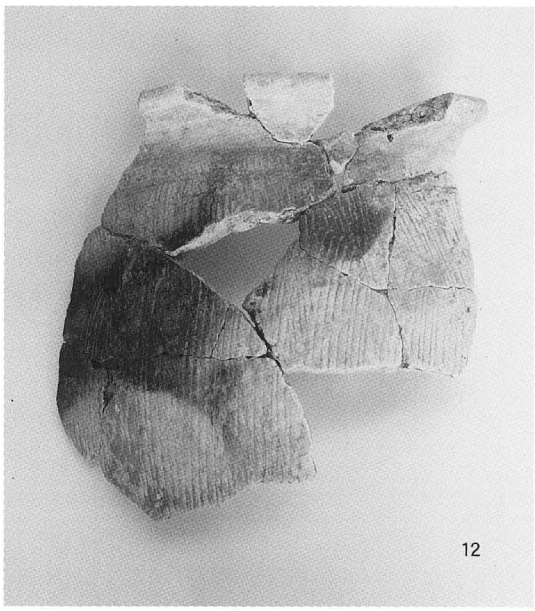
図－13

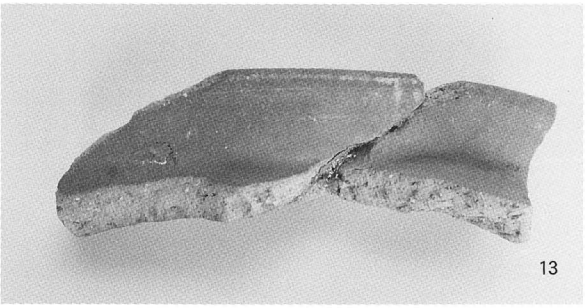


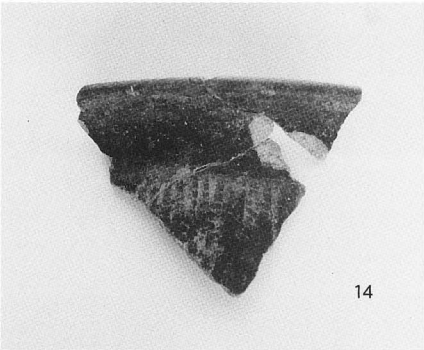




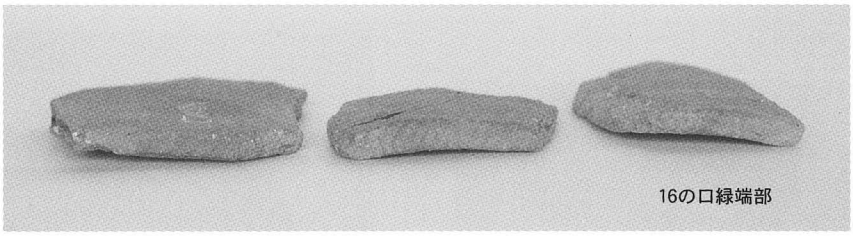




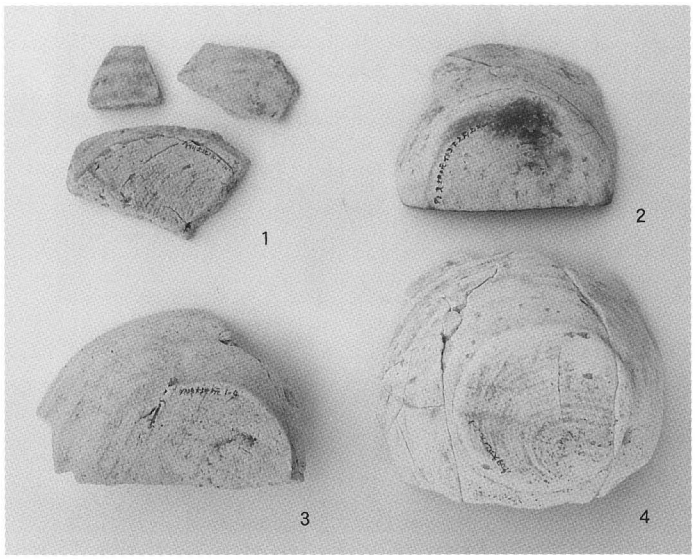


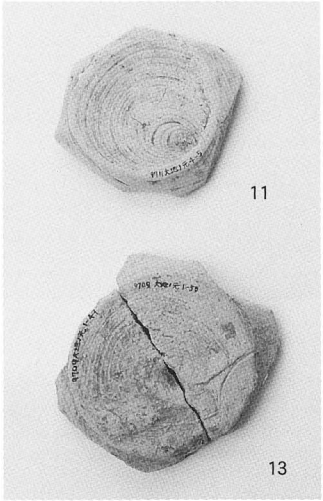


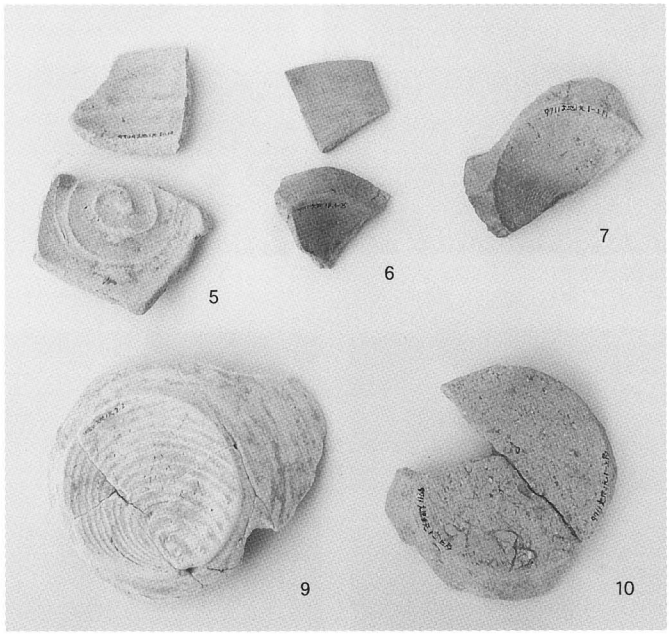
出土弥生土器・土師器

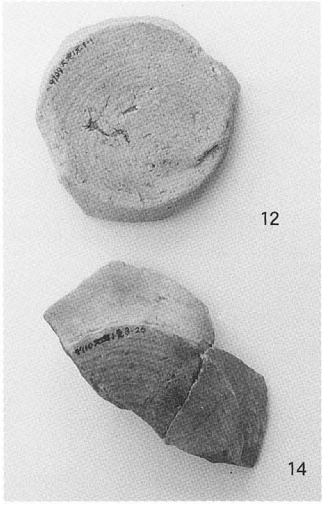


出土縄文土器



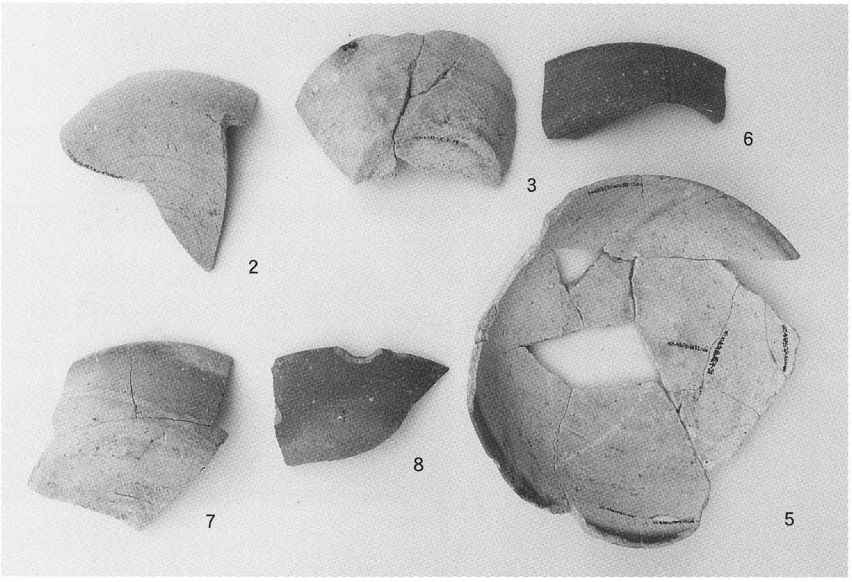


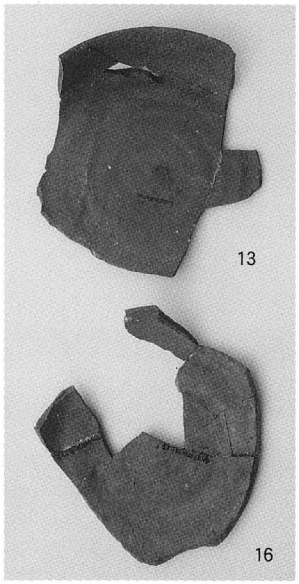


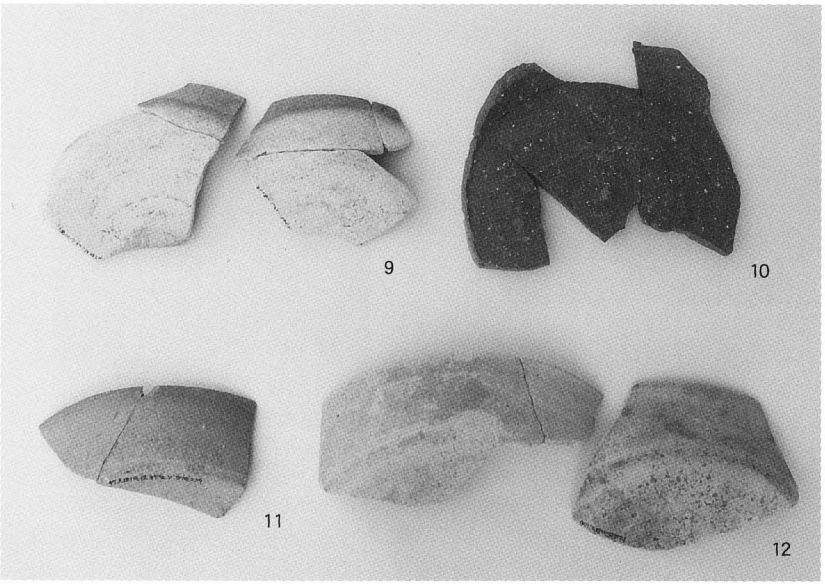


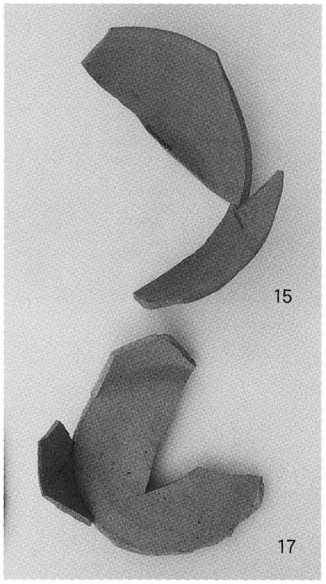
出土土師質土器

図－16

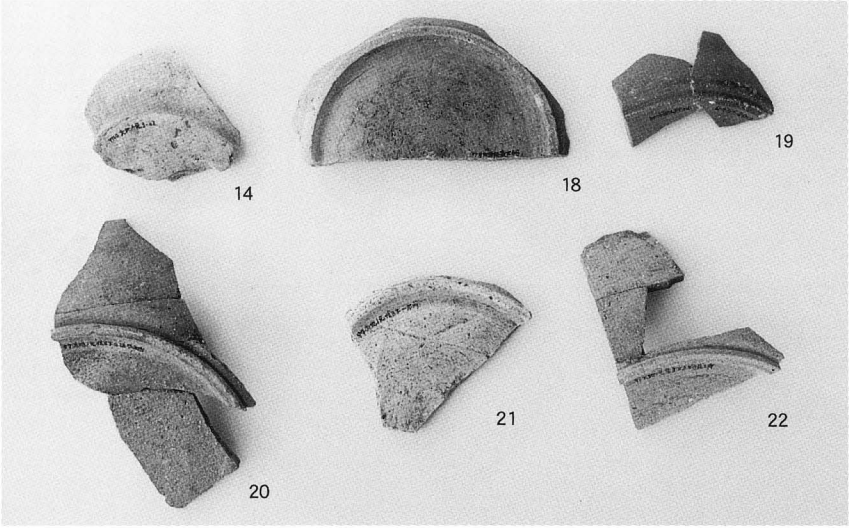


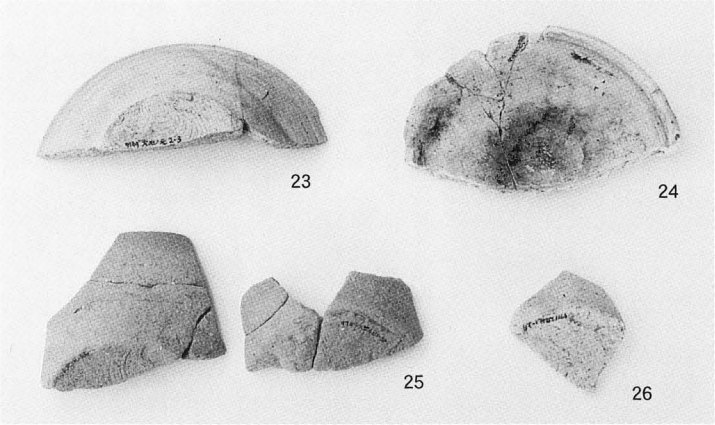


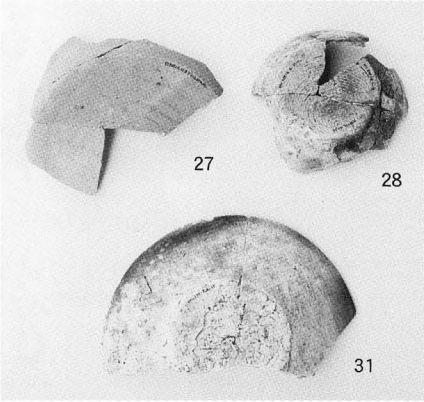


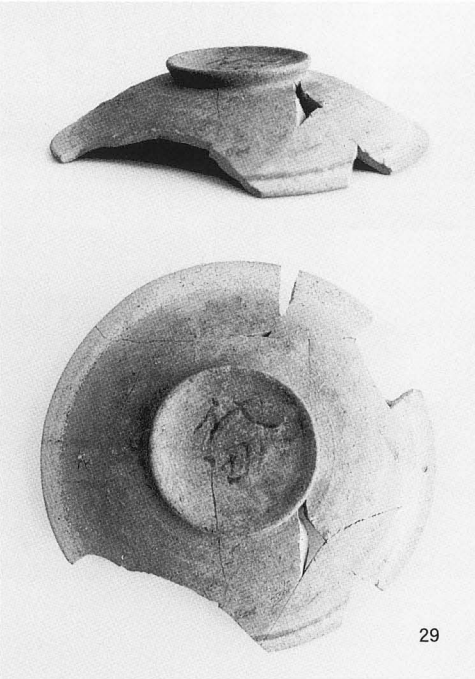


出土須恵器（1）

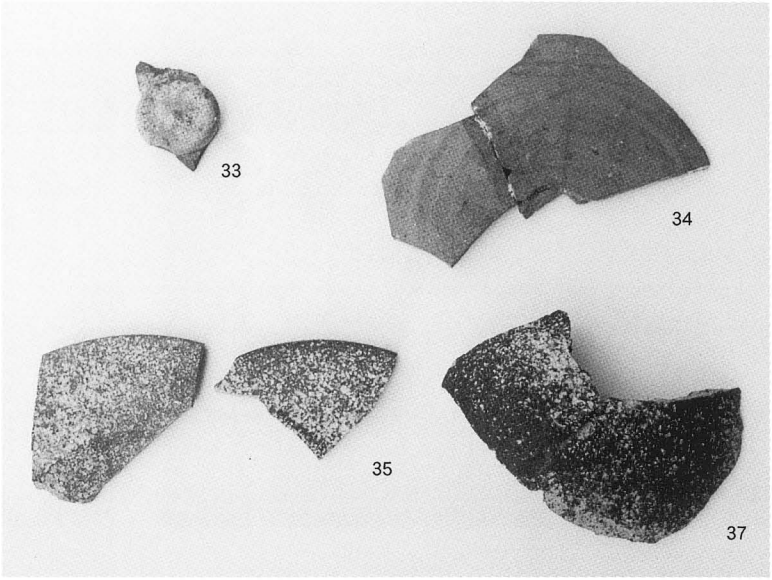


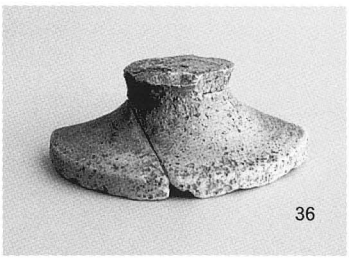


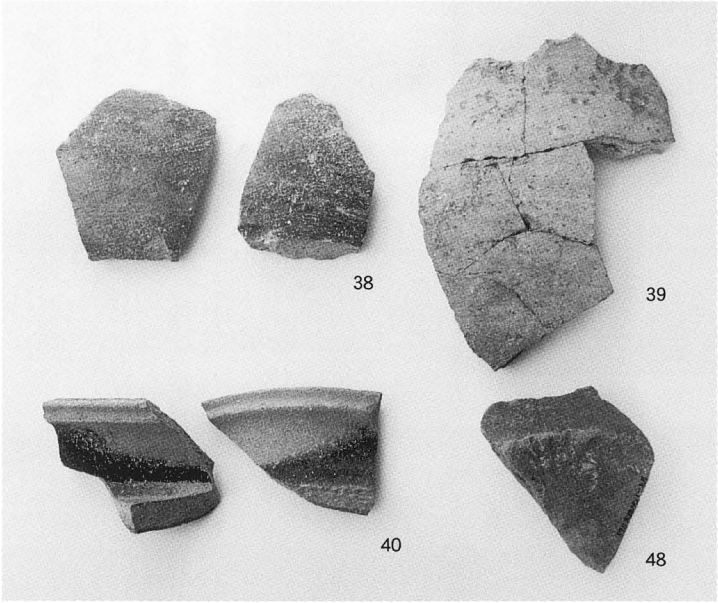


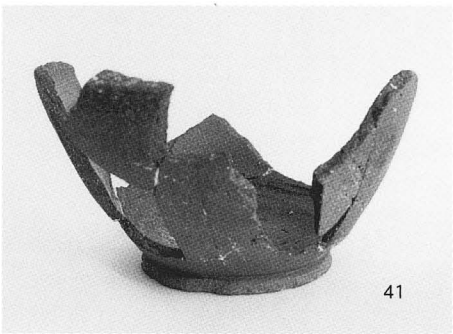


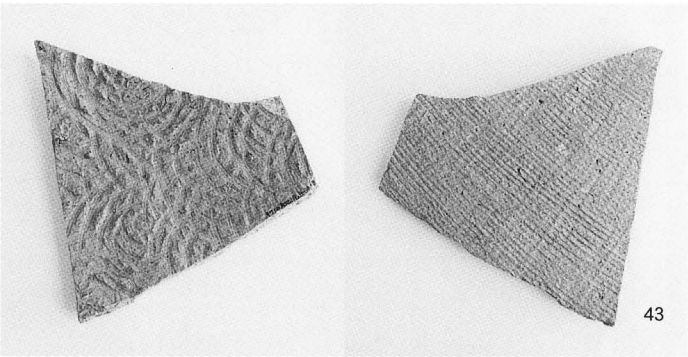
出土須恵器（2）



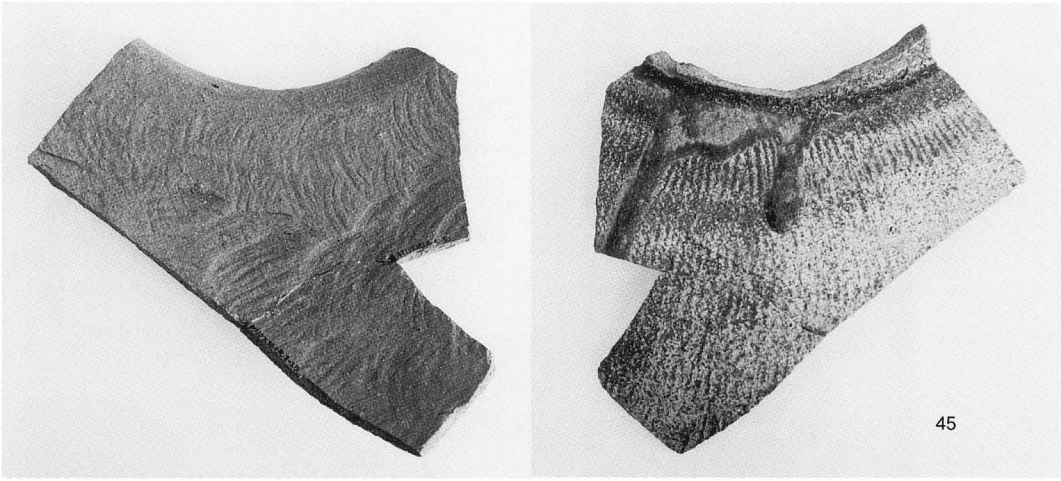


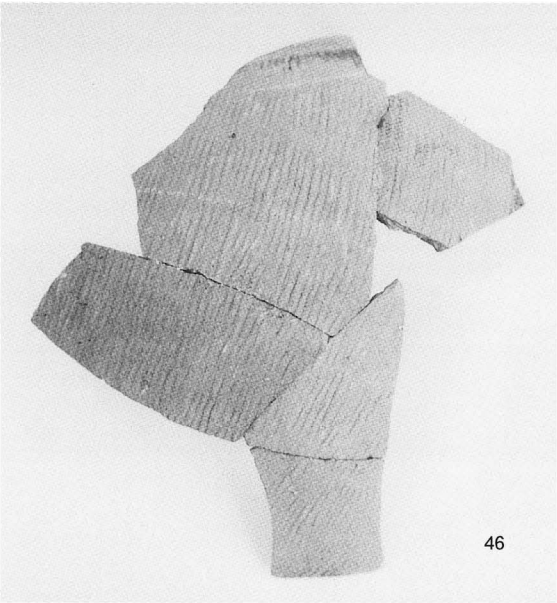


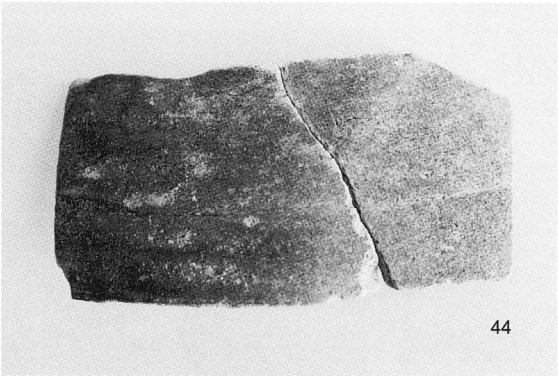


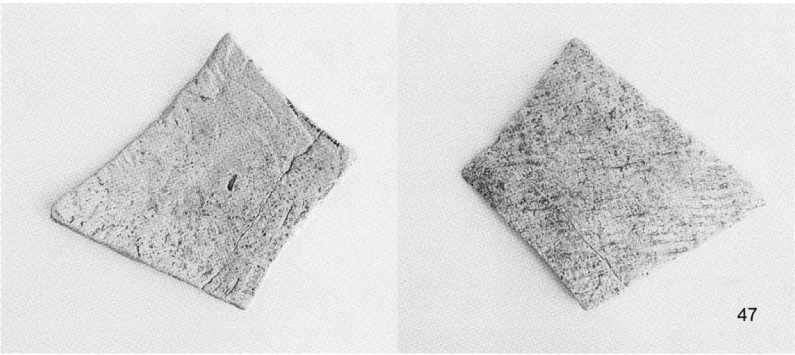


出土須恵器（3）

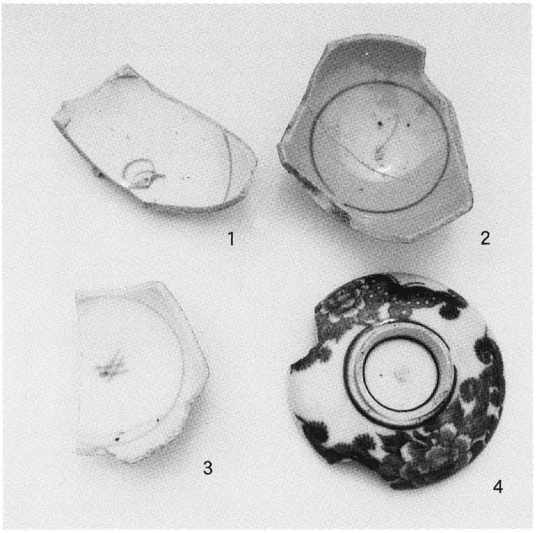


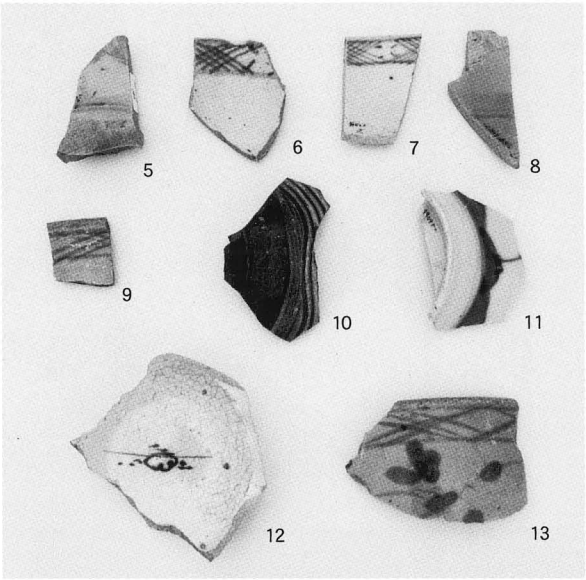


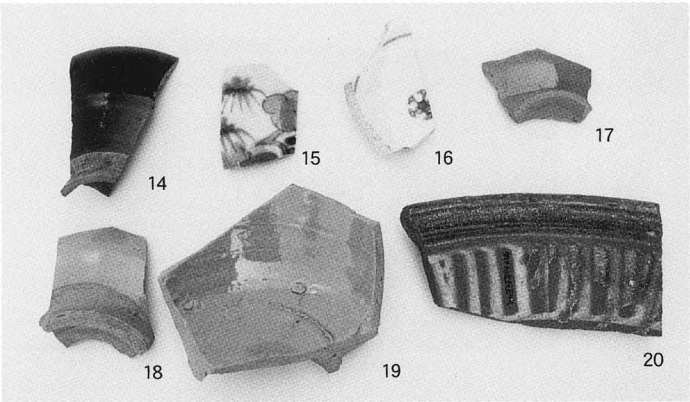


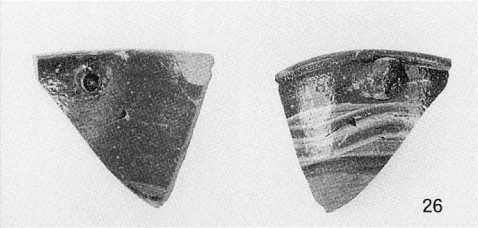


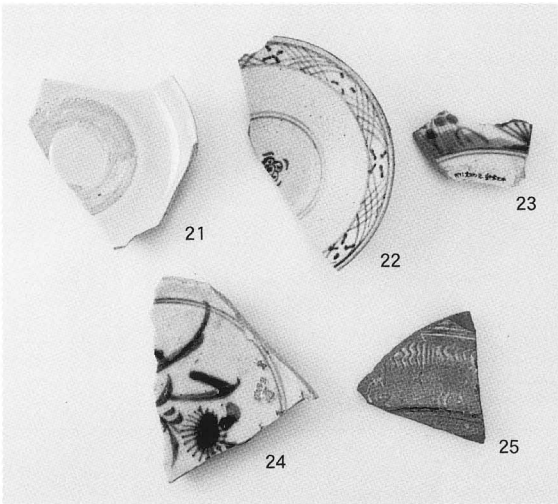
出土須恵器（4）

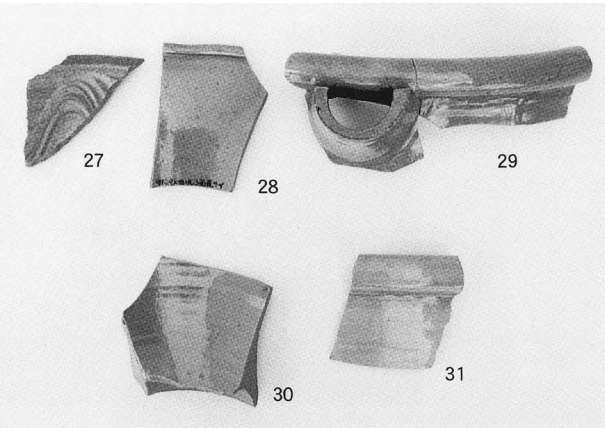

1
2
3
4


5
6
7
8
9
10
11
12
13

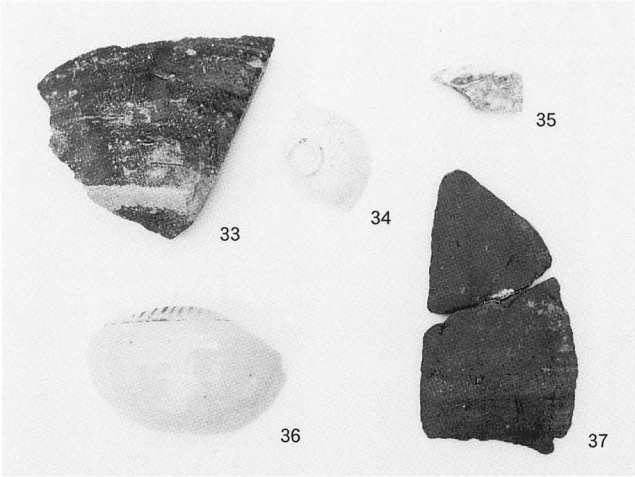

14
15
16
17
18
19
20

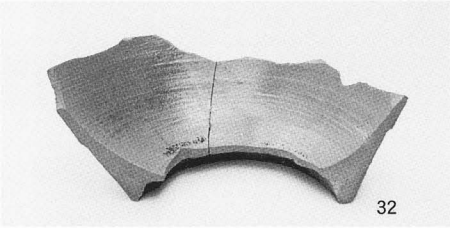

26

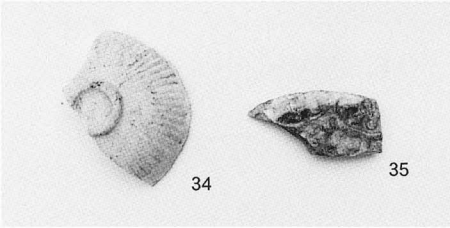

21
22
23
24
25

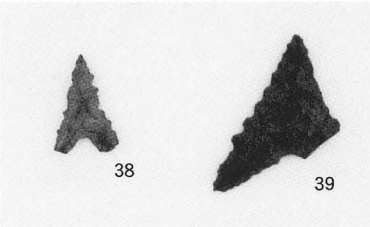

27
28
29
30
31

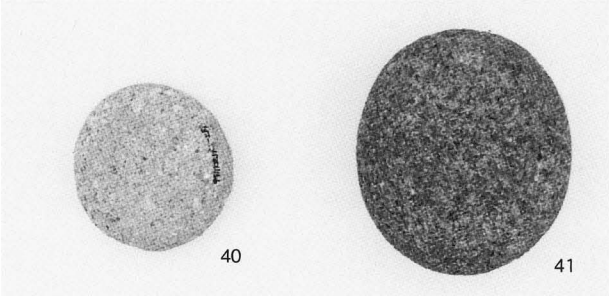
出土陶磁器

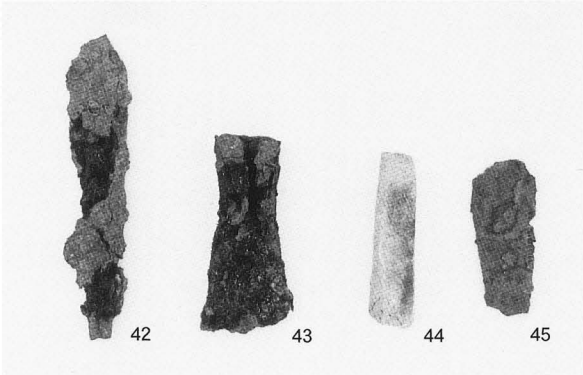


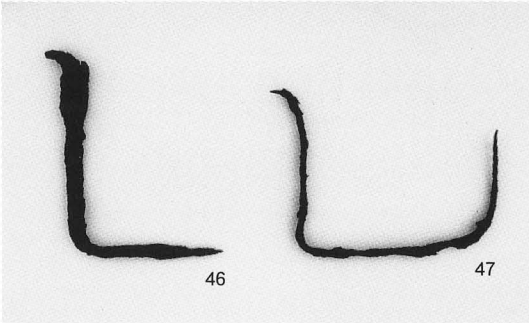


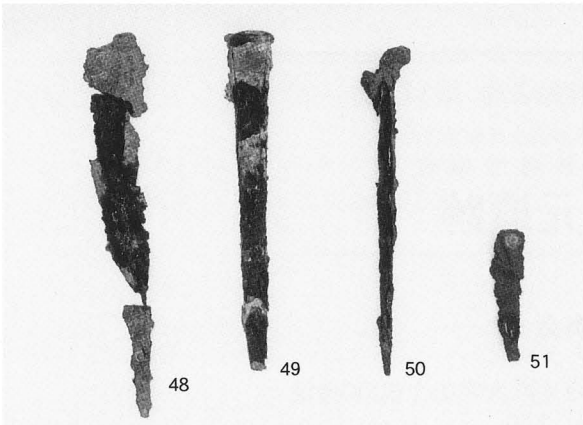


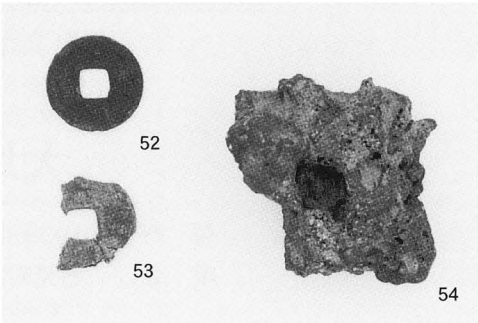












出土陶磁器・石器・鉄製品他

石見町文化財調査報告書 第17集

一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

大地ノ元遺跡

発　行　1999年3月

編　集　**石見町教育委員会**
〒696-0192
島根県邑智郡石見町大字矢上6000番地
TEL（0855）95-1210

印　刷　柏村印刷株式会社